ISSN 0910—3791

梅　神

研　究　紀　要

第 6 7 号

平 成 7 年 3 月

身延山短期大学学会

梅　神

研　究　紀　要

第６７号

平成７年３月

身延山短期大学学会

巻頭言――身延山大学開校にあたり

本学同窓生、本学々生諸聖、諸子の宿願であった四年制大学の昇格は諸審査、手続を円成し昨平成六年十二月二十一日をもって、身延山大学仏教学部として認可された。

本学の建学精神「行学二道」の行は「給仕・行法」であり、学はこの行を内容とし、この両者は相依相関して識得し信解され、更に体得色読されるものである。

仏祖三宝に対する給仕は精進・忍耐・慈譲を内容とするもので、先師は僧徒・講衆（僧俗）が妙法弘通のために互いに思い合い、思い合せ異体同心に利他の行願に乗ずることであると慈誡を加えている。

いま、社会一般が学校に求める学問は知育に偏し、徳育による人間性格の涵養を忘却している。本学の学生は弘道の法器である。精進・忍耐・慈譲の修行によって得た心地を体現し、更にこれによって信仰を確立していくことができる。いわゆる

従レ行入レ行　依レ行得レ信

行より行に入り、行に依って信を得

このような心得、心の持ち方を学生に会得させたい。本学昇格審査にあたって行学二道の学是をのべたとき、今日の一般大学が知識偏重の教育方針をとるのは当然であるが、仏教系大学が修行精進の徳育を忘れている中で行学二道を高調されることは現下の教育界における光明であると高い評価を得た。

今、さらにわれわれは本学建学の精神をかえりみて求道給仕の精進に邁進することを誓願したい。

平成七年三月

学長　宮崎英修

棲神　第六十七号　目次

巻頭言……学長　宮崎英修

法華経における法の語の使用例
——序品・方便品に関して——……望月海淑（7）

日蓮聖人後期の曼荼羅について(三)
——授与者を通しての動向——……上田本昌（23）

『開目抄』に現われた一念三千義について(二)……桑名貫正（39）

胸に彫られた竜とメドゥーサ
——東西文化の比較対照——……高橋堯昭（57）

古代インドの歴史意識……町田是正（81）

明治四年・岡山県における農民騒擾に関する裁判資料（五・完）……中山光勝（103）

高座石祖師堂と祖師講中……奥野本洋（113）

Ratnākarasānti's Sūtrasamuccayabhāṣyaṃ Ratnālokālaṃkāra（Ⅲ）
……望月海慧（1）

学園彙報……（135）

編集後記

法華経における法の語の使用例

——序品・方便品に関して——

望月海淑

1

法華経は、その経題に「法」という一語が入っている故なのか、経典を通しても法の語を沢山に見ることが出来る。おおよその数ではあるが、序品では四十四ケ所、方便品では七十七ケ所、譬喩品では五十七ケ所、信解品では十九ケ所、薬草喩品では三十四ケ所、授記品で二十一ケ所、化城喩品で五十九ケ所、五百弟子授記品で二十四ケ所、授学無学人記品で二十三ケ所という使用例を数えることが出来る。

しかして、法華経の十号の一つだといわれるものに妙法蓮華教菩薩法仏所護念という一句がある。これに対する梵文は saddharma-puṇḍarīkaṃ dharma-paryāyaṃ sūtrāntaṃ mahāvaipulyaṃ bodhisattvâvavādaṃ sarva-buddha-parigrahaṃ（妙法蓮華の法門という、菩薩を誡しめ一切の仏が保持する偉大な広がりの経典）となっている。ここで妙法にあたるものは saddharma であるが、教菩薩法の法にあたるものは avavāda であり、vāda は√vac から作られた言葉で、√vac は話す、告げるというような意味をあらわすために使われるものであるから、vāda は言葉とか発言等を意味し、それに上から下にという意味をあらわすために使う ava という接頭語がつけられている

から、誰かが誰かに何かを伝える言葉という意味あいになる。そこでこの言葉は仏が菩薩に対して伝える教え、教示と理解され、教誡（いましめ）と捉えられているものである。したがって教菩薩法は dharma ではなく、釈尊が菩薩たちに垂れた教誡ということであった。そして梵文では dharma-paryāya（法門）となされているが、この言葉に対する直接の訳は妙法華経には見られない。教誡があり法門があるので、まとめて教菩薩法としたのだろうか。

しかし今は、このようなことを詮索することに目標があるのではなく、法華経において沢山に見られる法という言葉も、一様に dharma の訳語として処理してはいけないのではないか、ということの解明にあることを記しておきたい。

このことのためには、法華経における「法」の訳語が、どのような意味をもち、どのような場面で、どんな言葉から訳されたものであるかを探るべきであろう。こうした立場に立って資料篇という意味あいでもいい、こう思って、各場面でのあり方を順を追って例記しだしてみた。ところが冒頭の使用例の多さの通り、これは大変な分量、したがって頁数を必要とし、序品と方便品だけで本誌が私に割き与えてくれるであろう頁数を、はるかに越えてしまうであろうことが分った。そこで止むなく全ての場面での例記をあきらめ、標準的なものを例記し、特に異なった場面を中心にみていこうという次第であることをお断りしておきたい。

尚、以下、序品から順を追ってみていくわけであるが、経典からの引用について特に言及する以外は、妙法華経・正法華経・梵文法華経（Kern, Nanjyo 本）の順であり、引用文の下の（　）内の数字は、それぞれが掲載されている頁数である。又、法華経における法は経の題名であるために、又、法緊那羅王におけるような法は固有名詞であるから、これらはすべて除外することにする。

2

序品における「法」の使用例からみることにする。

耆闍崛山に座られた釈尊は教えを説かれない。何故かと思った時、大地が震動するなどの不思議なことがおこり、釈尊は眉間の白毫から光りを出し東方の世界を映し出され、その土においても諸仏が教えを説いておられる様を現出された。その時の各世界での仏たちの働きに関して、

及聞二諸仏所説経法一（2中）

十方諸仏所説経法（63下）

yaṃ ca te buddhā bhagavanto dharmaṃ deśayanti sa ca sarvo nikhilena śrūyate sma（6）（かの尊き仏たちが法を説く、それがすべて完全に聞こえた）

とあり、更にこれに続けて、講二説正法一（2下）、敷演　於此仏法（64上）prakāśayantāninn buddha-dharma（9）とか、講レ法（3上）、講法（64下）、dharmaṃ vadanto（12）とか示されている。これらは覚りを開かれた仏が教えを説くというもので、法 dharma の基本的なあり方に立つものであろう。

では法 dharma とは何か、明白ではないが、序品の最初の偈の中には、

以二千万偈一　讃二諸法王一（3上）

以数千偈　歎人中生（64下）

gāthā-sahasrehi jinēndra-rājam（12）（千の偈において勝者たるインドラ王を……）

とあり、妙法華経はこの jinendra-rāja をもって法王と訳したことを示している。梵文では仏のことをジナ jina（勝者）となすことは良くみられるところであり、インドラはバラモン教においては天にいます最高の神としての信仰を集めるところでもあるから、ここでの表現は仏のことであり、仏は法王と称せられるが故なのだろうか。

このような立場に対して次の一句にはいささかな違いがみられる。

惑有菩薩　説寂滅法　種々教詔　無数衆生　或見菩薩　観諸法性　無有二相　猶如虚空（3中）

或有得人　寂然法誼　察諸報応　衆億兆載　発起民庶…　志願仏道　暁了観察　不秘恪法　滅除三事　寂等如空（65上中）

dharmaṃ ca ke-cit pravadanti śāntaṃ dṛṣṭānta-hetū-nayutair anekaiḥ | deśanti te prāṇa-sahasra-koṭi-nāṃ jñānena te prasthita agra-bodhim || nirīhakā dharma prajānamānā dvayaṃ pravṛttāḥ khaga-tulya-sādṛśāḥ（14）（あるものは那由他以上の因縁において寂滅の法を語り、千万億の人々に智によって覚りを説く。空行く鳥のように両者にかたよらず nirīhakā な法を知って……）[1]

と述べられるのがそれである。妙法華経によって寂滅法と訳されたものは dharmaṃ śāntaṃ であることは明白だが、諸法性にあたるものは nirīhakā dharma である。nirīhakā について、Edgerton は「しばしば空 śūnya と組み合わせて使われる」[2]のだとして、その例として右の梵文法華経の文章が挙げられている。この意見からすると、諸法性という訳語の背景には、空というものの見方、すなわち一切のものは変易性においてあり固定的実体的なものなどはないのだ、という立場があるのではなかろうかと思われる。いいかえると法というものは仏の教えであることは間違いないが、それは空という釈尊（仏教）の根本理念にかかわる見方の上に立つものだというありようが考えられ

る。

かくて所得妙法（3下）、微妙法（65下）、agra-dharma（16）（最高の法）を仏を説くのか、と弥勒菩薩は質問し、文殊師利菩薩は、説大法。雨大法雨…（3下）、敷大法演無極典。散大法雨…（65下）、mahā-dharma-vṛṣṭy-abhipravarṣaṇaṃ …（16〜17）（大法の雨をふらし…）とし、この大法は難信之法（3下）、洗除俗穢聞服仏法（65下）、vipratyanīyaka-dharma-paryāyaṃ（17）（難信の法門）だと指摘し、かるが故に四諦法、十二因縁法（3下、65下66上、17）という具合に、種々な教えの説き方を示してみせて来たのだという過去における日月灯明如来の古事にふれられた。そして、この仏の会座にいた人々が、楽欲聴法（4上）、講説経法（66上）、dharmaśravanikās（20）（法を聞きたい）としたので、法華経を説かれたのだとし、今の釈尊のありようはこの時の仏のありようと同じだから、再び法華経が説示されるであろう、としている。

この後の序品の偈は、この説示のくり返しであるから、仏が法を説くとか、法座の上でとか、深法の義とかに言及しているが、これらはすべて dharma についての訳語である。（4中下、66中下、23 24）

しかし、その偈の中で七十二偈と七十九偈とには、いささか注目すべき点がみられる。すなわち七十二偈は

又見諸菩薩　知法寂滅相　各於其国土　説法求仏道（4下）

其心寂然　各以縁便　多所開化　無数仏界　広説経法（67上）

bhūtaṃ padaṃ śāntan anāsravaṃ ca prajānamāvāś ca prakāśayanti | deśenti dharmaṃ bahu-loka-dhāt-uṣu sugatânubhāvād iyam īdṛśī kriyā ||（24）（寂静にして無漏なるありのままな言葉を知って説き、沢山な世界において善逝はこのような神力をもって法を説く）

法華経における法の語の使用例（望月）

と示され、七十九偈には

諸法実相義　已為二汝等一説（5上）

講説経典　自然之誼　顕示衆庶　此正法華（67上）

prakāśitā me iya dharma-netrī ācakṣito dharma-svabhāva yādṛśaḥ（25）（法の眼を説き、法の本性がどのようなのかを語った）

と示されている。このうち七十二偈での知法寂滅相は bhūtaṃ padaṃ śāntan anāsravaṃ を訳したもので、説法は deśanti dharmaṃ を訳したものである。すなわち前者は先述の説寂滅法につながる内容のものと思われる。七十九偈の諸法実相義は、dharma-netrī と dharma-svabhāva とを訳したものと思われるが、特に法の自性たる svabhāva が実相にかかわるものであろうが、ともに改めての検討を要するものであろう。

そして序品の偈末に近く、日月灯明如来が光明を放った理由にふれて

今仏放光明　助発実相義（5中）

建立興発　講説経法　自然之教（67下）

saṃsthāpanaṃ kurvati śakya-siṃho bhāṣisyate dharma-svābhāva-mudrām（28）（釈迦の獅子は、安住せる法の自性の印を説くであろう）

と述べ、法華経が釈尊によって説かれるであろうことを予言している。ここでの実相義は dharma-svābhāva-mudrām の訳であることは明白で、これを正法華経は自然之教と訳しているが、法というものは自然のありようにかかわるものであり、又、実相ともいわれるべきものを含んでいるということなのであろうか。

3

方便品には、さすがに法に関する説示が多い。今はそれらを順を追って見て行くことにする。

三昧から立ち上った釈尊が、舎利弗にむかって仏に智慧について語っているが、仏が体得した智慧について、それは

諸仏無量道法…　未曽有法…　一切未曽有法…　無量無辺未曽有法…　難解法（5中下）

仏法慇懃労苦精進…　一心脱門三昧正受不可限量…　所説経典不可及逮…　未曽有法（68上）

bahu-buddha … cīrṇa caritāvino … āścaryâdbhuta-dharma-samavāgatā durvijñeya-dharma-samavāgatā durvijñeya-dharmânujñātavinaḥ … adbhuta-dharma … vividha-dharma … āścaryâdbhuta-prāptāḥ（29）（諸仏の行を行じ…未曽有の法を具足し、理解しがたい法を具足し、理解しがたい法を受け、…未曽有の法…種々な法…希有な法に到達した）

として、この仏の智慧は仏と仏とのみが究尽するものだとし、五種法（十如是）を展開している。

諸法実相。所謂諸法如是相。如是性。如是体。如是力。如是作。如是因。如是縁。如是果。如是報。如是本末究竟等（5下）

如来皆了諸法所由。従何所来諸法自然。分別法貌衆相根本智法自然。（68上）

tathāgata eva Śāriputra tathāgatasya dharmāṃ deśayed yān dharmāṃs tathāgato jānāti | sarva-dharmān api Śāriputra tathāgata eva deśayati | sarva-dharmān api tathāgata eva jānāti | ye ca te dharm-

a yathā ca te dharmā yādṛśāś ca te dharmā yal lakṣaṇāś ca te dharmā yat svabhāvāś ca te dharmāḥ | ye ca yathā ca yādṛśāś ca yal lakṣaṇāś ca yat svabhāvāś ca te dharmā iti | teṣu dharmeṣu tathāgata eva pratyakṣo 'parokṣaḥ ‖（30）（舎利弗よ、如来こそは如来の法を説き、如来は法を知っている。舎利弗よ、如来こそは一切の法を説く。如来こそは一切の法を知っている。それらの法は何であり、それらの法はどのようであり、それらの法はどんなであり、それらの法はどんな相であり、それらの法はどんな自性をもっているのか。それらは何で、それらはどのようで、どんなで、どんな相で、どんな自性であるのか。如来こそはそれらの法において明白に知るものである）

この十如是は五種類の繰り返しであるところから、別に五種法と呼ばれるものであるが、法 dharma とはどのようなものであるかについて触れたものと思われる。尚、妙法華経には諸法実相の語が見えるが、梵文にはそれに直接に該当すると思われるものは見られない。しかし、五種法のあり方はものの見方であるから、諸法実相の内容に近いものかもしれない。

五種法（十如是）に続く偈の中において、仏は法がどのようなものかについて触れている。すなわち、

及仏諸余法　無二能測量者一…　甚深微妙法　難見難可了…　是法不可示　言辞相寂滅（5下）

如諸仏法貌　莫有逮及者…　入於深妙誼　所現不可及…　其身不可見　亦無有言説（68上）

yādṛśā buddha-dharmāś ca na Śakyaṃ jñātu kena-cit … gambhīrā cāiva sūkṣṇā ca durvijñeyā sudurdṛśā … na tad darśayituṃ śakyaṃ vyāhāro 'sya na vidyate（30～31）（仏の法がどのようなものか知りうる者は誰もいない……深く微妙にして理解することは非常にむずかしい……それを見ることも出来ないし、話すことも出来ない）

であって、法というものがどんなものなのか言辞相寂滅で説明することなどは出来ないのだ、というのであるが、法

がこのようにいわれる時、法とはこの世にあるもの、この世の姿などを見るための、ものの見方にかかわるものであることを示すのではなかろうか。それ故に

於億無量劫　欲レ思仏実智一　莫レ能知二少分一（6上）

欲察知仏　所説解法　於億那術　劫載計念　未曽能知（68中）

kalpāna koṭi-nayutān anantān na tasya bhūtaṃ parijāni artham（32）（千万那由佗劫の無限の間、真実を知ることはないであろう）

といわれるのであろう。仏の慧でなければ真実にしてありのままなものは、見極めがたいからであろう。

又能善説レ法……甚深微妙法……於二仏所説法一　当レ生二大信力一　世尊法久後（6上）

講説経法　分別其誼……安住所説（68中）

yo dharma sākṣāt sugatena dṛṣṭaḥ … gambhīra dharmā sukhumā pi buddha … yaṃ Śāriputra sugataḥ prabhāṣate adhimukti-saṃpanna bhavāhi tatra | ananyathā-vādi jino mahā-ṛṣī cireṇa pī bhāṣati uttamārtham（33）（善逝によって見られた法を……仏の深妙な法は……舎利弗よ、善逝が語ったものを信解せよ。偉大な聖仙であるジナは誤りなく語り、長いこと最高の意義を語る。）

ここでの最後は誤りなく意義を語るとあって、法には言及されてはいない。ジナとは仏のことであるから、仏の言葉は誤りないもので法そのものだという立場であろう。

仏は何故に方便を称歎したのだろうか、声聞縁覚たちは疑念をおこすが、その時の内容には、

仏所レ得法……得二此法一……難解之法……不可思議法……道場所レ得法（6中）

如来深妙軽業……於是仏法……深妙法……顕現大聖法……欲分別深法（68下）

gambhīraś cāyaṃ mayā dharma 'bhisaṃbuddha …… vayam api buddha-dharmāṇāṃ lābhino …… gambhīraś ca me dharmo 'bhisaṃbuddha iti …… bodhi-maṇḍaṃ ca kīrtesi pṛcchakas te na vidyate …… saṃdhābhāṣyaṃ ca kīrtesi ……（33・34）（私によって覚られた深妙な法……我々は仏の法を得た……覚りの壇を称讃し、随時の説を称讃する）

とあるが、この中、難解之法に該当するところで、梵文法華経は、dharma-saṃśaya（法の疑い）upāya-kauśalya-jñāna-darśana-dharma-deśanāṃ（善巧方便の智慧による法の説示）dharma-paryāya（法門）tathāgata-dharmasya（如来の法）などの語が示されている。かくて代弁した舎利弗は、

為二是究竟法一……時為如レ実説（6中下）

究竟至泥洹　今復聞此法……唯願演分別　雷震音現説（69上）

と語るが、ここで示される法については梵文には該当する語がなく、如実説に関しては、udāharasya yatha eṣa dharmaḥ（36）（この法のままに説け）と示されているから、この法が前者の法にあてはまるのかもしれないが、yatha dharma という言葉の表現は法に関する何かを暗示するものかもしれない。

かくて方便品の説示は三止三請に入るのであるが、舎利弗が請い、釈尊が止めるというやりとりの中において、

是会無量衆　有二能敬信一者……止止不二須説一我法妙難レ思（6下）

此出家者　衆庶億千　恭粛安住　欽信慧誼　斯之等類　必皆欣楽……且止且止　用此為問　斯慧微妙　衆所不了（69中）

śraddhā prasannāḥ sugate sagauravā jñāsyanti ye dharmam udāhṛtaṃ … alaṃ hi dharmeṇ 'iha bhāṣit-ena（36）（敬しく善逝を信じ、浄信し、善逝が説いた法を知るでありましょう。…止めよう、法について語ることを）

として、舎利弗は法が説かれれば信ずるというのに対し、釈尊は法が説かれても信じないであろうから説けないとしている。しかし舎利弗は法 dharma を説いて欲しいとくり返してお願いをしている。かくて釈尊が舎利弗の請を入れて説こうとした時、五千人の人々が退席するという五千起去がおこる。この五千人は未得謂得、未証謂証だというが、信仰 śraddha の核心に安住することのない増上慢の人々であった。そして信仰の確立しているものたちだけとなったからといって、教えを説かれる。

この三止三請とそれに続く五千起去との間において注意しておくべきことは、舎利弗が法を敬信する（śraddadhā-syanti ti dharma）と繰り返すことであり、世世に已に化を受けた（pūrva-bhaveṣu paripācitāni）といわれることであり、仏の長子（jyeṣṭha-puta）だということであろう。

敬信するというのは、一心に信ずるということであり、世世に化を受けるというのは、前世からの三世に亘る長い仏との関係を意味するものであり、長子というのは、その仏と弟子との関係がただならざるもの、切っても切れない深いものであることを意味するからである。[3] そして、このような立場の上においてこそ、

汝等当し信仏之所説言不二虚妄一（7上）

爾等当信如来誠諦所説深経。誼甚微妙言輒無虚。（69中）

śraddadhata me Śāriputra bhūta-vādy aham asmi tathā-vādy aham asmy ananyathā-vādy aham asmi（36）（舎利弗よ私を信じよ、私はありのままに語るものであり、そのように語るものであり、誤りなく語るものである）

といわれるのであろう。これは仏が語る法について言及したものであるから、所説言不虚妄といわれるのは法そのものであり、その法は bhūta-vādi といわれるものであることに注意が必要である。法とは教え、真理等の意をもっているが、その法はまた、ありのまま bhūta なものであるという意も汲み上げておかなければならないと思われるからである。それ故、この法は思量や分別によって知られるものではない、といわれるのであろう。

かくて但教化菩薩、一仏乗にして二も三もなしとされるが、ここでは

一切十方諸仏。法亦如是（7中）

十方世界諸仏世尊。去来現在亦復如是（69下）

sarvatrāṣā Śāriputra dharmatā daśa-dig-loke（40）（舎利弗よ、十方世界のすべてのところに、この法性はある）

法が dharmatā として表現されている。そしてまた方便品の長い偈の中においては、仏は一切世間を照らすように人々に尊ばれて

為説二実相印一（8中）

為講説法　自然之印（70下）

deśem' imāṃ dharma-svabhāva-mudrām（44）（私はこの法の自性の印を説く）

とも示されている。dharmatā といい dharma-svabhāva-mudrā というのは、法 dharma が単に教え真理というのみならず、この世の姿の根源的なもののありようを見るための言葉としての意味を持っているように思われるのである。有名な

諸法従レ本来　常自寂滅相　仏子行道已　来世得作仏（8中）

令一切法　皆至寂然　又復過去　諸仏之子　当来之世　得成最勝（70下）

evaṃ ca bhāṣāmy ahu nitya-nirvṛtā adi-praśāntā imi sarva-dharmāḥ……（48）（このように私は、一切の法は常に滅するもので、最初から寂滅のものである…と説く）

は、法は常滅のものだとしているのは、このような意味あいを含んでいるからではなかろうかと思われるのである。

かくて方便品の偈は、仏像や仏画によって仏の姿を描き彫刻しただけでも仏道を成ずるのだと説示した上で、過去・現在の仏と同じように未来の仏も人々を導くために種々な教えを説いても最後は一仏乗を説くのだとなし、

諸仏両足尊　知二法常無性一　仏種従レ縁起　是故説二一乗一　是法住二法位一　世間相常住（9中）

諸仏本浄　常行自然　此諸誼者　仏所開化　如両足尊　乃分別道　故暢斯教　一乗之誼　諸法定意（72上）

sthitikā hi eṣā sada dharma-netrī prakṛtiś ca dharmāṇa sadā prabhāsvarā | viditva buddhā dvi-padānam uttamā prakāśayiṣyant' imam eka-yānam ‖ 102 ‖ dharma-sthitiṃ dharma-viyāmatāṃ ca nitya-sthitāṃ loki imāṃ akampyāṃ | buddhāś ca bodhiṃ pṛthivīya maṇḍe prakāśayiṣyanti upāya-kauśalam ‖ 103 ‖（53）（これらの法眼は常にあり、法の本性は常に輝いている。最高の仏陀両足尊はこれを知って、一乗を説くであろう。法住・法位にして常にこの世にあり、不動なることを仏たちは語り、大地の座で方便を説くだろう）と述べている。ここでの法は dharma の訳であるが、法は常に無性だといい、法住法位にして世間相は常住だという言葉は、仏種は縁によって起るという言葉とともに、法とはどのようなことを意味しているものなのかを知るために、極めて重要なものだといいうるであろう。

尚、このことに関しては、稿を改めた論文が別の機関において掲載される筈であるので、ここでの詳述はしないこ

とにしている。

この外、法に関する説示は、方便品において数多く認められる。しかし、その多くは「不レ能レ信」是法」」「得」是無上法」」「最妙第一法」「無分別法」といった具合の説示に見られるもので、教え、真理といった意味での法としての範疇を出でるものではないと思われる。

しかし、方便品末の偈の中には、

如三世諸仏　説法之儀式　我今亦如是　説無分別法（10上）

亦如往古　諸仏大聖　亦如当来　最勝之法　吾復如是　蠲棄衆想　然後爾乃　請天尊法（72下）

yathāva teṣāṃ purimāṇa tāyināṃ anāgatānāṃ ca jināna dharmatā | mamāpi eṣāva vikalpa-varjitā t-athāva haṃ deśayi adya tubhyam ‖（57）（前世の聖者、未来の勝者たちの法性のように、私の（教え）は二者択一を除くものだ、と今日、汝に説く）

と示されている。二者択一というのはあれかこれかと選びようがないものだから、無分別の法であり、諸天の尊法なのであろうが、三世諸仏説法之儀式と訳された法とは dharmatā の訳であったことを示している。dharmatā をここでは仮に法性と訳しておいたが、それは法そのものを意味するであろう。法そのものだから三世の諸仏の法になるのであると思う時、法とはこの世の創世とともにある理法のことを意味するのではなかろうかと思われる。

尚、この小論は名の如く資料篇を目指すものであった。すなわち序品から初まり、少くとも譬喩品まで、出来うれば第一期成立の法華経といわれる授学無学人記品までにおける法の使用例を例記したい、というのが念願ではあったのだが、私に与えられた紙数が尽きてしまったので、特に方便品に関しては一瀉千里の書きようになってしまい、譬

喩品以降については手をつけることもなく終ってしまった。まことに申し訳けないことであるが、新たなる機会を得たいと思う。[4]

〔註〕

（1）たとえば、松濤誠廉・長尾雅人・丹治昭義訳の『法華経Ⅰ』には、「あたかも空行く鳥のように、汚れにそまらぬ善逝の息子たちは、（すべての）ものは動かないものであり、（しかも）差別をもってあらわれるものであることをさとっている」（20）とあり、岩本裕訳の『法華経上』には「中庸の教えを遵奉し、鳥が空に触れないように、二者を扱い、仏の息子らは汚されることなく」（35）と訳されている。

（2）Edgerton『Hybrit Sanskrit Dictionary』「offen associated with sūnya」

（3）拙論文「法華経方便品の『敬信』の語をめぐって」（『法華経の受容と展開』）、「「本ト願を立ッ」考」（「棲神五十六号」）等。

（4）尚、この論文を補うものとして、『勝呂信静先生古稀記念論文集』に執筆の機会を与えられたので、「法華経における法―序品・方便品における―」を提出することにした。その論文は、箇々の問題点を取り上げ言及し、法とは何か、どのようなものかを探ろうとしたものであるので、併せてお読みをいただきたい。

日蓮聖人後期の曼荼羅について（三）

――授与者を通しての動向――

上田本昌

一、

弘安三年五月に入って身延山の西谷には、駿河を中心として近郷からの出入りが活溌になっていったようである。先ず四日には妙心尼御前、十八日には妙一尼御前を始めとして二十六日には富木、二十九日には新田等の諸氏より種々の供養品が届けられ、その礼状等が発せられている。

また此の間にあって、八日には二幅の曼荼羅本尊が図顕せられている。その一つは「沙門日華授与之」とある第九二の三枚継ぎからなる御本尊である。これには「甲斐国蓮華寺住僧寂日房者、依為日興第一弟子所申与之如件」という日興の添書が大増長天王の左右に小文字で記されている。寂日房という房号をもった人は、日蓮聖人の在世当時に二人いたことが判明している。一人は寂日房日華で、もう一人は寂日房日家である。従ってこの場合は寂日房日華の方に授与されたものと考えられる。日興の弟子で身延の地元である甲斐の蓮華寺に住していたことがわかる。「大本門寺重宝也」と大広目天王の左側に小文字で添書があることからすると、富士の本門寺重宝として奉安されていたものとも考えられる。首題と四天王、並に梵字とご署名・花押が太字で雄渾な筆跡を示し、弘安式を代表するものの一

幅といえる。「沙門日華」については詳しいことは不明であるが、同じ寂日房でも日家の方は、聖人より『寂日房御書』を賜っており、一説によると上総国夷隅郡興津の領主の子で、七歳の時に出家したとも伝えられている。[1] しかし日華は日興を介して聖人の門下となったこと、甲斐国の住人で蓮華寺に住していたこと等の外は、あまりつまびらかでない。いずれにもせよ此の頃、西谷を訪れ聖人から御本尊の授与を得ていたことには間違いはないものと考えられる。現在、京都の本能寺に此の御本尊は保存されている。

次に同じく五月八日の図顕による御本尊が沼津の妙海寺に保存されている。第九三の三枚継ぎで、右下の隅に授与者名が記されていたものを、削除したものであり、直接の授与者は不明である。前の第九二とほぼ同様であり、同日二幅の内の一幅である。日華と同道して西谷を尋ねた人への授与とも考えられないこともないが、確証はえられない。署名と花押が接しており、特に「蓮」の字は花押の中に収まって、此の期の特徴となっている。

さて、六月に入ると窪尼から粟の早稲が送られてきているが、俗日円に対して曼荼羅の授与がなされている。日付は不明であるが、四天王は省略されており、不動と愛染の二梵字が全紙の長さにわたって書写されている。これは此の月に書写された他の二幅と共通している。即ち第九四・九五・九六の三幅は共に六月の図顕で、同型式なところからするとこれまた同日の図顕かとも考えられる。「俗日円」については詳細不明であり、真蹟は小浜市の長源寺に所蔵されている。

第九五は左梵字の下に「俗藤原国貞」とあり、「六月日」の左に「法名日十授与之」と記されている。したがって藤原国貞・日十に与えられたことがわかるが、俗とはいえ法名をもった信徒として、熱心な門下の一人であったことがわかる。だがこの人物についての詳細は不明である。藤原姓からすると当時は地位をえていた人か、または武家で

あったかもしれない。真蹟は京都の本法寺に所蔵されている。もう一幅の第九六は愛知県実成寺に所蔵されており、左梵字の下に「俗日肝授与之」とある。この人も俗ながら日肝の法名を持っていたことから推察して、前二者と同様のことが考えられよう。即ち日円・日十・日肝の三名は、共に俗の身ながら日号を持ち、同型式の御本尊を、恐らく日を同じうして授与されている点から、なんらかの関係があった人々ではなかったかと考えられる。この中で日十だけが藤原国貞という姓名を明記されていることからすると、日円・日肝は日十の一門、又は同族であったかもしれない。なんらかの理由で西谷を尋ね、祈願のための曼荼羅を授与されたものとも推察される。聖人の門下がすべて日号を持っていたわけではないが、主な弟子を始め日妙・日女・光日等男女を問わず日号をもっていた人々は、皆篤信の徒であったことがわかる。[2] 前にも述べた如く、二梵字大書の型式は、主として祈願の為の図顕が多い。四天王を略して不動・愛染の二梵字（種子の形象化）大書は、例えば弘安二年十一月の第七〇から、同三年三月の第八〇までに八幅を数えることができる。この三幅もまた同様の趣旨をもって、同型式の二梵字大書となったものともいえよう。[3] 此の年は正月早々より特に法華経を信仰する人々に対して、他の宗団からの批難が強まっていったようである。正月二十七日の大田入道宛の御返事によると、真言の座主を中心として「此等人々は釈迦・多宝・十方の諸仏の大怨敵」[4]であり、「御讎敵なりと見えて候ぞ。我弟子等此旨を存て法門を案給べし。」と訓示している。また三月八日の上野殿に宛てた御返事によれば、「天の日月、八万四千の星、各いかりをなし、眼をいからして日本国をにらめ給ふ。今の陰陽師の天変頻りなりと奏し申是也。地天日々に起て大海の上に小船をうかべたるが如し。」[5]という状態であった。さらに七月二日の大田氏女房宛御返事によれば、「今の代は外典にも相違し、内典にも違背せるかのゆへに、二の大科一国に起て、已に亡国とならむとし候歟。不便不便。」[6]とあり、正法正師の敵多くして天変地天も連続し、まさに亡

国の様相を呈していたことになる。

このような時期に当り、藤原国貞を始めとする一族同門の信徒らに、法敵退散と災難を除くための祈願をこめた曼荼羅の授与があり、信心増進を勧奨されたことは当然ありえたこととして理解することができよう。

二、

八月に入って「俗日重授与之」の第九七の御本尊がある。四天王を備えた総勧請の型式であり、沼津市岡宮の光長寺に所蔵されている。丈五三・九、幅三四・二の一紙で小型に属しているが、筆法も雄渾で首題、四天王、二梵字、署名、花押は太字である。この月は内房女房からの御布施料十貫が届けられ、[7] 上野殿からは男子誕生の報が入り、日若御前と命名されている。[8]「俗日重」については、恐らくは富士近辺の信徒ではなかろうかと考えられる。すでに前年の弘安二年頃には、多い日には山中に百余人が集まってきて、法華経の読誦や摩訶止観の講義が開かれているので、この頃にもそうした百人からの僧俗が、聖人のもとに来て、聴講や読誦行が実施されていたことも推察されよう。或いは日重もそうした人々の中の一人であったかもしれない。尚、この御本尊から讃文の「仏滅度後二千二百二十余年之間云云」とあるのが、「三十余年」と改められるに至っている。

九月に入って三日には「俗日目」宛の第九八がある。これには又、日興の次のような添書が右下にある。即ち「富士上方上野弥三郎重満与之　日興」とあり、更に左下には「正和元年出家三郎左近入道也」とある。ただしこの両添書は左右の筆跡が違うようにも見える。直接の授与者である「俗日目」と、添書にある上野弥三郎重満と、出家三郎左近入道との関連が判然としない。弥三郎重満が正和元年出家して三郎左近入道となった、とも受けとめられるが、

さだかではない。日興の「本尊分与帳」によると、「一、富士上野弥三郎重光者、日興弟子也。仍申与之。上野殿家人也。」[9]とある。この弥三郎重光は先の弥三郎重満のことかどうかもつまびらかではない。もしも同一であるとすると、この「俗日目」なる人物は、上野殿の家人か、又はその周辺の存在ではなかったかとも考えられる。

一年前の弘安二年二月に図顕された第六〇の曼荼羅には、本誌先号にて述べた如く、「釈子日目授与之」とある。これはもちろん新田卿公日目のことで、「日興第一弟子也」といわれている大石寺二祖のことであるが、この「俗日目」は在俗の篤信であったことがわかる。現在京都の妙蓮寺に所蔵されている。富士方面の曼荼羅授与者には、このように日興関係の人々が多く、それだけ日興の教線が多くの地域に影響をもっていたことを物語っているといえよう。

次に九月八日には「優婆夷源日教授与之」の第九九番目がある。横浜市中区の某家で所蔵しているが、この御本尊については、延山二十一世寂照日乾・同二十二世心性日遠・同二十八世妙心日奠の三師が、それぞれに「御霊宝記録」や「御真翰入函之次第」等の中で、身延の重宝として記録に残している。[10]特に日奠の目録の中には、三十二世智寂日省が付け加えた文が残されている。それによると「弘安三年波木井日教授与之御本尊者云々」とある。乾・遠・奠の三師の記録には、共に「優婆夷源日教授与」とあるのに、省師に限って「波木井日教」とあるのは不審であり、更に三十三世の遠沾日亨の「西土蔵宝物録」には、「波木井日長授与」と記されていることも指摘されている。[11]

そうしてみると、この優婆夷の源日教なる人物は、地元の波木井氏の関係者であったかもしれないと推察できよう。そうでなければ「優婆夷」とあったものが、なんの関係もなく「波木井」に変わるはずがないと考えられるからである。また「源日教」とあるのは、周知の如く波木井氏は清和源氏の流れを汲むものであるから、特に不思議ではないともいえよう。ただ優婆塞ではなく優婆夷であるとすると、たとえ波木井氏の関係者であったとしても、当時女性で

「源日教」というのは、少々疑問が残るところである。日号を授けられた女性信徒は他にもいるので、別段のことはないが、「源日教」となると、男性の場合は当然であるが、女性の場合は珍らしいのではなかろうか。いづれにしても九月八日に源日教へこの御本尊が授与されたことは間違いないことであり、日教が西谷を尋ねていたことになる。

この九月は一日に松野殿女房から、白米や芋・梨子・枝大豆等の野菜類が送られてきており、六日には上野殿後家尼御前から、南条七郎五郎の死去の訃報が届き、十九日には光日尼へ、また翌二十日には大尼御前への御返事が記されている。源日教を入れると二十日間に、女性ばかり五人もの人々から、御供養や書信が届き、御返事や御本尊の授与がなされているのであって、西谷は信女・優婆夷を中心とした交信が盛んであったといえよう。身延時代九年間を通してみても、聖人の女性信徒に対する教化は、男性信徒に対するよりも多いものがあったことは、こうした消息文や御本尊の授与等の上からも首肯できるものがある。実際に西谷を訪れた人数については、定かではないが、女性の身としては四山四河に囲まれた山奥の地へ旅することは、当時として容易なことではなかったろうと考えられる。従って男性の弟子や信徒の出入りの方が、数からすると多くて当然といえよう。しかし女性は使者を立て西谷へ供養の品や通信文を託してよこしている例は、相当に多くみられるのである。食糧品や衣類等、女性らしいこまやかな気配りによる供養品が届けられ、草庵生活の聖人を慰めることができたものといえよう。この九月がその代表的な一時期であったと考えられる。

次に十一月に至り、今度は比丘日法に授与された第一〇〇番の御本尊がある。これは首題も雄大であり、先の第九九・第九八がやや細目であるのに対し、これ以後は大書されている。弘安後期らしく首題と四天王が他を圧して堂々と書写されている。また授与者の「比丘日法」については、前の第六五の御本尊には「沙門日法授与之」とあり、こ

の「比丘日法」との関連については、判然としないものがある。既にこのことについては本誌の先号にてふれているので[12]重複をさけるが、恐らくは同一人物とみなしてさしつかえなかろう。第六五の御本尊は集団の代表者たる沙門日法へ、第一〇〇の御本尊は個人としての比丘日法への授与ではなかったかと考えられてくる。

尚、日興の筆で、「紀伊国目刑部左衛門入道相伝之」と添書が右下にあり、また更に「子息沙弥日然譲与之」と書き加えられているというが[13]、現在ではほとんど読むことができなくなっている。日法に授与されたこの御本尊が何らかの仏縁により、次ぎ次ぎに相伝されていったものとみなしえよう[14]。現在は佐渡の世尊寺に保存されているということも、その一端を物語っていると考えられる。

三、

かくして十一月にはもう一幅、有名な「伝法御本尊」と称されている第一〇一の曼荼羅がある。この御本尊は特に首題も二梵字・四天王共に雄大であり、首題と花押が全紙（一九七、六糎）を通して大書されている。「釈子日昭傳之」とあるところから、「伝法御本尊」と称されるに至ったと考えられる。普通は「授与之」とあるのであるが、この御本尊に限って「傳之」とあり、異例のこととされている。

六老僧の筆頭であり、教線の拡張に重きを置いていた人への授与であるが、十二枚継ぎの点からみても、日昭個人宛のものというよりは、「釈子日昭」にかかわる一門の人々への御本尊としてみることができよう。既に述べた如く、個人宛の御本尊と集団を対象とした御本尊とが考えられるが、特に直弟子の中でも、活発に布教し法華堂を構えて宗教活動を実施していた所では、その代表者に宛て授与されていったものとみることができる。日昭・日向といった直

弟子に、重ねて曼荼羅の授与があったことは、それを証する一つともいえよう。その意味からすると「傳之」という意図が理解できると考えられる。[15]

「釈子」という表現は、日蓮聖人の場合、『撰時抄』の最初に「釈子日蓮述」[16]とある。佐渡を経て身延へ入山された聖人は、この書を著して、教儀に関するしめくくりの一つとしておられる。敢て「釈子日蓮」とされた心意気を感じとることができよう。「日域沙門日蓮」[17]とか「根本大師門人日蓮」[18]又は「本朝沙門日蓮」「沙門日蓮」[19]「桑門日蓮」[20]「扶桑沙門日蓮」[21]といった表記もあるが、やはり「釈子日蓮」と称したことに大きな意義が感じとれよう。[22]

この御本尊で「釈子日昭」とされたのも、日昭に対する期待と、遊学時代からの心をゆるした仲であり、且つ一歳年長であった日昭に対する聖人の心が現れているものとも考えられよう。事実日昭は門下の長老として、聖人が佐渡へ流罪されたあと、また身延へ入山された後の鎌倉にあって、教団をよく維持して時に聖人に代って指導的役割を昭・朗の二師が中心となって果したともいわれているので、[23]曼荼羅の授与も当然であり、「傳之」とされた意図も充分に納得できるものといえる。名瀬や浜土に法華の道場が造立され、日昭を中心に一帯の信仰は盛んとなっていたようであるが、この御本尊もそうした道場に奉安され、後に寺院として栄えていく基礎をなしたとも考えられてくる。ともあれ「伝法御本尊」としての意味は、当時の信仰生活者らにとって、極めて深いものを持っていたといえよう

四、

年が改まり弘安四年に入ると、二月二日に「優婆塞藤原日生授与之」という第一〇二の曼荼羅がある。珍らしく日付が入っており、池上本門寺に所蔵されている。授与者の藤原日生とはどのような人物か、詳細は不明である。第九

五の御本尊が「俗藤原国貞」に授与されており、第八八が「優婆塞藤原広宗」であることからすると、同じ藤原姓であるので、あるいは同族とも考えられよう。日号を持っている点からみても、相当に熱心な信徒の一人であったことがわかる。

此の頃は一月から二月へかけて、重須殿女房や、上野尼御前、棧敷女房といった人々が、食糧や衣類のご供養を西谷へ届けている。これらの人々に交って藤原日生も身延を訪れ、御本尊の授与にあずかったことになる。身延山の二月はまだ寒気も厳しいので、登詣することも難儀であったことと考えられる。

次に同じく二月にもう一幅、「俗資光授与之　亦云宝　日」の第一〇三の御本尊がある。熊本の本妙寺所蔵であるが、この俗資光についても身元はよくわかっていない。「亦云宝　日」についても何等の手がかりはない。御本尊の型式は前の藤原日生に授与されたものと全く同一である。この同じ頃、西谷を訪ねてきたものと考えられる。直檀の一人であったことに相違はなかろう。

三月に入って「俗日大授与之」の第一〇四の御本尊がある。これは前の資光や日生に与えられたものといささか筆が異り、左下花押近くに「懸本門寺　可為末代重宝也」とあり、右側下隅には「富士上野顕妙新五郎仁日興申与之」と細字で添書されている。何れも日興の書いたものである。従って日大もまた日興の関係者であったろうと推察できる。左右の添書が理解しにくいところであるが、当初は日大授与の御本尊であったものを、何んらかの理由により、一旦は本門寺の末代重宝として懸けるべく考えられたが、縁あって富士上野顕妙新五郎に日興から与えられたものとみることができよう。

或いはこの逆に、日大から日興へ渡り、更に新五郎から本門寺ということも考えられないわけではないが、もしそ

うであるとしたら「末代重宝」の御本尊であるだけに、当然のことながら本門寺の所蔵でなくてはならないであろう。しかるに香川県高瀬の法華寺所蔵となっている点から推察するに、恐らくは右下の日興添書の通り、日興から新五郎へ与えられていったものと考えられよう。いずれにもせよ俗日大授与の御本尊が、何に故に本門寺の末代重宝となっていったのか、又それが新五郎へ渡っていかなくてはならなかったのか、一幅の御本尊をめぐって、そこに秘められた史実を探ることは、当時の信仰者間の動静を知る上からも意義の深いものがあると考えられる。新五郎が日興の弟子であり、百姓であったことは、日興の「本尊分与帳」[24]に記されている通りである。しかし最初の授与者たる日大については、詳細が伝わっていない。俗とはいえ日号を持ち、御本尊の授与までされているので、当時は富士方面の篤信者の一人であったろうことには相違ないものといえる。尚、この御本尊には、普賢・文殊・舎利弗等の迹化が省略されている。

四月に入ると五日に、「僧日春　授与之」という第一〇五がある。岡宮光長寺に保存されているが、僧日春については、一往『別頭統紀』の伝えるところによると、「光長寺第三代日春法印」とあり、「字空存俗姓鮎沢氏甲州山梨郡之人也。天性聡敏好レ学不レ倦云云」[25]とあって、最初は天台宗の僧であり、岡宮に瑞世し法印に昇ったという。休息山の日乗と縁が厚く共に日蓮聖人に帰依し、身延山へ登って師資の契を結び、聖人より日春の名を賜ったと伝えている。和泉阿闍梨日法を請して開山の祖とし、休息の日乗を第二の主となし、自らを第三代にあてたことから、岡宮と休息の「両寺一山之格」となしたとも伝えている。即ち四月五日に西谷を尋ね、聖人よりこの御本尊の授与があったわけであるが、右の所伝によれば日春は元は慈覚大師の流れをくむ台密僧からの改宗僧であったことがわかる。また日法に仕えること「如レ侍二高祖一」とあるので、実際は日法・日乗の影響を大きく受けた改宗帰伏の僧であり、直弟子と

はいえ、聖人に常時付き従っていたというわけではない。聖人の弟子や信徒の中にはこうした類の人々も決して少なくなかったことと考えられる。たまたま日春もそうした中の一人であったといえよう。[26] 遺文上には現れてこない僧俗で、曼荼羅の授与に当り、その名を残すという人物もあって、西谷を尋ねてきた人々は、この他にも相当あったであろうことが推察される。

尚、身延の三十三世遠沾日亨の御本尊臨写による『御本尊鑑』によると、「沙門日春」とあり「日春授与弘安二年歳七月」[27]とあるが、この「沙門日春」へ授与されたという御本尊は、現在のところ『御本尊集目録』の中には収録されていないし、「沙門日春」と「僧日春」との関係についても、一見同一人物のようにも考えられるが、今のところ審らかではない。惟うに弘安四年四月五日の御本尊が、僧日春に授与されたものであり、現に光長寺に保存されていることから推すと、この時に日春は西谷を尋ね、『頭記』の説の如く、日春の名を賜ったとすると、『御本尊鑑』の伝える「弘安二年歳七月日沙門日春授与」は別人ということになってこよう。しかしその御本尊（沙門日春宛）は、現在拝見することができないので、果して身延山宝蔵に伝えられているというが所在は不明である。したがって弘安二年の沙門日春宛の御本尊については、これ以上論及することはできないが、もう一つ不審なのは、仮りにこの御本尊が当時存在していたとして、身延山の宝蔵にあったという点である。光長寺の三祖日春宛であるとしたら、当然のことながら光長寺にあるべきである。それが身延にあったということも、妙であると考えられる。或いは全くの別人であったとすると、沙門日春は如何なる人物であったろうか、今後の研究を待つことになろう。

次に四月十七日付で「俗真広授与之」の第一〇六番の御本尊がある。丈が五四・二糎、幅が三三・三糎の一紙で小型であり、第一〇四番と同様に普賢、文殊等といった迹化は省略されている。更に四天王もなく二梵字が大書されて

いる。京都の本国寺に所蔵されているが、通称を「若宮御本尊」と称されている。その理由は審かではないが、真広という人物に由来するのかもしれない。『大風御書』によると、「去文永十一年四月十二日の大風と、此四月二十八日のよの大風と勝劣いかん。いかんが聞候といそぎ申せ給候へ。」[28]とあるので、この頃又天変があり、災難除けの御本尊として、こうした型式（二梵字大書）のものが採用されたものかもしれない。前述の如く二梵字大書の型式は、祈願を主とした場合に多いので、この御本尊もあるいは真広の祈願に対しての御図顕であった、とも考えられる。聖人の檀越としてあまり名の知られていない「俗真広」ではあるが、晩年の信徒の一人として、篤信の徒であったと考えられる。

次に四月廿五日御染筆の「比丘尼持円授与之」という第一〇七の御本尊が京都の本満寺に所蔵されている。この御本尊は再び十界勧請で四天王を備え、三紙ながら雄渾である。右下の大広目天王の右側に「甲斐国大井庄々司入道女子同国曽根小五郎後家尼者日興弟子也仍申与之」とあり、同天王の左側には「可為本門寺重宝也」と日興筆の添書がある。また左側下の授与者名と花押の中間に、「孫大貳公日正相伝之」と日興の添書がある。したがって比丘尼持円は、日興の添書にある曽根小五郎後家尼のことを指しているとも受けとめられるが、必ずしも同一人物であるかどうかは決めかねる点もある。前例によると、直接の授与者とは違った人物に、更に「申与之」ということもあるからである。しかし「孫大貳公日正相伝之」とある点から推すと、判明するようにも考えられるが、大貳公については、『御本尊集目録』でも指摘している如く[29]、日郷の『日興上人御遷化次第』の中に、二名の大貳公が存在していたことがわかる。即ち「前陳上蓮坊」の下に「右―三位阿闍梨。大貳公。美濃公。周防公等々」[30]と続いており、さらに「後陳蓮蔵坊―右伊予阿闍梨。宰相阿闍梨」等と続いて、六人目に大貳公が名をつらねている。また御遺物の分配に当っ

ては、「二連大貳公」と「一連大貳公」と表記されている。何れにしても日興の弟子であったこの後家尼と、孫大貳公日正とが、この御本尊を相伝していたことには相違ないものといえる。十界勧請の調った型式であり、三枚継ぎである点などから「比丘尼持円」を代表者とする一団の信徒のグループに授与されたものとも考えられる。故にこれがのちに「本門寺重宝」として格護されるに至ったものとみなしえよう。日興の教線の中で、活躍した人々も多数いたことであろうが、その主な人物に対しては御本尊の授与も、当然考えられてくるし、また西谷を訪問して直授された者、或いは日興の手を経て与えられた者等もいたことであろう。西谷の聖人をとりまく比較的近郷の信徒集団から、折りあるごとに聖人を訪問する者がいたであろうことは、充分に推察しうるところである。

しかし、同上の『本尊分与帳』によると、寂日房の弟子であるという曽根五郎の後家尼は、「但聖人御滅後背了。」[31]とあるので、遂いには退転してしまったようである。[32]この寂日房についてもまた前述の如く、寂日房日華と寂日房日家の二人がいる。聖人の滅後に背いたというが、如何なる理由からか不明であるが、後家尼の身であり寂日房の弟子であったことからすると余程の原因があったものといえよう。

この御本尊を図顕せられた翌日の四月二十六日に、「比丘尼持淳授与之」の第一〇八番目の曼荼羅がある。この授与者である「持淳」の字は、たまたま花押にかかってしまい、読みにくくなっているが、多分「淳」であろうと考えられている。二日にわたって共に比丘尼である持円と持淳に授与されている点からして、この二人は一緒に西谷を訪れ、聖人より日を前後して授与されたものとも考えられよう。この持淳宛の御本尊は、前の持円宛より一と廻り小型で、一紙に図顕され鎌倉の妙本寺に現在保存されている。型式は持円宛と全く同様であり、十界勧請であるが、ただ右の梵字（不動）バンが、持円の時は左右同型のウンの如くに見えたが、持淳の時はまた元に戻った型となっている。

この梵字の不動・愛染については、周知の如く種子の「バン」と「ウン」を象形図案化して用いられたものであり、梵字をそのまま現されたわけではないので、聖人の独特の筆法によるものであるといえる。

こうして四月には、僧日春を始め、俗の真広や比丘尼の持円・持淳等が、西谷を尋ねて曼荼羅を授与され、更に深い教化を受けている。尚、この四月八日には例の『三大秘法禀承事』が執筆せられたことになっている。三大秘法について大田金吾に宛た「御返事」の形をとっている。「此三大秘法は二千余年の当初、地涌千界の上首として、日蓮慥に自ㇾ教主大覚世尊ㇾ口決相承せし也。」[33]というところの相承の世界が、即ち大曼荼羅として図顕せられているといえよう。この御書についての研究は、既に各方面で実施されているが、[34]この時点で図顕された百余幅の曼荼羅本尊を含めて、三秘の結要を示されたものといえよう。

〔註〕

（1）『本化別頭仏祖統紀』　十一―三
（2）『日蓮とその門弟』（高木豊著）　九八頁
（3）本誌第六五号　三九頁参照
（4）慈覚大師事　定遺　一七四二頁
（5）上野殿御返事　同　一七四五頁
（6）大田殿女房御返事　同　一七五八頁
（7）内房女房御返事　同　一七八四頁
（8）上野殿御返事　同　一七九一頁
（9）『宗学全書』興尊全集　一一七頁

(10) 『御本尊集目録』（立正安国会）　一四一頁
(11) 同　一四二頁
(12) 本誌第六五号三六頁を参照されたい。
(13) 『御本尊集目録』（立正安国会）　一四三頁
(14) 日法については、『本化別頭仏祖統紀』（十一―一）にその伝記がある。即ち甲州安国山立正寺開山で和泉阿闍梨と称した。
(15) 「伝之」とは、集団に対して末代に此の御本尊を伝え、信行の増進をはかるように、との意図がこめられていると考えられよう。断絶することなく、伝承され伝授されて行くべきであることを指示されたものといえよう。
(16) 撰時抄　定遍　一〇〇三頁
(17) 得受職人功徳法門鈔　同　六三二頁
(18) 法華題目鈔　同　三九一頁
(19) 顕仏未来記　同　七三八頁
(20) 同　同　七四三頁
(21) 法華取要抄　同　八一〇頁
(22) 「釈子」とは言うまでもなく、釈迦仏の弟子・釈尊の子という意味があるが、特に釈迦仏の弟子という意味の中には、如来使・仏使としての使命と法華経行者としての自覚の問題が聖人の場合にはこめられていると解しえよう。
(23) 『本化別頭仏祖統紀』（九―一）に伝記があるが、宮崎英修博士は、昭・朗二師が身延入山で聖人不在となった鎌倉の地にあって、門下の指導・監督に当っていたことを明らかにしている。（『遵文辞典』八七四頁）
(24) 『宗学全書』（興尊集）　一一七頁
(25) 『本化別頭仏祖統紀』　十二―二〇
(26) 『身延山史』によると、「日興・日向の両足は駿河富士方面に、日昭・日朗両上は鎌倉を中心に、（乃至）日法は甲州に各教線を張って宣伝せしかば、他宗学徒の帰伏改宗して衣を更ふるものに駿河にては日源・日秀・日弁・日禅等の台徒あり。甲斐には密家に日乗・日春あり。」（一七頁）とある。六老僧を始めとして中老・九老僧の教線拡張により、帰伏改宗の僧も多かったことがわかる。

（27）『御本尊鑑』　五四頁
（28）大風御書　定遺　一八六六頁
（29）『御本尊集目録』（立正安国会）　一五二頁
（30）『宗学全書』（興門集）　二七三～七頁
（31）『宗学全書』（興尊全集）　一一六頁
（32）興門の中には前述の因幡房日永の場合も「但今背了」と、後に至って違背する者が案外出ているようである。（本誌第六十五号三十八頁を参照されたい。）
（33）三大秘法禀承事　定遺　一八六五頁
（34）古来真偽説があり、最近また新しい研究によって話題となっている。

『開目抄』に現われた一念三千義について㈡

桑名貫正

一　はじめに

本稿は『棲神』第六六号に掲載した「『開目抄』に現れた一念三千義㈠」[1]の続篇である。一念三千とは端的にいえば、仏に成れる原理である。一念三千の認識・研究の上から考えれば、『開目抄』の冒頭文である「夫一切衆生の尊敬すべき者三あり。所謂主・師・親これなり」（定五三五頁）[2]の一切衆生の尊敬すべき者の主師親が本尊に通じるもの、つまり成仏と密接なる関係があると考えれば、これまた一念三千義を有するものといえよう。この点については⑨の文にて論じたい。その主師親の三徳を兼備した本尊を見極むゆえに儒・外・内を尋究した結果、本門の教主釈尊となった。そして一切経の中で法華経だけが釈尊の正言であり、三世十方の諸仏の真言であることを日蓮聖人は主張される。仏に成れる原理の一念三千は、ただ寿量品の文底のみにあることは既に論じてきたところである。これらのことを含めて前回は、『開目抄』中に見られる一念三千の名目二十箇所あるうち、序分に相当する⑤の文までの一念三千義に関する展開について検討を行った。今回は、本論にあたる⑥の文からその一念三千義の考察を試みるものである。考察にあたって、重複の感はあるが便宜上、『開目抄』の中で一念三千がどこのどこにでているのか、その名目箇所を挙げて、そして一念三千義がどのように論じられているのかを検討したい。

二　『開目抄』の一念三千の記述箇所

① 一念三千の法門は但法華経の本門寿量品の文の底にしづめたり。龍樹天親知て、しかもいまだひろいいださず。但我が天台智者のみこれをいだけり。（定五三九頁）

② 一念三千は十界互具よりことはじまれり。法相と三論とは八界を立て十界をしらず。況や互具をしるべしや。（定五三九頁）

③ 善無畏三蔵・金剛智三蔵、天台の一念三千の義を盗（ミ）とて自宗の肝心とし、其上に印と真言とを加て超過の心ををこす。（定五四一頁）

④ 其の子細をしらぬ学者等は、天竺より大日経に一念三千の法門ありけりとうちをもう。（定五四一頁）

⑤ 華厳宗は澄観が時、華厳経の心如工画師の文に天台の一念三千の法門を偸（ミ）入（レ）たり。人これをしらず。（定五四一頁）

⑥ 此等の経々に二（ツ）の失あり。一には存（スル）二行布一（ヲ）故仍未（ニ）レ開（ホタ）レ（セ）権（ヲ）。迹門の一念三千をかくせり。二には言（フ）二始成一（ヲ）故曽未（ヲ）レ発（セ）レ迹（ヲ）。本門久遠をかくせり。此等の二（ツ）の大法は一代の綱骨・一切経の心髄なり。（定五五二頁）

⑦ 迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説て爾前二種の失一（ツ）を脱（のがれ）たり。（定五五二頁）

⑧ しかりといえどもいまだ発迹顕本せざれば、まことの一念三千もあらはれず、二乗作仏も定まらず。水中の月を見るがごとし。根なし草の波上に浮（ウ）るにたり。（定五五二頁）

⑨ 本門にいたりて、始成正覚をやぶれば、四教の果をやぶる。四教の果をやぶれば、四教の因やぶれぬ。爾前迹

門の十界の因果を打やぶて、本門十界の因果をとき顕ず。此即本因本果の法門なり。九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に備て、真十界互具・百界千如・一念三千なるべし。（定五五二頁）

⑩ 法華経方便品の略開三顕一の時、仏略して一念三千心中の本懐を宣給。始の事なればほととぎすの音をねをびれたる者の一音きゝたるがやうに、月の山の半を出たれども薄雲のをほへるがごとくかそかなりしを、舎利弗等驚て諸天龍神大菩薩等をもよをして、諸天龍神等其数如二恒沙一。求レ仏諸菩薩大数有二八万一。又諸万億国転輪聖王至合掌以二敬心一欲レ聞二具足道一等は請せしなり。文の心は四味三教四十余年の間いまだきかざる法門うけ給はらんと請せしなり。（定五六九頁）

⑪ 華厳・方等・般若・深密・大日等の恒河沙の諸大乗経は、いまだ一代肝心たる一念三千大綱骨髄たる二乗作仏久遠実成等いまだきかずと領解せり。（定五七一頁）

⑫ 法華経の種に依て天親菩薩種子無上を立たり。天台の一念三千これなり。（定五七九頁）

⑬ 華厳経乃至諸大乗経・大日経等の諸尊の種子皆一念三千なり。天台智者大師一人此法門を得給えり。華厳宗の澄観、此義を盗て華厳経の心如工画師の文の神とす。（定五七九頁）

⑭ 真言大日経等には二乗作仏・久遠実成・一念三千の法門これなし。（定五七九頁）

⑮ 善無畏三蔵震旦に来て後、天台の止観を見て智発し、大日経の心実相我一切本初の文の神に天台の一念三千を盗入て真言宗の肝心として、其上印と真言とをかざり、法華経と大日経との勝劣を判ずる時、理同事勝の釈をつくれり。両界の曼荼羅の二乗作仏・十界互具は一定大日経にありや。第一の誑惑なり。故伝教大師云新来真言家則泯二筆受之相承一旧到華厳家則隠二影響之軌模一等云云。（定五七九）

⑯ 龍女が成仏此一人にはあらず、一切の女人の成仏をあらわす。法華経已前の諸小乗経には女人成仏をゆるさず。諸大乗経には成仏往生をゆるすやうなれども、或改転の成仏、一念三千の成仏にあらざれば、有名無実の成仏往生なり。挙一例諸と申て龍女成仏は末代の女人の成仏往生の道をふみあけたるなるべし。(定五八九―九〇頁)

⑰ 又仏になる道は華厳唯心法界、三論の八不、法相の唯識、真言の五輪観等も実には叶べしともみへず。但天台の一念三千こそ仏になるべき道とみゆれ。(定六〇四頁)

⑱ 此一念三千も我等一分の慧解もなし。(定六〇四頁)

⑲ 而ども一代経々の中には此経計一念三千の玉をいだけり。余経の理は玉ににたる黄石なり。沙をしぼるに油なし。石女に子のなきがごとし。諸経は智者猶仏にならず。此経は愚人仏因を種べし。不求解脱解脱自至等云云。(定六〇四頁)

⑳ 設山林にまじわって一念三千の観をこらすとも、空閑にして三密の油をこぼさずとも、時機をしらず、摂折の二門を弁へずば、いかでか生死を離べき。(定六〇七頁)

三 『開目抄』中の一念三千義の展開

一念三千の記述箇所であるところの⑥の文の前に、一念三千義に関する論及が幾つか見られる。左の内容も、その内の一つである。

此に予愚見をもて前四十余年と後八年との相違をかんがへみるに、其相違多といえども、先世間の学者もゆるし、

我が身にもさもやとうちをぼうる事は二乗作仏・久遠実成なるべし。（定五四二頁）

右の引用文は『開目抄』の本論、正宗分の冒頭文である。天台宗の学者と日蓮聖人自身も、爾前経と法華経との相違の根本的な問題は二乗作仏と久遠実成の有無にあると見られたのである。この二乗作仏と久遠実成の二箇の大法こそは、実は一念三千の根幹の義にあたる法門と指摘する。この事は『開目抄』の一念三千の記述箇所である⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑭の文にて明瞭に論述展開がされており理解できよう。その論述内容の骨子は、一念三千に二箇の大事ありと捉えて、所謂、迹門の一念三千は二乗作仏・本門の一念三千は久遠実成が中心課題であることが述べられているのである。

さて『開目抄』の正宗分の冒頭文から⑥の一念三千の文に至るまでその流れを見ると、一念三千の根幹義たる㈠二乗作仏と㈡久遠実成との問題を爾前経と法華経とに相対されて論じられている。その方法は次に示す如くである。

㈠　二乗作仏問題は、爾前経では否定されていた。そこで仏弟子がなぜ成仏できないのか、その理由が論じられていく。その理由を証明する具体的な方法は『華厳経』[3]、『大集経』[4]、『維摩経』[5]、『方等陀羅尼経』、『大品般若経』、『首楞厳経』、『浄名経』等の文[6]を挙げて展開されている。法華経では逆に二乗作仏を肯定するのである。法華経における二乗作仏の証明典拠として、見宝塔品・神力品、嘱累品の文を挙げて論述されている。[7] しかし、この二乗作仏を肯定する法華経は仏在世から難信難解の経典とされているだけに、滅後、ましてや末法に於ては法華経を信ずることの難しさが縷縷述べられている。この様な経過を踏まえられて左の文の表明が見られるのである。

日蓮云、日本に仏法わたりてすでに七百余年、但伝教大師一人計法華経をよめりと申をば諸人これを用ず。但法華経云若接須弥擲置他方無数仏土亦未為難。乃至若仏滅後於悪世中能説此経是則為難等云云。日蓮が

強義経文には普合せり。（定五四九頁）

賢王の世には道理かつべし。愚主の世に非道先をすべし。聖人の世に法華経の実義顕るべし等と心うべし。（定五四九―五〇頁）

右の「日蓮が強義経文に普合せり」「法華経の実義顕る」表現に一念三千義が汲み取れるのである。「日蓮が強義」つまりこれまで命懸けで行ってきた強い主張は、日蓮聖人御自身の体験上（色読）からの発言で実に経文と一致する行動の有様は、正に聖人の事の法門がありと覚える。この経文普合とは宝塔品の六難九易を指しているから、『開目抄』の翌年に発表された『顕仏未来記』（真蹟完）の「但今如レ夢得二宝塔品心一」（定七四二頁）の文と通ずるものがある。「法華経の実義顕る」の実義とは、前回で論述した一念三千を形容するところの「天台の深義」（定五四二頁）に他ならない。[8] 従って一念三千義が論述されている文として見ることが可能である。又、次の

此法門は迹門と爾前と相対して爾前の強きやうにをぼゆ。もし爾前つよるならば舎利弗等の諸二乗は永不成仏の者なるべし。いかんがなげかせ給らん。（定五五〇頁）

とある「此の法門」とは、二乗作仏は法華経に限るという法門である。『開目抄』では舎利弗等の二乗が「いかんがなげかせ給らん」の文のところで、一念三千義の二乗作仏中心の問題は終り、次の久遠実成にテーマが移るのである。

㈡　久遠実成の問題。久遠実成の問題が述べられる前文に、左の文が見られる。

法華経の正宗略開三広開三の御時、唯仏与仏乃能究尽諸法実相等、世尊法久後等、多宝仏迹門八品を指て皆是真実と証明せられしに何事をか隠べき。なれども久遠寿量をば秘せさせ給て、我始坐二道場一観レ樹亦経行等云云。最

第一の大不思議なり。（定五五一頁）

法華経方便品第二の略開三・広開三については、後述する一念三千記述箇所の⑦の文のところに於て触れたい。今、涌出品の六万恒河沙の本化地涌の大菩薩達が釈尊に弟子の礼をとったのに対して弥勒菩薩が疑を抱いた。その疑を解くために初めて久遠実成の開顕がなされるのである。

教主釈尊此等の疑を晴さんがために寿量品をとかんとして、爾前迹門のきゝ（所聞）を挙云　一切世間天人及阿脩羅皆謂今釈迦牟尼仏出釈氏宮去伽耶不遠坐於道場得中　阿耨多羅三藐三菩提等云云。正此疑答云然善男子　我実成仏已来無量無辺百千万億那由他劫等云云。華厳乃至般若・大日経等は二乗作仏を隠のみならず、久遠実成を説かくさせ給へり。（定五五一―二頁）

右の文には、本門の久遠実成と迹門の二乗作仏の対決が見られる。「然善男子我実成仏已来無量無辺百千万億那由他劫等云云」の文は開迹顕本の最初の文にあたる。これより以後の『開目抄』の展開は、暫くその本門と迹門の対決を論じながら久遠実成の問題を中心に説示されている。それは『開目抄』の一念三千の記述箇所である⑥⑦⑧⑨⑩等の文に、本門の久遠実成と迹門の二乗作仏との対決展開が次第に鮮明に論じられていく過程を見ることによっても明らかなことである。さて⑥の文に戻ろう。

⑥の文には、『開目抄』の一念三千記述箇所に於て初めて「迹門の一念三千」という表現が見られる。それは、左の文に

華厳乃至般若・大日経等は二乗作仏を隠のみならず、久遠実成を説かくさせ給へり。

此等の経々に二の失あり。一には存行布故仍未開権。迹門の一念三千をかくせり。

二には言ヲ始成ニ故曽未レ発レ迹。本門ノ久遠をかくせり。此等の二ノ大法は一代の綱骨・一切経の心髄なり。（定五五二頁）

日蓮聖人遺文中には「一念三千」の記述表現は佐前佐後にも随所に述べられるところであるが、この「迹門の一念三千」との用例を言われたのは『開目抄』以前において文永八年五月作『十章鈔』（真蹟六紙）の次の文の一箇所がある程度である。（佐前の一念三千の記述表現は見様によって殆んど天台の一念三千を指すものと考えられようが）

一念三千と申事は迹門にすらなを許されず。何況爾前に分たえたる事なり。一念三千の出処は略開三之十如実相なれども、義分は本門に限。爾前は迹門の依義判文、迹門は本門の依義判文なり。但真実の依文判義は本門に限レ べし。（定四八九頁）

その他、しいて挙げるならば『開目抄』以前とするかの問題も残ろうが系年を文永年間とする「新断簡三四八」（真蹟二紙）に、[9]「迹門の一念三千」の用例が見えるのみである。また、『開目抄』以後に於ても「迹門の一念三千」の表現記述は『四條金吾殿御返事』『観心本尊抄』等の五書[10]にしか見られないので、『開目抄』に於ける展開内容は一念三千を理解する上で重要なる掛かり合いをもつものといえよう。

⑥の文の内容をいうと、日蓮聖人は妙楽大師の『法華玄義釈籤』巻十九（大正蔵経三三・九五〇頁中）を引かれ、爾前経には二つの欠陥があることを触れられている。(一)には、迹門の一念三千を述べないから二乗作仏を認めない欠点があることを挙げている。(二)には迹門の始成正覚の仏だけを述べていて、本門の久遠実成釈尊を説かない欠点をいうのである。この(一)二乗作仏(二)久遠実成の大法を日蓮聖人は釈尊の一代の綱骨（教相）、一切経の心髄（観心）であると見られているのである。そして、その心髄であるところの一念三千は法華経の本門寿量品に来て、はじめて言え

るのだということを⑧⑨の文等で説示されているのである。

⑦迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説て爾前二種の失一を脱たり。（定五五二頁）

⑦の文は、迹門の一念三千の内容を述べられたものである。これは、一念三千と二乗作仏の関係が論じられており、迹門の一念三千は二乗作仏を説くというのである。この一念三千の出処は先きに述べた『十章鈔』（真蹟六紙）の「一念三千の出処は略開三之十如実相」（定四八九頁）であると説示された方便品の文にある。『開目抄』にも「法華経の正宗略開三広開三の御時、唯仏与仏乃能究尽諸法実相等」（定五五一頁）と示すが、この「十如実相」について日蓮聖人は後年、『太田左衛門尉御返事』に次の様に簡潔に説かれている。

此方便品と申は迹門の肝心也。此品には仏、十如実相の法門を説て十界の衆生の成仏を明し給へば……[11]

と。また関連して、『始聞仏乗義』（真蹟完）には、実相の内容を活釈して次の様に説示されている。

法華経唯仏与仏乃能究尽爾前灰身滅智二乗押二煩悩業苦三道一　説二法身般若解脱二乗還作仏。菩薩凡夫亦如レ是釈也。[12]

右の引用遺文を挙げたのは、方便品の略開三顕一の内容を示す「十如実相・唯仏与仏乃能究尽等」の文には、成仏の原理である十界互具論が説かれているからである。その理論に立って二乗作仏等が始めて可能になり得るのである。[13]また、十如実相を更に詳しく述べる広開三顕一の「開示悟入の仏知見」の立場に由って説示されている遺文には『祈祷鈔』（真蹟身延曽存）、『観心本尊抄』（真蹟十七紙完）等を挙げることができる。[14]

法華経の方便品の略開三顕一の時、求レ仏諸菩薩、大数有二八万一。又諸万億国転輪聖王至　合掌以二敬心一欲レ聞二具足道一と願しが、広開三顕一を聞て、菩薩聞二是法一疑網皆已断と説せ給ぬ。（定六七一頁）

『開目抄』に現われた一念三千義について(一)（桑名）

右の『祈祷鈔』の文よりも広開三顕一の内容を具体的に示しているのが次の『観心本尊抄』の十三番問答、十界互具論の文である。

問曰　法華経何文。天台釈如何。答曰　法華経第一方便品云　欲レ令三衆生開二仏知見一等云云。是九界所具仏界也。（定七〇四頁）

又、十八番答にも広開三顕一の文を以て十界互具論が次のように述べられている。

経文分明十界互具説レ之。所謂欲令衆生開仏知見等云云。天台承二此経文一云　若衆生無二仏知見一何所二開悟一。若貧女無二蔵何一所レ示也等云云。（定七〇九頁）

以上、前述してきた如く⑦の文は、法華経方便品で迹門の一念三千、略開三顕一の諸法実相・十如実相・乃能究尽等、広開三顕一の仏知見の開示悟入が説き顕され十界互具論の立場から二乗作仏が可能となる。このことにより、法華経の迹門に於て爾前経の一つの欠点が消えたというのである。⑦の迹門の一念三千の文に対し、次の⑧⑨の本門の一念三千の文には、本迹を含めた法華経の絶体の一念三千が述べられている。これらには、一念三千の本迹問題（対決）が論じられているところである。

⑧しかりといえどもいまだ発迹顕本せざれば、まことの一念三千もあらはれず、二乗作仏も定まらず。水中の月を見るがごとし。根なし草の波上に浮るにたり。（定五五二頁）

⑧の文には、本門の一念三千を「まことの一念三千」といっている。「まことの一念三千」とは、何かというと。先きの②の文で「一念三千は十界互具よりことはじまれり」（定五三九頁）と言われているので、一念三千は十界互具があって初めて成立するわけであるから、従って⑧の文では、まことの十界互具が説明されている。発迹顕本の最

初は、前述した寿量品の次の文である。

然善男子　我実成仏已来無量無辺百千万億那由佗劫等云云。（定五五二頁）

そうすると迹門方便品の十界互具は、本門の寿量品で発迹顕本・久遠実成が開顕されなければ本当の十界互具とはならないのである。それは、迹門に顕れた釈尊には、始めて仏と成った義が述べられているので、「仏界は始めて出来たのか？」「今まで以前は九界しかなかったのか」「仏界はつけたりか」という問題が生じて、十界互具が成立しなくなっているのである。そこで、迹門方便品に一念三千・二乗作仏の原理を説き十界互具論の十如実相を説示し、また、開示悟入の仏知見を説き顕し二乗作仏の可能性を唱えたとしても本門の一念三千の立場から見ると、迹門方便品に説示されている内容だけでは本当（真）の開示悟入とは言えないというのである。従って、いくら迹門に一念三千を説くと言っても「仏界がつけたし」という問題から、十界がバラバラな為に昔から十界互具があるとは言えないのである。このことから想起されるのは先きに挙げた『十章鈔』の「一念三千の出処は略開三之十如実相なれども義分は本門に限る。……迹門は本門の依義判文なり。但真実の依文判義は本門に限るべし」（定四八九頁）の文である。本門の寿量品に来て、久遠実成が説き顕され、そこに真の十界互具の成立が可能となることが始めて言えるのである。一念三千（成仏の原理）は、久遠実成が開顕されてこそ、まことの一念三千となり、二乗作仏もハッキリして来ると言うのである。この点から、迹門では生死を離れることはできない。生死は必らず本門に至ってはじめてできるということを主張された。文永二年四十四歳作の『薬王品得意抄』（真蹟十紙断）の左の文の意味がイキイキと理解されることができるのである。

爾前如レ星法華経迹門如レ月寿量品如レ日。寿量品時迹門月未レ及。何況爾前星。夜星時月時衆務不レ作。夜暁必

作二衆務一。爾前・迹門猶生死難レ離。至二本門寿量品一必可レ離二生死一。（定三四〇頁）

『開目抄』の⑧の文は、『薬王品得意抄』の本迹相対の内容よりも具体的に真の十界互具の立場から迹門の一念三千と本門の一念三千（まことの一念三千）との相違を認識することができる。

また、「水中の月を見るがごとし」（定五五二頁）の水中の月とは、後文に『法華玄義』巻七・十三丁の「天台不レ識二天月一但観二池月一」（定五五三頁）の文を引用しているから、天月に対する水月である。天月は、「まことの一念三千」を形容し、水月は迹門の一念三千を指しているのである。「根なし草の波上……」も迹門の一念三千の形容であり二乗作仏の覚束無さを述べられたものである。

⑨本門にいたりて、始成正覚をやぶれば、四教の果をやぶる。四教の果をやぶれば、四教の因やぶれぬ。爾前迹門の十界の因果を打やぶて、本門十界の因果をとき顕す。此即本因本果の法門なり。九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に備て、真十界互具・百界千如・一念三千なるべし。（定五五二頁）

⑨の文に於て、本門の一念三千を、本因本果の法門と呼んでいる。それは、法華経本門の寿量品にきて、今までの釈尊が、実は久遠実成の釈尊であると明かされたから、始成正覚ということは否定されてしまったのである。その仏を目ざして蔵・通・別・円・の四教の修行をしてきた菩薩達の仏道（四教の因）は無意味となってしまうから、そこで、爾前迹門の十界の因果を打ち破って、本門の十界の因果を説き顕わしたのである。これを本因本果の法門というのである。これに由って、九界も無始の仏界に具し（本因本果）、仏界も無始の九界に備わりて（本因本果）、ここに始めて真の十界互具・百界千如・一念三千が言えるのである。この仏界は、久遠実成の仏界なるが故に、ここで初め

て本門の一念三千が確立するのである。本因本果の法門が説かれたことにより、ここに本門の本果妙・本門の本因妙が示された。この本因本果論は日蓮聖人の最も重要な法門である。浅井円道先生は、この本因本果の法門を、次のようにまだ本門の「理」の一念三千法門の段階であると言われている。

開目抄では本門に立脚して衆生を本因によって価値づけ、九界に無始常住性を附与した。しかしながらこれらは、後に論じるように、日蓮の本分たる「事」に対する「理」の法門であって……[15]

の記述がそれに当たる。さて、本因本果の法門よりも勝れているのは『観心本尊抄』の「四十五字法体段」である。

今本時娑婆世界離三災一出二四劫一常住浄土。仏既過去不レ滅未来不レ生。所化以同体。此即己心三千具足三種世間也。（定七一二頁）

その理由は、「四十五字法体段」に本国土妙・本因妙・本果妙が説示されているからである。『観心本尊抄』と『開目抄』との本門の一念三千の法門の相違の大きな点は、この本国土妙が有るか無いかの違いであろう。『観心本尊抄』の次の文は、この証左を示す。

十界久遠之上国土世間既顕。一念三千殆隔二竹膜一。（定七一四頁）

一念三千、竹膜を隔てたりとは『観心本尊抄』と『開目抄』との「本門の一念三千」の相違を捉えているものと見ることができる。

さて、『開目抄』の中で、この本因本果の法門と関連する文が見えるのは左の文である。

雙林最後大般涅槃経四十巻・其外の法華前後の諸大乗経に一字一句もなく、法身の無始無終はとけども応身報身の顕本はとかれず。いかんが広博の爾前・本迹・涅槃等の諸大乗をばすてゝ、但涌出・寿量の二品には付べき。

（定五五三頁）

右の「法身の無始無終はとけども応身報身の顕本はとかれず」の文は、一念三千との関係を指している。先きの本因本果の法門によりて、本門の久遠実成が顕れ、一念三千の本門の開顕が始めて基礎づけられた訳であるが、ここでは、その寿量品の仏がもっともっと人格化されてきているのである。それは応身・報身仏として表現化されてくるのである。これは正に法身・報身・応身の三身が無始無終として久遠劫来働きかけている、血の通った久遠実成の釈尊が私達の目の前に生き生きと活動しているのである。日蓮聖人は、常にその仏と倶に法華経を弘宣流布されてこられたのである。だが謗法罪によって国土は乱れ、また多くの者が地獄へ堕ちて行くことを現実に日蓮聖人は「深此をしれり。日本国に此をしれる者、但日蓮一人なり」（定五五六頁）と叫ばれた。この事を知れる者とは、日蓮聖人の仏教全体の認識観である。日蓮聖人は、この認識観に立ち先に掲げた「日蓮が強義経文に普合せり」の行動があった。こういう見方こそが本門の事の一念三千の観心に他ならないのである。また、次の文にも事の一念三千義が見られる。

されば日蓮が法華経の智解は天台伝教には千万が一分も及事なけれども、難を忍び慈悲すぐれたる事をそれをもいだきぬべし。（定五五九頁）

日蓮聖人は随分と謙遜されて智解は天台伝教に及ばないと言われておられるが、逆に今度は、日蓮聖人の難を忍び慈悲の勝れている態度に対しては、天台・伝教大師の方が、とても自分達には真似ることはできないことだと恐れてしまうだろうと自信をもっていっているのである。その日蓮聖人の弘教態度とは、智解に止まらず、法華経の智解に随って命を懸けた行動である。この忍難慈勝の態度こそ事の一念三千の振舞であると言ってもよいのである。そして、日蓮聖人が鑽仰してやまない久遠実成釈尊（教相）と本門の一念三千（観心）の関係の文が左に見られる。

かうてかへりみれば、華厳経の台上十方・阿含経の小釈迦、方等・般若の、金光明経の、阿弥陀経の、大日経等の権仏等は、此寿量の仏の天月しばらく影を大小の器にして浮給を、諸宗の学者等近は自宗に迷、遠は法華経の寿量品をしらず。水中の月に実月の想をなし、或は入て取んとをもひ或は縄をつけてつなぎとどめんとす。天台云不レ識二天月一但観二池月一等云云。（定五五二―三頁）

「かうてかへりみれば」とは、まことの一念三千に対して見ればということを指す。又、「本果妙の世界を顧みるということだ」と捉える人もいるが[16]、その意は同じである。開迹顕本された本門寿量品の久遠実成釈尊に比べて他の仏（華厳経・阿含経・方等・般若・金光明経・阿弥陀経・大日経の権仏）は、天月・水月の関係となる。天の月が光りを出すから、水に月が映るのである。その映った仏が諸宗・諸経の仏を指し。本因本果の、まことの一念三千は本仏・久遠実成釈尊の実体をいう。本門寿量品の久遠実成の釈尊（教相）が顕れないと、まことの一念三千（観心）も顕れないのである。まことの一念三千の根底には一切衆生の尊敬すべき者の、主・師・親の三徳が完全に具備していなければならない。『開目抄』の冒頭文には、この主師親の三徳及び儒外内の三学の必要性を述べて、その掛かり合いの結論を一気に序分のところに論じているのである。その部分とは、同時に本門の事の一念三千の内容を端的に説示する②の文の「一念三千の法門は但法華経の本門の寿量品の文の底にしづめたり」（定五三九頁）と表明された所である。まことの一念三千と久遠実成の釈尊は密接不離の関係なるが故に、この三徳を備えた仏こそ、一閻浮提のまことの仏であり久遠実成の仏なのである。ここに、事の一念三千の人格性を持つ仏の具体性を顕わされたのである。この本門寿量品の久遠実成の仏と爾前仏（権仏）・迹仏の相違については後年、『富木入道殿御返事』（真蹟十三紙完）により一層鮮明に説示されている。それは左の文に見られ、これにて一目瞭然に知ることができよう。

法華経に又二経あり。所謂迹門と本門となり。本迹の相違は水火天地の違目也。例せば爾前と法華経との違目よりも猶相違あり。爾前と迹門とは相違ありといへども相似の辺も有ぬべし。所説に八教あり。爾前の円と迹門の円相似せり。爾前の仏と迹門の仏は劣応・勝応・報身・法身異ども始成の辺同ぞかし。今本門と迹門とは教主すでに久始のかわりめ、百歳のをきなと一歳の幼子のごとし。弟子又水火也。土の先後いうばかりなし。而を本迹を混合すれば水火を弁ざる者也[17]。

なお、制限枚数の都合上、以後の展開は次回へと続く。

（未完）

〔註〕

（1）拙稿「『開目抄』に現れた一念三千義について(一)」（『棲神』第六六号・四九―六八頁）参照。

（2）本文中に、または註にて（定五三五頁）等とあるのは『昭和定本日蓮聖人遺文』全四巻の頁数を示す。

（3）日蓮聖人は『法華経』の現文にて（定五四二頁）舎利弗等の十大弟子・五百・七百の羅漢・学無学の二千人・比丘尼等の成仏を論じているが、然し『華厳経』では、左の文の如く二乗作仏が否定されていると見られた。「華厳経云、如来智慧大薬王樹唯於二処一不レ能為二作生長利益一。所謂二乗堕二於無為広大深坑一……」日蓮聖人は、この文を解釈して次の様に言うのである。「此の経文の心は……此の大樹は火坑と水輪の中に生長せず。二乗の心中をば火坑にたとえ、一闡提人の心中をば水輪にたとえたり。此の二類は永く仏になるべからずと申経文なり」（定五四三頁）と。

（4）「大集経云、有二種人一。必死不レ活畢竟不レ能二知レ恩報レ恩。一者声聞 二者縁覚。……」の文をとらえて日蓮聖人は知恩報恩の立場から批判されて、二乗は「父母等を永不成仏の道に入れば、かへりて不知恩の者となる」（定五四四頁）と論ぜられているのである。

（5）日蓮聖人が『維摩経』の「一切塵労之疇為二如来種一。……已得二阿羅漢一為二応身一者終不レ能レ復起二道意一而具二仏法一也。如二根敗之士其於二五桑一不レ能二復利一等云云」（定五四四頁）の文を引用されたのは、すべての人には仏になる種がある。

但し二乗には、その種が疎かになっている。二乗の人よりも凡夫の方がまだ良いという内容から、二乗否定の文として挙げられているのである。

(6) ここでは諸経の引用経証の文を省略するのがいづれの経も（定五四五頁）に引用されているので往見されたい。日蓮聖人の引用の意を述べると『方等陀羅尼経』では二乗に仏種なきことを論じ、『大品般若経』にては二乗の菩提心の有無によりて成仏の問題を批判し、『首楞厳経』では煩悩の尽きた阿羅漢は破器のように成仏できないことを論じ。『浄名経』では二乗を供養すは三悪道に堕つ。等の内容を挙げられて二乗作仏の否定的な見解を示されたのである。

(7) 定五四七―八頁に見宝塔品・神力品・嘱累品の引用経文を挙げて、その二乗作仏の証明を論じているので往見されたい。

(8) 拙稿「『開目抄』に現れた一念三千義について」（『棲神』第六六号・六一―三頁）往見されたい。

(9) 定二九八八頁に「横一念三千　迹門　縦一念三千　本門」の表現記述が見られるのみである。ただし、この文にも「迹門の一念三千」の義が論述されているという目で見れば『開目抄』以前にも、以後にも多々あるのであろうが、明確に「迹門の一念三千」の固有名詞を挙げている箇所は少ないのである。

(10) 『開目抄』以外の五書とは（紙数の制限上、今その文証を一々示すことは省略せざるをえないが）文永九年五月二日作①『四條金吾殿御返事』②文永十年四月二五日作『如来滅後五五百歳始観心本尊抄』（真蹟一七紙一帖完）③弘安元年四月二三日作『太田左衛門尉御返事』④弘安元年六月二六日作『富木入道殿御返事』（真蹟十三紙完）⑤弘安四年四月八日作『三大秘法禀承事』（親師本）但し此書は古来より現在に至るも真偽問題があるので要注意。また、義分に於て欠かせざるものには建治元年六月作の『撰時抄』（真蹟五巻一一〇紙）が挙げられる。

(11) 『太田左衛門尉御返事』定一四九七頁。『種種御振舞御書』（真蹟曽存・定九七一頁）にも諸法実相・本末究竟等を法華経の肝心と言う。

(12) 『始聞仏乗義』定一四五四頁。その他『智慧亡国御書』（真蹟完・定一一三〇頁）、『西山殿御返事』（定一二五二頁）往見。

(13) 法華経の心を述べる十界互具論の立場から二乗が成仏できなければ、菩薩はじめ他の界の衆生の成仏も有り得ないという主張は、二十一歳作『戒体即身成仏義』（定一〇―一一頁）、三十七歳作『一代聖教大意』（目師本・定七〇―一、七四頁）、三十八歳作『爾前二乗菩薩不作仏事』（真蹟身延曽存・定一四五―六頁）等にて早くから論じられている。また、久遠実成については三十六歳作『図録三・三種教相』（定二二二九・二二三六・二二五一頁）、『図録六・六凡四聖御書』（明師本・『開目抄』に現われた一念三千義について㈠（桑名）

『開目抄』に現われた一念三千義について㈡（桑名）

定二二五七頁）、三十八歳作『守護国家論』（真蹟身延曽存・定九四・九七・一二九・一三二頁）に初まって以後随所に論じられる所である。そして、一念三千の最初は『一代聖教大意』（目師本・定七一頁）に論じられその以後、確実なる遺文（真蹟等・允可書を除き真偽問題がない古写本）を点検して見て五〇箇所、その他の真偽問題のない写本に十一箇所、合せて六一の一念三千記述箇所を『開目抄』以前までに見ることができる。しかし、一念三千と十界互具の関係が的確に論述されていないのである。その関係を初めて明確に述べたのは『開目抄』の一念三千記述箇所である②の「一念三千は十界互具よりことはじまれり。」の文である。略開三顕一の十如実相、さらにそれを詳述する広開三顕一の仏知見の開示悟入。これらは十界互具論の立場から二乗作仏等が可能であることを論じているのである。尚、日蓮聖人遺文に略開三広開三を言及する所は『唱法華題目抄』（定二〇五頁）、『十章鈔』（真蹟・定四八九頁）、『開目抄』（真蹟曽存・定五五一・五六九頁）、『祈祷鈔』（真蹟曽存・定六七一頁）、『観心本尊抄』（真蹟完・定七〇四、七〇九頁）等に見える。

(14) 開示悟入の仏知見（広開三）が述べられているのは『開目抄』以前には余り見られない。『曽谷殿御返事』（定一二五三頁）、『三大秘法禀承事』（定一八六五頁）往見。

(15) 浅井円道稿「日蓮の遺文と本覚思想」（『本覚思想の源流と展開』所収）二九九頁。同稿二九七頁には、『観心本尊抄』の「四十五字法体段」（定七一二頁）には、本国土妙を含む本門三妙が説示されているので、さらに本門教学が明瞭化していると述べられる。

(16) 茂田井教亨述『開目抄講讃』上巻・一二九頁にいう。

(17) 『富木入道殿御返事』（真蹟完）定一五一八―九頁。同文は『教行証御書』定一四八七頁にも出づ。

胸に彫られた竜とメドゥーサ

——東西文化の比較対照——

高橋堯昭

筆者は東西でまことに対照的な像を発見し非常な興味を感じている。一つは弥勒菩薩像の胸で二頭の竜が向き合って経筒や宝珠をくわえている像であり[1]、もう一つはローマ皇帝トラヤヌスの鎧の胸のメドゥーサ[2]の像である。メドゥーサはギリシャ神話の神[3]、その髪の毛が一本一本蛇というこの神は多産豊穣の神として西アジアからローマ帝国の領域にかけて信仰されていた。為にトラヤヌス帝もこの神にあやかろうとしたのである。

問題はその後の二つの像の運命である。竜は現在に至るまで依然として「仏法の守護神」「幸運の神」として寺や民家の中に祀られているが[4]、一方のトラヤヌス帝の胸のメドゥーサは悲惨な運命をたどって行った[5]。共に地母神・大地の神そして多産豊穣の幸福の神として信仰されて来たのに、天なる神・一神教が成立するとメドゥーサは地母神・多神教のシンボルとして、見せしめの如く、次々と壊わされたり、又地下水槽深く、土台の下に「横倒し」にされたり、「逆さま」[6]にされたりして封じ込められて行った。この地母神に対する東西の考え方の対比が重要に思える。即ちここに東西の文化の特徴が如実に示されていると思われるからである。この小論は「胸に彫られた像」を介して東西の文化を比較対照を試みたものである。

胸に彫られた竜とメドゥーサ（高橋）

地母神の代表　大神アルテミス（アンタリア博物館）

◇

素朴な技術しかもてなかった古代の人々は大自然の一寸した気候変動にも、収穫は皆無になり、大きくその運命を左右されて来た。そこで人々はこのすべてを育くみ育ててくれる大地の神に、ひたすら収穫と幸せを祈る為に土をこね、小さな人形のような像を作った。これが地母神像である。[7] 然し不思議なことに、何の連絡もない遠隔の地でも又時間的に何千年という差があっても、これが非常に似ている。例えば西アジアの大古のものも、日本の縄紋時代のものも非常に似ている。「乳部」や「腰」が物凄く大きく、陰部がはっきりくまどられている。[8] 女性が子を産み育てることに「増える」ことを見、作物の増産・種族の繁栄をみたのであろう。こうした考え方は人類が農耕をはじめた頃から既に獲得していた共通の考え方により似かよった像が出来たのであろう。所謂エリアーデ[9]の言う「鋤は男根に、鋤き返された地面は女性とみなされ、大地は生殖の子宮。生命の再生力の尽きることのない創造と活力を保持した大地」[10]、即ち地母神ということになる。

ギリシャ神話では、この地母神を「大地（ガイア）が万物の祖として君臨していた。大地は女性で男性である天（ウラノス）と交って子を産んだ」と表現した。即ち大地こそ神々の系譜の根源として重視したのである。

これも前述のように、農耕民的発想で、男性である天からの雨を貯え、植物を生育させ穀物を実らせるのがこの大地ということから、所謂大地の生命力生殖力を強調した木偶様のものから、地中から出るものでこれを象徴するようになって来た。一例をあげれば、天にも達するかの如き大樹[11]、はた又大地から涌現したような奇岩・洞窟[12]、そして大地からはい出して来る「蛇」等々である。

ヘビをもつ地母神　マリ遺跡出土（ＢＣ，3000年）

蛇は冬眠からさめて大地から出て来るや脱皮して成長する。その脱皮に古代人は再生を見、又男根に似た頭で一撃のもとに他を殺し、たたいても、半分に切っても動いているたくましさ。又その交合は延々二十時間にも及ぶと言われるその生命力に、蛇こそ地母神の象徴と考えられたのはごく自然のことであった。紀元前三千年のメソポタミヤのマリ遺跡から出土している前頁の写真の像や、又「二匹の蛇がからみ合いキッスしている像[13]、紀元前一六〇〇年のクレータ島の「両手に蛇をもつ」大地母神像はこうした古代人の考え方を表している。共に大地の生命力を表す地母神乃至その象徴・お使いとも考えられていたからである。日本にも縄文土器にマムシの装飾のついたもの[14]がある。まさに洋の東西を問わず同じ考え方、同じ彫刻が残されている。

◇

インドでは、こうした生命力の地母神を「樹神」や「地神」として表していた。あの暑いインドでは人々の生活はいきおい樹の下になり岩の洞窟になる。なぜならカルラー・バジャー[15]等の西南インドの窟院の如く、洞窟は夏はひんやりし、冬は火をたくといつまでも暖かいから人々はその中で生活し易かった為である。

まず樹について述べると、農村では大樹の下に家が作られ、牛や家畜を飼う。暑い日中では老いも若きも樹の下でごろごろ昼寝している。日をきめてひらかれる「市」も、大樹の下をぐるりと巡って店の列が作られる。町に行くと自転車屋もアイスクリーム屋も樹の下に店をひらく。横町では大地に手をかけ、頭を太い幹にこすりつけている者をよくみかける。筆者は最初の頃樹の下で用を足していると思った程である。実はそうではない、その樹の幹には赤い粉がぬられ、又樹の下には小さな祠があっていろいろの供えもの（プジャー）がしてある[16]。祠のない場合でも赤く塗

胸に彫られた竜とメドゥーサ（高橋）

臍から万物を生む夜叉（サンチー）

樹下ヤクシニー（バールフット出土）（カルカッタ博物館蔵）

られ供えものがしてある。大樹そのものが祠という意味である。大樹を大地の生命力の表現、地母神の象徴として信仰しているのである。

こうした大地の生命力は前述の如く、樹だけではない。快適な洞窟の中での生活から「地の神」という考え方が出、やがて、これらを人間の体で表現するようになる。これがヤクシャ・

ヤクシー（夜叉）[17]である。更に、頭は象やワニ、尻っぽが魚や蛇という「マカラ」でこの大地の生命力を表現するようになる。然し何より民衆に強い信仰をもっているのは「ナーガ（蛇）」（ガンダーラでは竜）である。コブラは暑いインドでは実に恐ろしい生きもので、現代でも年々多数の人命が失われているトーテム獣となっている。即ちトーテムの常として「怖ろしいものは、逆にその強い力で我々から悪魔を撃退してくれる」と信じられているからである。

かくて蛇は多くのものの中に「守護神」として彫られ、例えば仏塔をぐるぐる巻きにしているもの[18]、寺の屋根の棟は大蛇の胴体、瓦はウロコ、柱も蛇がぐるぐる巻きだし、橋の欄干も蛇身[19]のものまである。それだけではない。民家の中にも蛇や竜があちこちに彫られるようになって来る。これ程蛇は民衆の生活の中に生きている。

◇

これは西アジヤや地中海沿岸でも事情は似ている。前述の如く西紀四千年頃のメソポタミヤのウル遺跡には王と思われる人物が両手に大蛇をもった浮彫りがあり、前三千年頃のマリ遺跡には容器に二匹の蛇がからまり合っている。又大地母神イシュタールの神像も、「蛇目のイシュタール」[20]といって蛇のような目をもった像も数多く出土している。更に又前六百年頃のクレータ島出土の像には大地母神像が両手に蛇をもつのがある。[21]これらの彫刻から蛇を大地の生命力の象徴として崇拝する信仰がこの地方にあった。これを裏返せば当時この地方が農耕地で、大地は豊かな母とされていたことがわかる。こうした例は枚挙に遑まない。

◇

やがてこの農耕民的思考はギリシャ神話にうけつがれ、地中海の沿岸、特に小アジア（トルコの沿岸地方）にギリシャの植民都市が拡大するにつれて、[22]ギリシャ神殿が作られて行った。そしてメドゥーサ像はここに数多く彫られて行った。これらの地方が農耕地であったからであろう。為に多産や収穫の増大を祈ったからであった。

然し、人類の精神史の上に変化が起って来た。大地の神から天なる神へとの転換が行われて行った。これは母系制社会から父系制社会への変化、村落共同体から巨大な中央集権国家へとの社会政治経済体制への変化にかかわっているのであろうが、何よりも女性原理中心の社会から男性原理中心社会への変化が示されている。その変化の何よりも大きな要因は、大地の再生力の根源となる降水量の変化によるものであろう。即ち西アジアをはじめインダス流域に至るまで気候に変化が起りつつあった。西紀前約一五〇〇年頃からこの傾向は一層顕著になった。今まで降雨によっての豊潤な国土の乾燥化が進み、砂漠化するようになった。従って住民にとっては、すべてをはぐくみ育てる大地に生命力が感ぜられなくなり、雷が鳴って雨を降らせる天なる神[23]の方が住む人にとっては有難く感ぜられるようになって行ったからであろう。

こうした傾向を示すものとして、紀元前一五〇〇年頃から「蛇を殺す神々」が登場して来た。所謂「天なる神」の一神教の成立であった。この一つがバール神の成立である。ユーフラテス河畔の町テルクから出土したバール神の彫像がそれである。即ちアッシリヤ王トウクティーニマタ二世が西紀前八八五年に建立したといわれているこの像[24]には、左手に角の生えた蛇をにぎりしめ、右手で斧を振り下ろそうとしている。これは一神教が成立して来ると、多くの地母神信仰が追放されて行ったことを象徴している。その最たるものが旧訳聖書にある「アダムとイブに禁断の木の実を食べるよう誘惑したのが蛇である」[25]という神話の成立である。地母神たる蛇を悪の権化として否定しようとする意

図がはっきり見える。更に「多神教の町ソドムが神の業火で焼かれる時、ふり返るなふり返ると石に化す」[26]等々のシーンは、これでもかこれでもかと大地の神多神教を攻撃しているのである。

バール神（シリア・アレッポ博蔵）右手に蛇、左手に斧
（BC 885年）

こうした宗教、ユダヤ教をひきついだ一神教キリスト教がひろがって来ると、多神教の神殿やギリシャの神殿が壊され、その石材を使って教会や関連の建物が建てられて行った。

その時、最も苛酷な運命にさらされたのはギリシャ神話の神々のうちのメドゥーサである。その毛が一本一本蛇といわれる怪奇な姿の神は、その蛇という地母神・多神教の神ということから、

ハドリアヌス帝の鎧の胸のメドゥーサ　ルーブル博蔵

逆さまに封じ込まれたメドゥーサ像　イスタンブール地下水槽

かつてはギリシャの植民都市全域、特に小アジアの農耕地帯にメドゥーサは豊穣多産の神として広く信仰されていたが、その像はことごとく壊されて行った。

メドゥーサは見るからに気持の悪い姿でもあるが、ギリシャ・ローマ時代には神殿の正面玄関の梁[27]に飾られたり、柱や部屋の壁の随所に彫られるばかりか、王の鎧の胸にまで彫られるようになった。

即ちトルコ南部のアンタリヤ市の東のベルゲ遺跡出土のローマ皇帝トラヤヌス帝（西紀九七―一一七年）[28]やハドリアヌス帝（西紀一一七―一三八年）の像である。この二人の皇帝はローマが最も繁栄した時代の皇帝で、特にトラヤヌス帝は伝統的なローマの宗教の復活に努め、キリスト教徒を迫害した皇帝としても知られている。この二人の皇帝がつけていた鎧の胸元にはメドゥーサが彫られている。如何にキリスト教の拡大以前に、このメドゥーサが広く豊穣の神・幸運の神として信仰されていたかがわかろうというものである。

これが、キリスト教がひろがって来ると、メドゥーサ像はことごとく壊されて行った。特にユスティニアス帝が東ローマ帝国の首都コンスタンティノープル（現在のイスタンブール）にアヤソフィアをはじめとする教会関連の建物の大工事を行うに際し、地下宮殿とよばれる大貯水槽を作った時、一番奥まった柱の土台として、このメドゥーサを埋めてしまった。一つは「横向き」に、もう一つは「逆さま」にして、恰も封じ込めるかの如く、深い深い暗黒の地下水槽の奥底に埋めてしまった。

近年の大貯水槽の水をぬいて大修理が行われた時、これが偶然発見された。こうした事実から一神教のあくなき多神教の排除追求のはげしさ、否その追求の執念を見る思いにかられるのは筆者だけではあるまい。

◇

これに対して東洋の宗教は趣を異にしているアショカの摩崖証勅が如実に示している。

「みずからの宗派に対する信仰によって、みずからの宗派のみを賞揚し、或いは他の宗派を難ずる者は、このようになす為、かえって一層みずからの宗派をそこなうのである。ゆえに、もっぱら、互いに法を聞き合い、又それを敬信する為に、すべて和合することこそ善である」[29]とある如く、一つが成立すると他をすべて否定することはしなかった。特に仏教はすべての宗教を自己の中にとり込み、その神々を自己の中に守護神としてとり入れて行った。こうした寛容性・和の宗教、これが仏教であった。その中でとりわけ強い包容性をもつのが法華経である。

法華経はユニークな経典である。すべての神々、すべての文化、あらゆる人々を包み込んでいる経典である。方便品を中心とする前半では縁起の理法の解明によって、すべての存在の成仏の可能性を解明、従って三乗は否定さるべきものではなく、一仏乗への方便として包容している。寿量品では仏陀の時間空間での超越性を示し、仏陀の方から手をさしのべすべてを包んでくれる慈悲。それだけではない。筆者にとっての最大関心事は第二十三品（妙法華経）以後の諸神の包容摂取と、その夫々の神々を法や行者守護の神としている所である。これは仏教というより、東洋的知性・文化の一大特質であると思う。これらについてはいろいろの機会で論究して来た。然し今回は西アジアの地母神が一神教によって排撃駆逐されて行ったプロセスとの対比によって、その地母神関連の神々について項を追ってレジメ程度に略述して比較対照の資としたい。

(イ) 樹神の包容[30]

仏教の中には樹神・夜叉信仰等仏教以前の神々がとり入れられている。否むしろ釈尊もそれ以前の宗教の中で育って来たといえる。諸仏典によると、釈尊の生れる際マヤ夫人は樹神に詣で樹の枝をもつと釈尊が誕生し[31]、誕生の宮参りに樹神に詣でると、樹神は「その子こそ、『神の中の神』として逆にひざまづいた」[32]という話が出来た。やがて釈尊が出家出城の時、大地から夜叉が湧現、愛馬カンタカの足をかついで蹄の音で城中の人が目覚めないようにして城外に運んだ[33]。或は悟りの際菩提樹の下で樹神が薬を敷いて招じ入れ[34]、いよいよ悟りに近づくとマーラが悟りに入るをさまたげたのを地神が大地震を起して[35]、マーラを退散せしめた等々、仏伝中には樹神地神とのかかわりは枚挙に遑まない。樹神も地神も共に「夜叉」として古来より民衆に深く信仰されていたからである。

仏陀はこうしたインドの在来の信仰の中で生れ且つ生活して行った。特に信者から竹林精舎、祇園精舎を寄贈された後でも樹の下から樹の下に、又洞窟から岩かげにと遊行して歩いた。樹とは樹神、洞窟や岩は地神、これらに包まれて生涯を送られた。そして又樹の下で入滅して行かれた。為に「樹神の祀り方に従って祀られて行った」[36]

従って樹神・地神の考え方の伝統から釈尊はいつしか「人間」という枠を越えて、超越者の方向に進んで行った。理想的偉人の具すべき特徴たる三十二相・八十種好を具し、心には不可思議な力、即ち十力・四無畏・三念住・大悲の十八不共法を具し、現実の歴史的存在が神格化され、神々の上に住する存在となって行った[37]。

更に釈尊への畏敬は、必然的に釈尊が余りにも偉大なので、「只の人ではなく、過去世に無量の徳を積んだ方（報身）ではあるまいか」との立場からジャータカ[38]が生じ、更に進んでもともと無始無終の仏（法身）であり、この仏が救済の為この世に生れ（応身）という論理に進んで行った。これが阿弥陀一仏・法華一仏乗へと、一神的超越者に似て行った。然しこうなっても、他の神々を否定せず、自らの体系の中にとり入れて行った。夜叉の総大将の毘沙門天

がその例であった。然も仏教の包容性を示す例として中央アジアの火の神ファローが毘沙門天の大将軍パンチカと融合し、鬼子母神も西アジアの豊穣の神アルドクショーと融合[39]、更にこのハリティーとパンチカは竜神信仰と結びついた彫刻[40]まで出土している。これらに関しては筆者は印仏研42の2号・棲神66号等で詳述している。

(ロ) 火の仏の包容

更に仏教にとり入れられた仏に火の仏がある。その名の如く法華経には燃灯仏や薬王品の火焔定の如き「火」についての記述がある。

筆者はこの火の仏に興味をもち、パキスタン中の博物館を歩き、又全世界に散ったガンダーラ彫刻の中からこれを探し、自らも七・八体の「火の仏」をも集めて来た。

然しこれらの仏像はほんの少し前まではニセモノとしてかえりみられなかった。なぜなら、これらのものはガンダーラの中央からではなく北辺の山中かスワットやディール地方から出土している。ガンダーラの中心から出土した仏像は黒色片岩で、これらは英国の統治時代マーシャル[41]やフーシェ等によって発掘された。現在パキスタンやインドの博物館にあるガンダーラ彫刻はこの頃のものが多い。然して第二次大戦後、北辺山地やスワット及びディール等から

スワット・ディール出土　黒色片岩
28cm×13cm

胸に彫られた竜とメドゥーサ（高橋）

出土（主に盗掘）したものは、これらとは全然傾向の違うものである。前者がギリシャローマの影響の多いのに対し、後者はペルシャや中央アジアの影響のものである。為に後者の傾向のものが出土しても、一時「ニセモノ」として考えられていた。最近筆者の入手した彫刻のように「火が法衣を着ている」[42]といった感じのものまで出土するに至っている。これらは前者の常識を超えていて「ニセモノ」の烙印をおされていた。

然し、クシャンのコインの研究からこれがオリジナルなものであることがわかった。即ち、ヴィーマカドフィーセス王[43]から王の肩に火が出、これがカニシカ、特にフヴィシカになると王の体から炎々と焔が立ちのぼり、裏面の神像は火の神とはいえやはり体全体から火がもえ上っている。

神を超越者として考えるだけでなく王をも超越者として考える表現の手段として火を使っているからである。従って私のコレクションの仏も肩から火が「ちょろり」と出ているものから、体全体、即ち頭光背や身光背が火でおおわれているもの、更に仏頭が火焔になっていて、前述の「火が法衣を着ている仏」とまで言われる、即ち仏の実体は火であると思われる程の像まで出現し火によって仏の超越性が強調されるに至る。

然して火はどこから来ているか、リグベーダにアグニの火があるが、これがヒンズー教になってシバ神やヴィシュヌの二次的な神となっていたのがクシャンの時代に復活したとは考えにくい。どうやら西方の影響と推定出来る。これを示す例として涅槃図がある。有名なシクリの仏塔に彫られた涅槃図等のガンダーラの出土のものには、棺前に端坐するスバドラ[44]には火焔はない。百二十才で入門した釈尊最後の弟子たるこのバラモンは、他の人々が天を仰ぎ地に伏して号泣していてもこの人だけは生死を超越していて三昧に入っている。こうした図柄がガンダーラ側に共通した傾向であった。

一方バーミャンの涅槃図ではスバトラは火を肩から出し火焔定に入っているのが二例[45]ある。然し年代がガンダーラは三・四世紀、バーミャンは五・六世紀であるから単純に火は西からとは言えない。然しここにユニークな比較図がある。燃灯仏である。ラホールの博物館中央のシクリの仏塔の正面に、釈尊の前にひざまづくメーガ、その髪の毛を踏む釈尊[46]。然しこの仏の肩には火はない。然しアフガニスタンのカピシ周辺[47]出土の燃灯仏には肩から火がもえ出している。シクリのストゥーパは三・四世紀、アフガニスタン側のものもやはり三・四世紀と最近専門家に編年されている[48]から、ほぼ同時代のものといえる。昔はギリシャローマ的影響のこい作品は早く、野暮ったいローカル色のこいものはギリシャ文化の衰退期のものとされて来たが、最近はギリシャ文化をとり入れるにも、その民族種族性を残した独自性をもっている、即ちギリシャ文化のとり入れる手法は色々あって画一的でないとの考え方が出て来た。従ってガンダーラもスワットもディールも民族種族の文化とギリシャ文化との接触に当って夫々独自性があるということである。だからシクリの燃灯仏彫刻とカピシ周辺出土の九・十体の燃灯仏とには時間差はない。こうなると西には火があって東にはない。即ち、火は西方の影響であるといえよう。こうした西からの火が燃灯仏という釈尊の受記にかかわる重大な事件に、かかわっている。即ちこの西方の火を自己の中に入れ燃灯仏という重要な仏の「神話」を作って行き[49]火の神を仏教の中にとり入れようとする、その包容性を、前記メドゥーサを封じ込めた文化との対比から、筆者は強調するものである。

(ハ) 竜神信仰

(イ)と(ロ)の例の如く仏教は他の宗教を排斥するのではなく、自己の中にうけ入れている。これは仏教というより東洋の叡知である。筆者は竜神信仰の包容についてしばしば論及して来た[50]。今回はメドゥーサとの対照から竜神信仰と仏

教との関係を略述するに止める。

法顕伝・大唐西域記宋雲行記等の求経僧の旅行記や律蔵[51]及経典[52]に描かれている如く、仏教以前のガンダーラには竜神信仰が流布していた。そして又竜神信仰の祠が仏教の僧院や塔に変って行くさまが書かれている。例えばナガラハラ（アフガニスタンのジェララバード）の仏影窟はかつて竜の住んでいた洞窟だが、釈尊に教化され、そこに仏影を残したとか、カシミールの都スリナガルでは、池の中に住む（カシミールには大きな湖があって、ヒマラヤ山中の水郷をなしている）竜が、仏弟子マディアンティカに教化され、その池を干して僧院を作ったとある。[54]これは前記求経僧の旅行記と善見律毘婆沙やセイロンのマハーバンサ、マハーバスッツの記事と共通している。故に仏教は竜神信仰の徒を教化すると共に、その神を仏教の神として包容して行ったことがわかる。

それだけではない、四分律には海の底の竜王の城へ人々を幸福にする宝珠をとりに行く場面がある。悪戦苦斗やっと竜王に会って宝珠をもらうことが出来た。その時竜王は「二竜をつかわして」[55]これを守護させて地上に送り帰させたという話がのっている。こうなると竜は宝珠を守る「守護神」という性格をもって来る。これに類した話は求経僧の旅行記に出ている。即ちカニシカが後に言う所謂カニシカ大塔を作って、その上に真珠を散りばめた網で覆って荘厳した。然し後世に盗人が現れてこれを盗ることを恐れ、網をたたんで穴を堀って埋めた。そして『四竜をして』守らしめたとあるから竜は守護神となって来ている。[56]

筆者はパキスタン中の博物館や全世界の博物館や個人蔵の菩薩像を単念に調べあげて来た。その結果約半数以上の像の胸に竜が彫られていた。向き合った竜が宝珠や経巻をくわえている。なぜ二竜か、これが四分律の二竜か否かは資料が乏しくて筆者には分らない。

弥勒菩薩の胸の竜　ラホール博蔵

胸に彫られた竜とメドゥーサ（高橋）

竜の上に坐すバンチカ（上）とハーリティ（下）

然し「経巻宝珠をくわえている」ことだけは事実である。これからみると経巻や宝珠を守っているとしか考えられない。然も仏位の次の、然も仏滅後七億何千万年後の未来世に、仏として出現して人々を救う弥勒仏になる菩薩の胸の中で「仏法」を守るという所が注目に値いする。然もこの竜は仏教以前の異教の神、これが仏教の包容性でなくて何んであろう。

◇

かくて同じ地母神系統の竜とメドゥーサ、これが一方では守護神として後々まで仏教の中にとり入れられて行くのに対して、ローマ皇帝の胸に一旦は彫られながら一神教がひろがって来ると、地下水槽の中に封じ込められる悲惨な運命になるメドゥーサ。この対比、ここに仏教の特徴があった。それだけではない、地母神の数々・

夜叉或は地神更に異教の神である火神をも自らの中に神として包容するだけでなく、とり入れられた異教の神々同士が和合している。竜の上に坐すパンチカ・ハーリティーがそれである。ここに異文化包容と排他の東西文化の特質と典型を筆者はみるのである。

国連が出来た時、参加国はたかだか百か国に満たなかったが、現在は二百五十か国にもなっている。民族自決、夫々の文化の独自性を強調する時代の趨勢になって来た。こうした時代に、他の存在・文化の存在を認めない排他的な一神教的なものでは争いは尽きない。ユーゴでの血で血を洗う戦、アラブとイスラエルの争いがその例である。こうした排他の争いを救いうるのはアショカの摩崖証勅の示す東洋の叡知、和の精神、仏教特に法華経の寛容性・包容性、これこそ地球の未来を救うものであると確信するものである。

〔註〕

(1) 栗田巧著 Gandhara Art II, p48
(2) トルコ・アンタリヤ博物館蔵
(3) メドゥーサは大地（ガイヤ）の子ケトと海の神ポントスのポルキュスとの間の子
(4) 経典の中の八大竜王とか寺の梁や柱に竜の彫刻
(5) トルコ・シデ遺跡ディディマ遺跡等のアポロン神殿の廃墟に見られるこわされたメドゥーサ
(6) 東ローマ帝国ユスティニアスがイスタンブールに地下水槽を作った時
(7) エフェソス博物館蔵女神アルテミスの像の無数の乳房
(8) アンカラ博物館蔵チャタルヒュユク遺跡出土二十センチ大の土製の太ったビーナス
(9) エリアーデはブカレスト生れ世界各地の大学で講ずる宗教学者、エリアーデ選集十二巻有名な「聖と俗」「シャーマニズム」がある。

胸に彫られた竜とメドゥーサ（高橋）

(10) エリアーデ「大地農耕女性」堀一郎訳未来社
(11) 釈尊誕生地ルンミディの池畔に大木の下に祠や赤粉
(12) インド各地の奇岩洞窟を神の住む所とされ、赤い粉がぬられ聖所とされている。
(13) シリア・マリ遺跡出土　アレッポ博物館蔵
(14) 京都国立博物館　縄文土器にマムシが彫られた土器
(15) 西南インドに無数の石窟　夏長者達の避暑の為寄附、パキスタン西北方から西アジアまで石窟が多いのは寒暖の差の多い所では洞窟が快適
(16) 棲神六十三号三十頁に写真掲載
(17) バールフット・サンチー・マトウーラに美しいヤクシヤ・ヤクシーの彫刻
(18) ナガールジュナコンダ等に仏塔の下にコブラのいる彫刻多数あり。
(19) カンボジア・アンコールワットは蛇におおわれている。
(20) 蛇目のイシュタール（　　）
(21) クレータ島イラクリオン博物館
(22) トルコ南部ベルゲ・シデ遺跡等
(23) シリア西北部ウガリットの五十キロ北方のジュベル・アクラ山にバール神が住むと考えられたのはこの山がこの地方で最も早く冬雨がふる所だから。
(24) アレッポ考古博物館蔵
(25) 旧訳聖書創世記創造と堕落（二・四―三・三四章）
(26) 旧訳聖書三人の客人・ソドムとゴモラ（一八―一九章）
(27) シデ遺跡アポロン神殿に無数のメドゥーサ像出土
(28) アンタリヤ博物館蔵
(29) 中村元氏原始仏教から大乗仏教へ・一六―一七頁
(30) 印仏研第三七の二、夜叉信仰の背景　棲神五八号従地涌出　棲神六三号樹と釈尊等で論及

(31) 仏伝及びガンダーラ彫刻に
(32) Latina Vistra chap. VIII.
(33) 方広大荘厳経出家品（大3—五七五下）
仏本行集経第十七捨官出家品（大3—七三二下—七三三上）
普曜経第四出家品第一二（大3—五〇七中）
仏所行讃出城品第五（大4—10—中）
修行本起経出家品第五（大3—四六八上）
仏本行経出家品第一一（大4—六八下）
(34) 棲神五八筆者の「従地涌出」三〇頁に写真掲載
(35) 棲神五八　三二頁に写真掲載並びに関連記事
(36) ジャータカ三〇五パラーサ本生、その他ジャータカ五〇・四七九・五三七。印仏研三七の二　夜叉信仰の背景で論及
(37) 中村元氏前掲書五〇頁
(38) 中村氏前掲書五三頁
(39) 筆者は仏教学年報五二号の六一頁で論及
(40) 棲神六六号「一仏乗のもとに」九頁に写真掲載
(41) Marshall Taxila 等、フーシェ仏語発掘報告書多数
(42) スワット地方出土、同じ場所にあった対の彫刻に中央アジアの人物像
(43) Rosenfield（ローゼンフィールド）Dynastic Art of kushan 巻末コインの写真集
(44) 栗田氏 Gandhara Art I, 242, 243 参照
(45) 京都大学バーミャン1・2・3・4
宮地昭中央アジア涅槃図の図像学的考察仏芸一一七号
(46) 栗田氏前掲書　二一図　七図参照
(47) カーブル博物館蔵燃灯仏像

(48) 田辺勝美氏迦畢試国出土の仏教彫刻の製作年代（オリエント昭和四八年）
(49) 定方晟　燃灯仏の起源とナガラハラ（印仏研19―1）一九七〇
(50) 棲神六六号「一仏乗のもとに」を論及び印仏研42―2号
(51) 善見律毘婆沙第二（大24―六八四下―六八五上）
根本説一切有部毘奈耶雑事四〇（大24―四一〇下）
(52) 阿育王経大50―一五六上中、セイロン島史八―一三等々
(53) 大唐西域記　那揭羅曷国（大51―五七九上中）
道栄伝（長沢訳訳宗雲行記二一〇―二一一頁）（東洋文庫）
(54) 大唐西域記　迦湿弥羅国（大51―八八六上中）
(55) 四分律四十六　破僧揵度品（大22―九一二中）
(56) 宋雲行記道栄伝二一〇―二一一頁（東洋文庫）

参考文献

栗田　功　ガンダーラ美術Ⅰ・Ⅱ
安田喜憲　大地母神の時代（角川選書）
〃　気候が文明を変える（岩波書店）
田辺勝美氏
杉山二郎氏　錠光仏本生図と施无畏の起源
定方　晟　バーミャンの仏教遺跡について
燃灯仏の起源とナガラハラ―印仏研19―1（一九七〇）
ミイロと弥勒
ナガラハラおよびハッダの仏教

古代インドの歴史意識

町田是正

目次

一　はじめに—問題の所在
二　「インド」を意味する語
三　「歴史」を意味する語
四　ヴェーダ讃歌の非歴史性
五　むすび—歴史意識の欠如—

一　はじめに—問題の所在—

古代インドの哲人の多くは人生（観）の最高目標として、(1)「法 Dharma (s)」・(2)「理財（実利） Artha (s)」・(3)「性愛（愛欲） Kāma (s)」そして(4)「解脱 Mokṣa (s)」の四つを掲げ、その実現のために努力していた。これら四大人生観に関する基本的文献として、㈠『マヌ法典 Manavadhrma-śāstra (s)』、㈡『カウティルヤの実利論 Kautilya; Arthaśāstra (s)』、㈢『マッラナーガ・ヴァーツヤーナの性愛論 Mallanāga Vatsyayana; Kāma-sūtra (s)』、及び十三世紀のヤーショーダラ Yaśodhara の注釈書『ジャヤマンガラ Jayamaṅgala』等があり、それと㈣『ウパニシャッド（別称を「ヴェーダーンタ Vedanta」） Upaniṣad』を中心とする哲学書と仏教経典であることは周知の所である。

古代インド人の四大人生観に共通していることは、その何れもが個々の精神的・物質的欲求の満足に向けられていること、つまり「自己充足 satisfaction (E)」という個人的志向が優先されているのであって、インド同胞民族とか国家の動向などに関しては意識は薄いのである。

本来、民族国家の動向、また同胞民族の興亡（歴史）に深い関心を寄せることは、洋の東西に共通する民族意識である。その事は、我国の『古事記』（七一二年元明帝に献上）の編纂された目的の「削偽定実」（古事記序文）を見ても明らかであり、また古代オリエントの諸王朝——Egypt・Babylonia・Hittites・Assyria——に関しても多数の年代記 Chronicle (E)・金石文 Epigraph (E) が残され、殊にエジプトからは草紙文書 Papyri (E) が沢山発見されている。古代ギリシァには（前四八五—八六）ヘロドトスの『歴史 Historia ἱστορία』があり、中国には（前一四五—八六）司馬遷の『史記』が残され、後の中国正史の標準形式の紀傳体の叙述と人間の記録の範を示した。

古代インド文明を形成した主役はアーリアン Āryans（高貴な人の意）である。彼等はヴェーダ宗教文学は沢山残したが、どうした訳かインダス流域への侵攻、先住民との激斗に関する民族の興亡史は全く残していない。この古代インド史書の欠落について、インドの生んだ世界的な科学者・歴史家・思想家であったコーサンビー（D.D.Kosambi 1907～1966）氏は自著の中で痛切な想いをこめて次のように述べている。

> インドでは前三千年紀から文字を知っていた。それなのに何故インドでは歴史記録及び歴史意識が異常に欠けていたのであろうか。何故に仏教は生れた国でかぐも完全に滅んでしまったのであろうか。……書かれた資料は殆ど無く重要な単語の意味は時代とともに変ってしまった。[注1]

インド古代史に関する歴史記録の欠落については、我国のインド学の泰斗・中村元博士によって夙に指摘されてい

る所である。[注(2)]

人類史を播くとき、民族的苦悩・悲惨を体験した民族は、同胞民族の生きている歴史的現実に対して体系的な思索をめぐらし、歴史世界の構造について鋭い歴史意識を表現している。例えば「バビロン捕囚 Babylon Exile (E)」(前五六八 新バビロニアによるユダヤ住民強制移住)という民族的悲惨を体験したユダヤ人は、ヤーヴェ Jahweh 信仰・契約観念・選民思想・救世主思想を育み、前五三八年にイエルサレムに帰ると、『旧約聖書』※を基にしてユダヤ教 Judaism (E) を創始していった。

※旧約聖書 Old Testament (E) ……ユダヤ人は「旧約聖書」とは呼称しない。旧約の内容を律法「Torah・予言書 Nabim・諸書 Chethubim の三部分類して、その首文字を合せて「タナハ Tanach」と呼んでいる。またユダヤ人の精神生活の源泉として、聖書(タナハ)と共にユダヤ人の口承律法を収録した「タルムード talmud Tôra」がある。

また一八〇八年、プロイセンがナポレオン軍の蹂躙下にあったとき、哲学者フィヒテ(J.G.Fichte 1762~1814)が『ドイツ国民に告ぐ Reden an die Deutsche Nation』と題して講演、ドイツ民族の文化の誇りと自信・愛国心を喚起鼓舞した事は有名である。

古代インドに於ける大事件、それはアーリア人がカイバル峠(Khyber pass・ヒンドゥークシュ南部)を越えて、大挙してパンジャブ(panjab)地方に侵入、先住ドラヴィダ民族(Dravidians)の築いたインダス文明を破壊した出来事であった。この大事件に関して『ヴェーダ讃歌 Veda-Kirtana・Veda-sûkta』の表現では、英雄軍神インドラ(purandara(s) 帝釈天)が敵将シャンバラ(Sambara)が統率して頑強に抵抗する「城砦 Pur」を破壊し、征服していくという神話物語の形で伝えられている。その「讃歌 sûkta」による表現は決して歴史記録ではない。

古代インド人はすぐれた宗教文学を沢山に残した。その代表作が『ラマーヤナ Ramâyana』(四世紀頃現存の形で成立)であり『マハーバーラタ Mahabharta』(三世紀頃現存の形で成立)であるが、古代インドに於ける凄惨な部族斗争を主題として語られてはいるが、それはサンス

クリットによる見事な叙事物語であって、歴史記録ではない。古代インド人は、政治経済の変革・社会生活などの人間の記録は全く残すことをしなかった。この際立った違いは、単に歴史意識の欠如の問題に限られることではなく、思想全般・思惟構造・生活様式・政治経済の構造にも関わる問題を提示するのではなかろうか。

二「インド」を意味する語

一九五〇年一月「インド民主共和国」(Asoverein democratic republic of India)の成立宣言、同時に「インド国憲法」(The Constitution of India)を施行して、インド近代化の最大の阻害となっていた「カースト(caste 種姓) Varṇa・Jati (s)」に基く身分差別の撤廃、殊に「不可触賤民 Achuta (s)」の廃止を規定したが、憲法の崇高な理念が実現するためには、将来になお長い時間を必要としているのである。[注3]

我々がインドを旅して驚くことは、その無限とも云える多様性と不調和とである。服装(clothes)・体型(figure)・皮膚(skin)・言語(language)・食物(food)・生活様式(livelihood)・慣習(practice)・宗教(religion)・経済格差(economy-disparity)・更には病気(sick)・飢餓(starvation)・幼児死亡(infant-death)の悲惨な現実をみせつけられる。インドでは現在でも十二哩(一九キロ)毎に言語が異なると云われる。言語の不統一を象徴するものに「ルピー紙幣(紙幣の種類は百・五十・二十・十・一のrupee-paperがある)」には英語と憲法で制定された十四種の言語が印刷されている。インドには民族共属の言語と文字が無いのである。

仏教の故地・インドを旅して考えさせられることは、民族意識とは何か、地域性とは、宗教・言語の違い、国民性・経済生活など、その相違と格差が改めて見直され、その上で「同一性 Identity (E)」の主体的獲得が緊急の歴史的課題であることを痛感させられる。

「インド民主共和国」の国内で使用する正式国家の呼称は、ヒンディ語の「バーラット Bhārat」又は「ヒンデュスターン Hindustān」である。元来「Bhārat」はサンスクリットの「Bhārata」又は「バラタの土地 Bhāratavarṣa」

から発生した語で、元々「インド India」を意味している。この「バーラット」の呼称は、最古の文献『リグ・ヴェーダ Ṛg-veda』の詩頌に見える部族名であり、有名な叙事詩『マハーバーラタ』は明らかに「Bhārat」の部族名を伝承したものである。

次に仏教では、インドを意味する語として「閻浮提 Jambu-dvīpa (s)」を用いている。仏教の宇宙観によると、宇宙の中心に「須弥山(妙高山) Sumeru」があって、世界を東西南北の四洲に分ち、閻浮提は南洲に当るとする。閻浮提とは「閻浮 Jambu」の樹木が繁茂している「波提・洲 dvīpa」を意味する。南部に当る世界が台(梯)(trapezium)形をしていることから、インド亜大陸の地形がオーバーラップしていると思われる。

先に見た「Bhāratavarṣa」の地域は、仏教で云う「閻浮提」世界に含まれるとされている。サンスクリットが示す「Bhāratavarṣa」又は「Jambu-dvīpa」のインドを表現する世界は極めて物語的であって、政治統合体としての「インド国家」を総称したものではない。古代以来、インド人が「Bhārat」或は「Jambu-dvīpa」という特異の語をもって呼称した所に、インド人の民族意識・歴史意識の欠落を窺うことができよう。

現在、我々が「インド」と呼称している国家名は、サンスクリットの「Indu 月輪・月」又は「Sindhu 大河」※に由来するとされる。

※閻浮提の中央の池・Anavatapta から流れ出る四大河—ガンジス Ganga 殑伽・インダス Sindu 信度・ヴァクシュ Vakṣu 縛芻・シータ Sīta 私陀—のうち「Sindhu」を指す。

この「Indu」・「Sindhu」の呼称が、隣国のペルシァに伝わり「Hindhu」と呼ばれ、更に遠くギリシァに伝わって「India」と訛り、インド住民を「Indos」と呼んだ。偶々ヘレニズム時代(前三四—前三〇)の風潮にのって東地中海・西アジア一帯

に広まり、ヨーロッパ人は「Indian」・「Inder」と呼んだとされている。

我国で古来、「インド」と呼称する場合はサンスクリット語（Sanskrit 完成・洗練された語）・パーリ語（Pali 聖典語）・プラクリット語（Prakrit 俗語・民衆語）の「Hindhu」・「Sidhu」をインドと呼び、これを音写して信度・身毒の漢字を当て、また「Sindhu」がイラン語に訛ったものを音写して賢度・賢豆の漢字を当てている。玄奘が『大唐西域記』の中で「今従二正音一云二印度一」[注(4)]と使用して以来、「印度」の漢字表記が常用されている。仏典では後漢代から「天竺」の語を用いることが多い。

以上の語彙の解説から分るごとく、インド人は古代から現代に至るまで、自国に関する統一した正式呼称をつくることをしなかった。また自分達を「Indian」・「Indos」と呼ぶこともなかった。インド文化形成の主役はアーリア人であった。彼等は自らを「Ārya 高貴な人・聖人」と呼び、征服した先住民族を「Mleccha 蛮民」と呼び蔑視した。こうした民族差別観は、恰も古代ギリシァのポリス成立期に於て、ギリシァ人が自らを「Hellenes（英雄ヘレンの子孫）」と称して同胞意識を強め、異民族を「Barbaroi（吃り苦しい言葉を話す者）」と呼んで軽蔑したのと同様である。ともかくアーリア人は征服したドラヴィダ人を併合して「インド人」と称することはなかった。※

※アーリア人は自らを「高貴な人 Āryan」と称したが、元々はコーカス山脈の山麓の草原に原住し父権的社会組織の遊牧民であったアーリア人が、「Mleccha 蛮民」と呼んだ先住ドラヴィダ民族の方こそ前二三〇〇年頃から先史青銅器都市文明を成立させていた。インド・アーリア人の方が野蛮の侵略者であった。アーリア人が先住民族を制圧し得たのは、アーリアが文化的に高度であったからではなく、組織的な暴力戦斗部族であったからである。

古代インドは、全国土が政治的に統一された時代はなかった。ヴェーダ時代（Veda A・BC1500〜600）・マガダ国時代（Magadha A・BC600）・マウルヤ王朝（Maurya A・BC317〜180）・サータヴァーハナ王朝（Sātavāhana A・BC100〜AD300）・クシャーナ王朝（Kushāna A・100〜300）・グプタ王朝（Gupta 400〜500）・ヴァルダナ王朝（Vardhana A・600〜700）などの諸王朝が興亡したが、その王権の波及し

た領域は限定されていた。マウルヤ王朝のアショカ王時代(Aśoka 13C269~232 reign)・クシャーナ王朝のカニシカ王時代(Kanishika 130~170 reign)・ヴァルダナ王朝のハルシャヴァルダナ王時代(Harṣavardhana・Śīlāditya (606~647 reign))などその最盛期でも全インドを統治することはなかった。しかし諸王朝の英邁な君主は、文化人を都城に集めて学芸の興隆に意を注いだ。マウルヤ朝とグプタ朝の都城パータリプトラ(pataliputra 華氏城)・ヴァルダナ朝の都城カナヤークビジャ(kanayākubja 曲女城)・クシャーナ朝の都城プルシャプラ(purushapura 現ペシャワール)等には、宏壮・均斉・優雅・艶麗・豊満などの特徴を示す建築と彫刻、そして文学が開花した。これらの学芸はインド三大宗教―ヒンデュー教・仏教・ジャイナ教―と深い関わりをもって発展した。

古代インドの政治的不統一であったことが、民族の共属意識を弱める第一原因と考えられる。その事が延いては言語・生活様式・経済・慣習・宗教などの多様化を生み出す事となり、民族共属の意識を愈々稀薄にしたことは否めない。民族意識の無い所に歴史意識は育たないのである。古代インドは、まさに「バーラット」の人々の集まったヴェーダ宗教文化の国であったのである。

以上「インド」に関する語彙の解説を試みて云えることは、インドに於ける「国」(country)「国家」(State-nation)とは、我々が通常的に考える「主権のある政府の下に統一された国」の概念とは全く次元を異にしている。古代インドに於ける国とは、村落共同体によって構成される地縁的な共同体と称するものであって、一定の領土と民族、そして政治権力と組織をもつ政治社会、つまり政治的に統一された国家とは無縁であった。インド亜大陸として持続し得たのは、民族とか国家という意識を超越した「宗教による共属意識」(ヒンデュー教・仏教・ジャイナ教・イスラム教)が強かったからであろう。

三　「歴史」を意味する語彙

現在、インドで使用されている「歴史」に当る語は、(1)ヒンディ語(Hindi インド連邦公用語)の「Itihās」・「Itihāsa」と、(2)ウルドゥ語(Urdu パキスタン公用語)の「Tarīkh」である。「Itihāsa」は元来はサンスクリットの「iti＋ha＋āsa」（斯の如く・実に・ありき。昔し、かくの如く、あった）に由来している。従って「イティハーサ」は「歴史」の意味よりは、詩史・叙事詩・昔話の意味合が強いのである。

古代インド人の生活規範の中で、最も権威を有した『マヌ法典』の中に、次の様な規定がある。

祖霊祭 Śrddha のときに、吠陀 Veda・法典 Dharma-śāstra・伝説 ĀKhyāna・古伝 Itihāsa・神話Purāna・及び讃詠（歌）Kirtana・（補歌 Kira）を聞かしむべし。[注(5)]

右の（第三章二三二条の部文）『マヌ法典』は、「歴史」について説明したものではなく、「Itihāsa」の語と共に「歴史」的な語彙を並べて、人間の始祖マヌの言葉「Manusmṛti」という絶大の権威をもって、古代インド人の学習すべき事を規定したものである。規定からも明らかの如く、歴史事実とか、正確に史実を伝えるという無味乾燥的な事は排除して、古代聖賢伝説・英雄伝・神話・讃歌などを「歴史」として享受させようとしている。この事は「Itihāsa」の派生語「itivṛttaka」（本事・昔話・斯きの如き出来事）が示す語意からも理解される所である。

次にカウティルヤの『実理論』の一節を参照してみよう。

サーマ・ヴェーダ Sāma-veda・リグヴェーダ Ṛg-veda・およびヤジュル・ヴェーダ Yajur-veda これら三つが三ヴェーダ実理学（tri Veda-artha-vyutpati）である。アタルヴァ・ヴェーダ Afharva-veda およびイティハーサ・ヴェーダ Itihasa-veda も亦ヴェーダである。[注(6)]

一日の午前は象・馬・戦車・武器の学問の教練を受け、午後は古伝 Itihāsa を聴受する。古神伝 Purāṇa・史伝 Itivṛtta・逸

話物語 Akhyāyika・例話 Udāharaṇa律法論 Dharmaśāstra・および実理論 Arthasastra これがイティハーサ Itihāsa である。[注5]

右の『実利論』では、四種のヴェーダ聖典と全く同格の扱いで、「イティハーサ Itihasa」も聖典（しょうてん）（聖伝文献）とされ、その内容は神話・史伝・逸話・実話・律法・制度などを包括している。即ち、「イティハーサ」はインド人の観念からすると「歴史」（出来事を記録する・事実を探求する）ではなくて、神聖な聖典であった。而も後になると、「律法論」は法律や生活規範を取り扱う法律文献へと定型化され、また『実理論』も国家経営・利益追求の政治経済学書へと定型化していったので、「Itihāsa」の構成内容から、国家・民族・社会・制度・政治・経済などの事柄が脱落してしまい、愈々「Itihāsa」の語彙から歴史的要素が欠落することとなった。

古代インドに於ける「歴史」の意味に近い語彙を探すと、先の『実利論』の中でも列記されていた (1) 本事・昔話 Itivṛttaka・(2) 古伝説・古譚 Purāna・(3) 逸話・故事 Akhyāyika」・(4) 例話・引喩 Udāharaṇa などである。然しこれらの諸語も「歴史」の意味にはほど遠い。我々の知っているギリシァ語の「Historia 事実の探求・調査」から派生した「History 源泉・歴史」とは異なる事は云うまでもない。古代インド人の関心事は、専ら神話・文学・宗教の世界に向けられ、神々を讃美することであった。

古代インド人の社会意識の底辺にあったものは「カースト Caste」のみであった。この事は『マヌ法典』（身分分制・不可触賤民）（輪廻と解脱）（身分分制・バラモン優位制）の第十章・第十二章・第五章を追条見ただけでも、古代インド人の眼中にあったのは「ヴァルナ Varṇa」と「ジャーティ Jati」のみであって、国家・民族の事などは全く意中になく、また婆羅門の利益のみ優先して、他のヴァルナ（種姓）の福祉など全く問題にもしていないのである。

さて、古代インドの世界文明に寄与した最大の功献は、数学における「零 ZERO」概念を考案して、「整数 INTEGER」と「負 MINUS・NEGA-TIVE」の概念を樹立して「十進法 Decima system」を可能にしたインド数学の創始である。然るに古代インド人は自らの思索の中に数学の方法を取りこむことをしなかった。従って数学に基く合理的思惟を生むことがなく、また時間認識の方法にも「数」の概念を用いることがなかったので、実生活に於ても正確に時間・年次・日時を記録することを怠たった。世界文明史上でも最大の発見とされる「零」の概念をして、古代インド人は数理に用いることなく、これを「空 sūnya・suñña」概念へと転換して、合理的思索世界から宗教世界へと変えてしまったのである。

古代インド人は「数」概念を手離すことで、物理的時間の経過の表現に於て正確性を欠き、延いてはその事が歴史（時・場・人）時間の観念を稀薄にしてしまった。例えばヒンデュー教では、世界の時間経過を表現するのに、(1)作用・活動 krta・(2)破壊・災害 Tretā・(3)像法・仮法 Dvāpara・(4)悪世・末世 kalin という四期に分けているが、その表現は宗教文（韻律詩）学的（韻律的）であって、数値による表現は見られない。

仏教に於ても独特の時間の捉え方をしている。(1)数量的に表示される物理的（機械的）時間のことを「加羅（実際の時間）kāla」と称し、(2)時機とか時点という実在と現象の区別の難かしい時間（境地）を「摩耶（仮の時間）Samaya」と呼び、(3)人間の意識の中で計測（思索）される時間を「阿陀波耶（世・世間）Adhvan」と呼んでいる。この様に仏教に於ても、時間の実体化の考えを排除して、諸行無常の無限定の原理を基にした時間とか時代の経過を考える。従ってその時間の表現はドラマチックとなることもある。

たとえば『法華経』如来寿量品で説示される無始無終の悠遠時間を想定して、久遠実成の思想を表現する説示は極

めて劇的である。

我実成仏已来・無量無辺・百千万億・那由他劫[注8]・
自我得仏来・所経諸劫数・無量百千万億・億載阿僧祇[注9]

右の寿量品では、当に天文学的数値をもって久遠実成の思想を表現しようとする。古代インド人は世界に稀な独特の時間観念の持ち主であったことを充分に踏まえ、その上で歴史意識の考察をすすめるべきであろう。

四　ヴェーダ讃歌の非歴史性

中央アジア草原地帯・コーカサス(caucasus)北麓に原住していた「アーリア遊牧民」は、前二千年頃、ヨーロッパとアジアの二方向に枝分れをして大移動を開始した。東方に向った一群は、前千五百年頃に氏族と部族の単位でカイバル峠(Khyber Pass・標高一〇三〇米)を越えて波状的に馬と戦車とをもって、インダス中流のパンジャーブ平原に侵入、先住のドラヴィダ人(Dravidians)・ムンダー人(Munda)との間に激斗を繰り返し、先住民の築いた高度の青銅器文明を破壊し征服していった。

インダス中流域の都市文明を破壊していったアーリア人の歴史記録は全く残っていない。史実を伝えるものは、考古発掘資料が唯一のものである。先住民との激斗を伝えるものは、神話的ではあるが『リグ・ヴェーダ讃歌』が唯一の文献と云えよう。既に再三、言及したように『リグ・ヴェーダ』は天啓聖典であって、戦斗に関する時代・場所・戦斗経過・人物などは史実を伝えることを目的とはしていない。専ら英雄軍神の活躍を讃詠することに主眼をおいている。

『ヴェーダ讃歌』の一節を参照しておこう。

われ今宣べらん。インドラ（Indra）の武勲をヴァジュラ（Vajira 金剛杵）を手に持つ神が、最初にたてし勲しは、ヴィリトラ（Vṛtra 蛇形の悪魔）を殺し、水を穿ちいだし、山々の脾腹を切り裂けり。

インドラ（Puraṁdara 帝釈天とも云う）は肩を拡げたる最も頑強なる障碍、ヴィリトラを殺せり、偉大なる武器ヴァジュラによって。斧もて伐り倒されたる木株のごとく、ヴィリトラは大地の上に俯伏に横たわる。[注10]

罪に汚れし諸人は、いつしか彼が弓の的、傲れる者は神の敵、アリアン族に仇をなすダスユ（Dasyu・Dāsa 奴隷・卑猥の賤しき者の意）もあわれ彼の犠牲、その神の名はインドラ天。

春秋四十山深く、ひそみし悪魔シャンバラ（Śambara ダスユを統率する指揮官・インドラ天の大敵）も、神の眼にあばかれつ、力を誇示して横たわるダーナ竜の殺戮者、その神の名はインドラ天。

天も敬い地も屈む、神にしあれば足曳の、山もひれ伏すその力、手に振りかざす金剛杵、ソーマ（Sōma 神酒・月天・宿星の意、エネルギー源）の神酒に酔うという、その神の名はインドラ天。[注11]

『ヴェーダ讃歌』（Ṛig-Veda sūtra）の中で英雄軍神として崇敬讃詠されているのは「インドラ天」（別称・不蘭陀羅 Puraṁdara 帝釈天）である。インドラ天の活躍は恰もアーリア人戦士の理想の雄姿を想わしめる。インドラ天はヴェーダ神話の中で最も擬人化されている。大敵ダスユは指揮者のシャンバラに統率され、広くて頑固な「城砦 Pur」に立て籠り抵抗する。この城砦に対して、インドラ天は繰り返して攻撃し破壊していったとしている。

さて『ヴェーダ讃歌』に見える「城砦」について、従前の解釈では文字通り聖典の中の古譚・神話と解し、又はインドラ天の絶大の威力を讃歌したものと受けとめてきた。然し一九二一年パンジャーブ州モンゴメリ地区遺丘の発掘、次で一九二二年シンド地方のラールカナ地区の発掘など、考古発掘と調査の結果、前千五百年アーリア人がインダス中流域パンジャーブ地方に侵入したことが明らかとなった。[注12] この考古発掘の成果の内容は、『ヴェーダ讃歌』の偈頌に見えるインドラ天の城砦破壊の経過と見事に符節するのである。*

※ヴェーダ讃歌に見える強大な城砦(pur)は、正しく先史インダス都市文明の遺跡群—Harappa・Mohenjo-daro・Chunhu-daro・Judeirjo-daro・Lothal—等であって、それはヴェーダ詩偈に見える要塞化された城砦である事は疑う余地が全くない。

次に後期ヴェーダ時代、アーリア民族のガンジス流域の大平原への進出を語るものとしては、叙事詩の『Mahābhārta』と『Ramāyan』そしてヒンデュー聖典「Purāna」(医学・建築・音楽・習俗・哲学など)の諸教典中の詩伝説が知られている。周知のごとく二大叙事詩は後世に増補されて現在形になっているから、その厖大な詩頌を歴史と見ることは出来ない。[注13]

※後期ヴェーダ時代、アーリア民族のガンジス支流ジャムナ河 Jumnd (Yamunā) とガンジス河との中間の肥沃な平原へ進出し定住した史実を証拠だてるものとして、例えばアヒチャットラ Ahicchatra (ガンジス中流の街) の西方「サラスヴァティ Sarasvati 水に富むの意) 河の上流遺跡の発掘と遺物がある。出土した灰色彩文土器の放射性炭素14の測定で前千百年から前五百年とされ、後期ヴェーダ文献の表現と一致する。[注14]

元来、サンスクリット諸文献は、(1)伝説・詩史 Itihāsa 及び神話・古譚 Purāṇa などの古代物語群(代表作がマハーバーラタ)と・(2)詩篇(代表作がマーヤナ) Kavya から成っている。これらの諸文献は『マヌ法典』と共に聖伝文学の枠組に入れられ「聖典(しょうてん)」として尊重されてきた。その表現法も神々を讃える「頌(偈頌・偈他) Gathā (s)」という詩体で語られている事からも、歴史記録の範疇とはかけ離れ、むしろ宗教聖典と云うべきものである。例えば『マハーバーラタ』は十万頌に及ぶ世界最長の叙事詩であり、その展開される内容は宗教・神話・伝説・風俗・制度など、ヒンデュー教の百科全書の観がある。特に第六巻二三章より四〇章に亘る「バガヴァット・ギータ Bhagavad-gītā」(全十巻で Śloka を主とする七〇〇頌から成る)(神の歌) はヒンデゥー教ヴィシュヌ派の聖典教書となっていて、哲学的基盤を「Sāṁkra」に置き、実践的基盤を「Yogā」に求め、汎神論的な Vedānta の思想を多く含んでいる。

インド史に於て、後期ヴェーダ時代と云えば、それはバラモン文化の樹立された時代、宗教文化の華が咲いた時代、そしてヴェーダ文化の波がガンジス河・ジャムナ河の中央平原、クル地方に波及した時代とされている。しかし社会制度の立場からみれば、閉鎖的・孤立的な農村社会を基盤として成立した宗教文化であった。『ヴェーダ讃歌』を他の世界の宗教聖典、たとえば『旧約聖書』（ユダヤ教では「タナハ」と呼称）は律法・歴史・詩歌・教訓・預言の各書から成っているが、聖典としてユダヤ教徒の信仰の典拠であると同時に、パレスチナの風土の歴史文書の性格を備えているのである。※

※ユダヤ教では、旧約聖書を(1)律法 Torah・(2)予言書 Nabim・(3)諸書 Chethabim の三部に分類して、その首文字を合せて「Tanach」と呼んでいる。旧約聖書は創世記・出エジプト記・レビ記・民数記・申命記・エレミア記……等々の各書から成るが、聖書が歴史書の性格を担っている一例として、サムエル記の中で、ダビデ王朝の諸事件を記録しているが、その記録は歴史的信憑性が高いとされている。

『ヴェーダ讃歌』は全篇が神々を詠歎する旋律的な宗教讃歌である。後期ヴェーダ時代に宗教思想に変革が見られた。即ち「梵書 Brāhmaṇa」から「奥義 Upaniṣad」へと新しい神秘主義的な哲学を生み出していったが、その表現形式は二百に近い散文・韻文より成る書巻であって、周知のごとく「ウパニシャッド」の中心思想は梵我一如に究極する根本の探究であり、また後期ヴェーダ文献の最後を形成することから「Vedānta」とも称せられている。

次に歴史意識と最も深く関わると思われる末法思想について少しく見ておきたい。一般に「末法思想」と云えば、仏滅後に正法・像法・末法の三時を経過して仏教が衰退するとする仏教史観と解されている。特に「末法」は仏法衰滅した濁世澆季の世とされ、危機意識が強く表現される時代とされている。

しかし初期の仏教経典に於ては、いまだ「末法観」は明確な形を見せてはいない。即ち「末法」時の受けとめ方

が、単に仏滅後の「荒廃した時代」とか「人間の善悪の価値が顛倒した時代」という、散文的な表現がされており、歴史的な現実をみつめる危機意識は乏しく、末法観の意識は未分化であることが窺えるのである。

初期の大乗経典の『月灯三昧経 Candrapradi-pasamādhi-sūtra (s)』によれば、末法に相当する時代を表現するのに「荒廃の時代 dāruṇa-kāla」。「大恐怖の時代 mahābhaya-kāla」・「困難の時代 sukisara-kāla」。「滅尽の時代 kṣaya-kāla」などと示している。その表現を見ると、時間の経過とか、衰滅に至る経過を具体的に示す表記は見当らない。そして『月灯三昧経』では、明らかに「末法」に当る語彙が「正法の消滅 Saddharmāntardhanā」と示されている。しかも我々が「末法」の意で使用している「正法の滅亡 Saddharmavipralopa」と並記して説示されている。

saddharmāntardhāna-kalasamay saddharma-vipralope varlamāne ima evamrūpāḥ sūtrantā bahujanajugupsita bahujaanavivarjitā bahujanviruddhā mahajanotsṛṣṭascabhūran[註(2)]

右に参借した『大方等大集月灯経』に於て「Saddharmāntardhāna 正法の消滅」と説示する、その「消滅」の語意について、「正法が次第に衰退して消えて無くなる」と文字通りに解せば、正法時から像法時へ更に末法時へ至る接点（過渡期）とすることが出来るが、『月灯三昧経』に於て「Saddharmāntardhāna」と「Saddharmavipralope」が並記されていることを考えると、「正法の消滅(disappearance (E))」の意味を強めて、「絶滅(extinction (E))」とか「滅亡(downfall (E))」の意に転じて解することも可能であり、また我々の理解している「末法観」を基にして、「悪世末法」・「末法濁世」の意に受けとめることも許されよう。然しどのように解釈しても『月灯三昧経』からは、正像末の三時説は生まれてこないし、経典自体の内容からしても、教法の衰退を具体的に求めることは無理があろう。

次に原始仏典の阿含部を見るに、『雑阿含・相応部 Samyutta-nikāya』の中で、「正法 Saddhamma (p)」・「正法の消滅 Saddhammāntaradhāna」の語が説示されているが、雑阿含に於ける「消滅」の意味も、先の『月灯三昧経』の説示と同意に解してよいのではないか。即ち、時代が経過して仏法が衰退、正法から像法へ、さらに末法に至るという危機意識（悲感的な現世否定）は表明されていない。

またパーリ聖典の中でも成立時の遅い『増一阿含・増支部 Aṅguttara-nikāya』を見ると、「仏滅 Parinibbana」・「正法 Saddhamma」・「像法 Saddammapatirūpaka」・「正法の消滅 Saddhammāntaradhāna」などの語彙が説示されて、恰も仏滅後に於て正像末の三時を経過する如くに見受けられるが、しかし「増支部」では末法思想を説示したものではない。その事は「正法の消滅」の語が明らかにサンスクリットの「末法 Saddharmavipralopa」と同義であるのに、正法・像法を経て末法に至るという意味が明確ではない。増支部の「Saddhammāntaradhāna」の語には、仏法が衰退して末法濁世に突入するという危機感とは関係なく、文字通り「正法」の「消滅」の意で用いられているのである。

次に『法華経』の安楽行品を参借してみよう。

Mañjuśribodhisattva mahāsattvas tathāgatasya parinirvṛtasya paścime kāle paścime ṣamaye paścimāyāṃ pañcaśatyaṃ saddharmmavipralope vartamane imaṃ dharmaparyāṃ samprakāśayitukamaḥ sukhasthito bhavati sa sukha-sthitaś ca dharmaṃ bhāṣate kaya-gataṃ va pustaka-gataṃ va.[注(23)]

文殊師利・如来滅後・於末法中・欲説是経・応住安楽行・若口宣説・若読経時・不楽説人・及経典過[注(24)]

右の「安楽行品」の一節は、我々日蓮宗徒にとっては馴染みのものである。右の説示を文字通りに解せば、「如

（如来が入滅した後に、正法の衰滅する最後の五百年の間）来滅後・於末法中」としているから、正法・像法を経過して末法濁世に至ると見るのではなく、仏滅後の「正法の消滅していく永い期間」を「末法」と説示しているのである。

余事ながら、先の鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』の安楽行品の説示は、

法師品「而此経者・如来現在・猶多怨嫉・況滅度後」[18]

薬王菩薩品「我滅度後・後五百歳中・広宣流布・於閻浮提・無令断絶」[19]

等の説示と共に、滅後の末法弘教を勧奨した典拠として、日蓮宗学上では格別の意義を有する所である。然し本拙稿で当面問題としている古代インドの歴史意識の視点から見れば、安楽行品に説示される「末法」の意味は、末法澆季の歴史的危機を踏まえたものではなく、仏滅後にやがてやって来るであろう「仏教衰滅」の時期に至っても、仏説が衰滅することのないよう弘教を期待した願望の表現である。

五　むすび—歴史意識の欠如—

古代インド人は、自国の民族の興亡・国家（王朝）の興廃・人間（政治・経済・社会・文化活動）の活動・過去の事件など、それを歴史の記録として残す作業を怠った。過去の出来事は全て擬人化された神々の功業として讃詠された。その表現は修飾・誇張・想像に富むものであった。

古代インド人の関心の対象となったのは、超人間的な現象や偶発的な驚異の現象（事件）、自然界の猛威の現象であった。彼等は超人的な霊力を想定し、発現の根源を神格化していった。神格化された自然神として、例えば天神 Dyaus・

太陽神 Sūrya・雷神 Indra・風神 Vāya・雨神 Parjanya・水神Āpas などが知られている。而もこれらを擬人化することで、想像の世界で神々と睦み合うことに歓喜しているのである。※

※「ヴェーダ讃歌」に於ては、雷神 Indra を英雄軍神として擬人化することで、アーリア民族戦士の理想の英雄を「インドラ天」とオーバーラップさせてある。従ってアーリア民族が先史インダス文明を破壊し先住ドラヴィダ民族を駆逐していった史実は、全く神話の世界へと転換され「インドラ天が大敵ダスユ Dasyu（卑猥なる賤しき者）を滅ぼす」という、インドラ天の讃詠に変えられているのである。

総じてヴェーダ等のサンスクリット諸文献で語られている過去の出来事は、神話的であり、論究（思索）される事柄は神秘的・超越的であり、語られる世界は永遠性・悠遠性という無限定な時間を想定している。

古代インドに関する厖大な文献の中に、信憑性のある史書を欠いていることは、古代インド人の歴史意識の欠落を如実に示すものである。その欠落の要因として、(1)哲学と文芸に秀れたインド人は、思索と空想（想像）の産物と史実とを明確に分ける意識を欠くことになったこと。(2)理想の追求に力を注いだために、現実を軽視する事になったこと。(3)長期の統一国家、全領土を統一した王朝に恵まれなかった事は、国家や民族の意識を稀薄にしたこと。(4)インド数学を創始しながらも、数学的思惟から離れたことは、具体的に数量的表現を怠ることになった。(5)数量的時間意識の未分化は、歴史事実に関する記録を怠ることになった。(6)人生目標を「解脱」することに置いたことは、人生を諦観的にみつめる事となった。(7)人生目標を「法」と「性愛」に置いたことは、人倫組織を超越する傾向を強くしたこと。(8)インドの特殊な風土は、人々の民族国家の意識を稀薄にしたこと。[注29] 等を指摘することが出来よう。

古代インドの歴史意識の欠如について、W・ヴィンデルバンドの創語を借りて云えば、「古代インド人は特殊的・

一回的事件を求めることなく、而も単称的 der Sigulare・確然的命題 der assertorische Satz つまり個性記述的学問 idiographisch Gelehrsamkeit（歴史科学）を発達させることがなかった[注(2)]」のである。

注

(1) D.D.Kosambi; The Culture and Civilization of ancient India in historical Outline・山崎利男訳『インド古代史』三―四頁。二〇―二一頁。昭和四一年・岩波書店。

(2) 中村元博士によれば、インド人の歴史意識の欠如について「……インドの史書は、史書というより芸術作品である。それは通例韻文をもって著されている。……インド人は芸術的視点から過去を美化し、理想化するのである。従って数学とか前後の順序とか地域・場所とかの正確なる記載という無味乾燥なことはこれを遠ざけるのである……」（『東洋人の思惟方法』第一部インド・シナ人の思惟方法―二四四頁・昭和二三年・みすず書房）。

(3) インド社会におけるカースト（身分制）の問題は、古代インドという限られた歴史の問題ではなく、当に現代インドにおける生々しい政治的・社会的・人権的の問題である。その事例を朝日新聞ニューデリー支局長・長岡昇氏の通信寄稿を転載して参考としたい。

。「インドの深い苦悩―カースト抗争、再燃か」→「インド独特の身分差別制度カーストをめぐる抗争が再燃する気配を見せている。火元はネパールに接する人口がインド最大の州・ウッタルプラデシュ州だ。インドの縮図といわれるこの州で二年前、イスラム教モスク破壊事件をきっかけに宗教暴動が起き、ヒンズー、イスラム両教徒の抗争が全国に広がった。その揺りもどしで昨年十一月、州議会選挙では暴動の引き金を引いたヒンズー至上主義の宗教政党が敗れ、「カースト政党」の社会党・大衆社会党連合が大躍進した。社会党の支持基盤は後進農民カースト、大衆社会党は最低辺の被差別カーストが票田。両党とも宗教融和を訴えイスラム教徒の支持を得て州政権を握った。新政権は……宗教政党の息のかかった官僚を閑職に追いやり、政権幹部の属するカースト出身者を昇進させる露骨な人事を始めた。そのうえ、地方公務員の採用や大学入学枠の五〇%を後進・被差別カースト出身者に割り当てる政策を打ち出した。上・中位カーストは猛反発している。とくに被差別カーストの少ないヒマラヤ山麓ウッタラカンド地方の反対は激しく州の分離運動に発展した。十月上旬には州の分離を要求するデモ隊が首都に向かおうとして治安部隊と衝突し十数人が死亡した。州政権は「わが州はイスラム教徒を加えれば後進・被差別人口比は七〇

%を超える。まだ控えめなくらいだ」という。南部諸州でもカーストが政治の前面に出つつある。宗教暴動・地震・ペスト・そしてカースト抗争、インドの苦悩は深い。（平成六年十月二十一日・朝日新聞・ミニ時評欄）

(4) 玄奘撰『大唐西域記』大正蔵五一巻四八七五頁。

(5) Mānava-dharma-śāstra・田辺繁子訳『マヌの法典』第三章二三二条　岩波文庫一〇四頁。

(6) Shamasastry; Arthaśāstra of kautilya：中野義照訳『カウティルヤ実利論』第一巻第三章九頁・昭和二〇年・生活社。

(7) 注(6)同書・第一巻第五章十一頁。

(8) 坂本・岩本共訳注『法華経』下巻十二頁・岩波文庫。

(9) 注(8)同書・下巻二八頁。

(10) 辻直四郎訳『リグ・ヴェーダ讃歌』岩波文庫一五〇―一五一頁・昭和四五年刊。

(11) 注(10)同書・一五四頁。毎日新聞社編『東洋の名著』所収「ヴェーダ讃歌」一七〇頁併参照。

(12) 岩波講座・世界歴史第三巻古代3・所収・小西正捷「インダス文明とアーリ世界の背景」。世界美術全集（全二九巻古代初期・所収「インダス文明の美術」平凡社・昭和二六年刊。

(13) 岩波講座・世界歴史第三巻所収・岩本裕「アーリア世界とガンジス古代諸国」参。

(14) 後期ヴェーダ時代にアーリア民族がガンジス流域へ進出したとするものに、叙事詩「マハーバーラタ」の中で展開されているクル族の「クル・クシエトラ kuru ksetra（現デリー近郊）」における大斗争を語る詩偈の内容がガンジス河進出を語っているとする。その事は「カター・サリット・サーガラ katha-sarit-sāgara」（岩波文庫（全四巻）四巻一五三―一五四頁）中でも語られていること。またマハーバラタの英雄「パリクシット王 Pariksit」とその子孫ジャナメージャ王の名が「ブラフマナ文献」に見える事が、アーリア民族進出の事実を語っているとする。岩波講座・世界歴史第三巻古代3所収・岩本裕「アーリア世界とガンジス古代諸国」参照。

(15) N.Dutt; Gilgit Manuscripts vol.Ⅱ, partⅢ. p.490～491.
月灯三昧経の説く末法観の詳しい研究は、密波羅鳳洲「三昧経における時機観」（日本仏教学界年報四九号）を参照されたい。

(16) P.L.Vaidya; Saddharmapuṇḍarika-sūtra. Buddhist sanskrit Text. No.6 P.169.
U.Wogihara and C.Tsuchida; Saddharmapuṇḍarika-sūtram. Romanized and revised Text. P.141.

(17) 坂本幸男・岩本裕訳注『法華経』中巻二五六頁・岩波文庫。
(18) 注(17)同書・中巻一五二頁。大正蔵九巻(一)三六頁。
(19) 坂本・岩本訳注『法華経』下巻二〇六頁。大正蔵九巻(一)五四頁。
(20) 中村元『比較思想史』岩波全書二〇一―二〇二頁。
(21) W.Windelband; Geschicht und Naturwissenschaft.1894。篠田英雄訳「歴史と自然科学」岩波文庫八・二二・三〇頁昭和四年十二月刊。

(平成六年十一月二十八日)

明治四年・岡山県における農民騒擾に関する裁判資料（五・完）

中山光勝

目次

解題

（Ⅰ）岡山県伺備前国磐梨郡田原下村農阿部清太郎発意ニテ同村農近藤嘉十郎外六名明治四年水災ニテ年貢上納シ難キ歎願及フ可クト他村ヲ誘引シ為メニ各郡村々動揺為シタルニ付処刑方ノ件

（一）明治五年十月二十四日付・司法省指令

（二）明治五年六月日欠・岡山県処刑伺……

……以上第一回第六十二号

（三）阿部清太郎外七名口供書

（Ⅱ）岡山県伺備前国磐梨郡松木村農黒田小太郎外七名前件（Ⅰの事件――中山註）ニ関シ願書ヲ執筆シ或ハ暴動ニ附従為シタルニ付処分方ノ件

（一）明治五年十月二十四日付・司法省指令

（二）明治五年六月日欠・岡山県処刑伺

（三）黒田小太郎外七名口供書……以上第二回第六十三号

（Ⅲ）岡山県伺備前国赤坂郡南佐古田村農清野弥代次外九名田畑改正ニテ難渋ニ付歎願ス可ク多人数寄合遂ニ大里正山口村小坂石平外二名宅ヘ押懸家財打砕又ハ焼捨乱暴及ヒシニ付処刑方ノ件

（一）明治五年十月二十四日付・司法省指令
（二）明治五年六月日欠・岡山県処刑伺
（三）清野弥代次外九名口供書……以上
上第三回第六十四号

（Ⅳ）岡山県伺備前国津高郡河内村之内山条農吉村新三外七名貢米十分一納願出可ク多人数寄合遂ニ同郡辛香村里正中山辰四郎外二名宅ヘ押懸ケ家財打砕又ハ放火及ヒシニ付処刑方且新三ハ同囚破牢ノ企アルヲ密告セシニ依リ死一等ヲ減ス可キヤノ件
（一）明治五年十月二十四日付・司法省指令
（二）明治五年六月日欠オヨビ同年九月二十四日・岡山県処刑伺
（三）吉村新三外七名口供書……以上
第四回第六十五号

（Ⅴ）岡山県伺備前国上道郡百枝月村農塩見虎三郎外四名近郷村々動揺ヲ聞同断出願ス可ク寄合出張役人ヘ歎願書差出シ他村ノ暴動ニ関セサルニ依リ無罪タル可キヤノ件
（一）明治五年十月二十四日付・司法省指令
（二）明治五年六月日欠・岡山県処刑伺
（三）塩見虎三郎外四名口供書……以上
第五回本号掲載

（Ⅴ）岡山県伺備前国上道郡百枝月村農塩見虎三郎外四名近郷村々動揺ヲ聞同断出願ス可ク寄合出張役人ヘ歎願書差出シ他村ノ暴動ニ関セサルニ依リ無罪タル可キヤノ件

（一）（明治五年十月二十四日付・司法省指令）

隣国動揺ノ際一村二十余人同行歎願スト雖モ虎三郎外二人ハ其願ノ発意迄ニシテ多衆ヲ糾合スルノ情無ク官吏ノ説諭ヲ遵奉シ衆人ヲ帰村セシメ挙村暴動ニ響応スル者無シ唯魁首トナリ里正ヲ経スシテ出願スルヲ以テ
雑犯律不応為重ニ擬シ杖七十情憫諒スヘキヲ以テ
贖罪金五両一分　　塩見虎三郎
同上ノ従一等ヲ減シ杖六十

三宅　喜佐治

贖罪金四両二分宛

塩見　美喜三

新条例兇徒聚衆ノ従ニシテ墻屋ヲ毀ツ者不応為重杖七十

懲役七十日

久保　石松

小隊長馬ヲ馳セ鎮撫号令スルヲ見テ酔狂ニ乗シ戯慢無状之ヲ妨クル者

雑犯律不応為重ニ擬シ杖七十

懲役七十日

三木　桂次郎

縣	青木	松本	松岡	江藤	不明

（二）（明治五年六月日欠・岡山県処刑伺）

備前国上道郡百枝月村百姓塩見虎三郎外四人御仕置伺書

岡山県

扣

備前国上道郡百枝月村百姓塩見虎三郎外四人吟味仕候処左之通

備前国上道郡百枝月村百姓

塩見　虎三郎

申三十六歳

右塩見虎三郎義去辛未年五月洪水ニ而村方之内岡分ハ格別難渋ニ付村内百姓三宅喜佐治塩見美喜三其外へも申談上道郡沖新田三番住居郷佐役藤原敏造へ出願致し度尤惣代与して右三人可参考候処右岡分之者二十七八人参度申出一同南之方下筋江向ケ沖新田へ参候処其節近郷村々人気不穏処よ里岡分之者出訴致し候由申一時ニ騒立多人数北之方上郷へ運転村吏之宅乱暴致し候ニ立当リ候全虎三郎発意ニ而出願致し候処よ里村々動揺乱暴ニ及候段不届ニ候得共虎三郎おゐてハ沖新田九番ニ而同人并喜佐治美喜三惣代与して居残リ其外之者共為引取置同所出張之役人へ歎願書差出し直ニ引取帰村致し候岡分おゐてハ□□□村々動揺ニ関リ不居申且歎願之趣も筋立候義ニ付其情諒察し無罪ニ可有御座哉

但動揺之村々重立候者共未タ相分不申候

（以上十八字朱書――中山註）

備前国上道郡百枝月村百姓

三宅　喜佐治

申四十四歳
塩見　美喜三
申二十七歳

右三宅喜佐治塩見美喜三義村内百姓塩見虎三郎ヨリ村方難渋ニ付出願之示談ニ同意致し村方之内岡分之者二十七八人同道ニ而去辛未年十二月三日暁上道郡沖新田三番住居郷佐役藤原敏造江罷越候節近郷村々一時ニ動揺致し上郷へ押行村吏之居宅乱暴致し候ニ立至り候全虎三郎談示ニ同意致し岡分之者出願致候処ヨ里村々動揺乱暴ニ及候段不埒ニ候得共沖新田九番江罷越虎三郎始両人共惣代与して居残其外之者共為引取置同所出張之役人江歎願書差出直ニ引取帰村致し候岡分おゐてハ村々動揺ニ関り不居申且歎願之趣も筋立候義ニ付虎三郎同様無罪ニ可有御座哉

備前国上道郡西祖村百姓
久保　石　松
申四十七歳

右久保石松義去辛未年十二月三日朝近郷村々動揺致し候人数ニ加リ上道郡内ケ原村江罷越同村里正畠中太郎方へ押懸多人数乱暴致し候節倶々罷越塀之瓦并干大根等切落し及乱暴夫ヨリ一同ニ随ひ同郡竹原村楢原村江押行同日昼九ッ時頃帰宅以堂し候右様乱暴およひ候始末不埒ニ付如何処置可仕哉

但右畠中太郎宅乱暴重立候者未タ相分レ（ママ）不申候（以上二十一字朱書――中山註）

備前国上道郡西祖村百姓
三木　桂次郎
申五十六歳

右三木桂次郎義去辛未年十二月三日朝近郷村々動揺之節立出上道郡内ケ原村辺ヨ里多人数ニ相加リ同郡竹原村へ押行同所ニ而飲食致し夫ヨリ同郡楢原村之内土橋之上ニ而為鎮撫出張致し居候小隊長桜井鑑吉乗馬江登付候ニ付馬上ヨ里突倒し候処又候起上リ同様登付同人着服ヲ損し候右粗暴之始末不埒ニ付如何処置可仕哉

右之通ニ御座候御仕置之義別帳口書四冊并手続書一冊共相添此段相伺申候已上

明治五年壬申六月　岡山県　岡山県印

（三）（塩見虎三郎外四名口供書）

扣

備前国上道郡百枝月村百姓塩見虎三郎口書

岡山県

備前国上道郡百枝村百姓

塩見　虎三郎申口

申三十六歳

先般村方之者共出願仕候始末有体申上候様御吟味ニ御座候

私儀農業専らニ而高八石所持罷在候然ル処百枝月村ハ字上分中分岡分与三組ニ相成居申私義ハ岡分尓て候昨辛未年五月洪水ニ而大川堤破壊田畑場所ニ寄七尺余も砂石流込又ハ家財諸道具共流失仕甚難渋仕候者も不少御座候処同七月下旬ヨリ堤田畑共御譜請御取懸リ男女老幼共日々右夫役相勤候付右失米前借致し扶持米ニ仕度段其節村役人江速ニ願出置候得共御渡し無之其後九月十二日限御普請相済候付午後度々御催促申上候処右申奉置候得共兎角御渡無之旨村役人ヨリ被申聞相運ひ不申且荒所御取調之上田方ハ皆荒ニ被仰付候得と母畑方ハ半免上納ニ被仰付加之年中諸入用米□□□持主へ割懸仕余之分一同之通無毛地も高掛リニ相成甚難渋差迫リ村役人江度々歎願い堂し候得共不相叶処よ里私義兼而御熟ニも有之候郷佐役藤原敏造殿上道郡沖新田三番江御住居候付右難渋之義歎願仕度旨心付村内百姓三宅喜佐治塩見美喜三江申談候処同意致候ニ付同年十二月三日夕村内岡分之者而已二十七八人右喜佐治宅江寄合候処ヨリ右藤原敏造殿江出願之義一同江申談候処何れも同意ニ付俱々歎願之趣相認メ尤一同之者参候而ハ不宜ニ付右美喜三喜佐治私共三人惣代与して参候旨申聞候処右三人之難渋ニも無之一同之義ニ付是非共同道参候様一同ヨリ申出候付翌四日暁右二十七八人之者共立出途中ニ而右藤原敏造殿ハ沖新田九番へ御出張之由承リ同所へ向参候処御同人御出張無之同郡大里正沖新田外七番角南作五□殿御出張有之ニ付右歎願之趣申上候処無程御官員様御出張候付喜佐治美喜三私共三人居残リ其外之者共ハ引取候様被申聞候付一同引取らせ置私始三人罷在候処監寮掛権大属大嶋守人様租税掛窪田升三様御廻村ニ而御出ニ付右歎願之趣申上候処一応御聞届追而御処置も可有之旨被仰聞候付直ニ同日七時頃帰村仕候処同晩ヨリ近郷同郡寺山村内ケ原村外村々之者共動揺仕内ケ原村里正畠中太郎宅乱暴仕夫ヨリ同郡

備前国上道郡百枝月村百姓
三宅　喜佐治
申四十四歳
塩見　美喜三
申二十七歳
右申口

先般村方之者共出願仕候始末有体申上候様御吟味ニ御座候

私共義農業専らニ而喜佐治義高拾石三斗美喜三義高拾四石所持罷在候然ル処私共義村方字岡分与申所ニ而昨辛未年五月洪水ニ而大川堤破壊田畑場所ニ寄七尺余も砂石流込又ハ家財諸道具流失仕甚難渋仕候者も不少御座候処同七月下旬ヨリ堤田畑并御普請御取懸リニ付男女老若共日々右夫役相勤候付右夫米前借致し扶食ニ仕度段村役人江速ニ願出置候得共御渡無之且荒所御見分之上田方ハ皆荒ニ被仰付候得共畑方ハ半免上納ニ被仰付加之年中諸入用米□□□持高江割掛仕候分無毛地も一同之通高掛ニ相成甚難渋差迫村役人江度々歎願致候得共不相叶処ヨリ村内御百姓塩見虎三郎義兼而御懇意ニも有之候郷佐役藤原敏造殿上道郡沖新田三番江御住居ニ付右難渋之義歎願仕度旨私共江申談候付同意仕同

楢原村へ押懸ケ居申旨承リ実ニ相驚申候私方村方岡分之者共ハ其侭帰村仕右動揺ニ者不加義ニ御座候前条九番ニ而一同空腹相成村役人へ願上一飯ヲ請ひ其後飯料払入申候御普請夫米も一同之通去暮御渡し相成頂戴仕候義ニ御座候

右之通申上候付被仰聞候ハ実以難渋情願之筋有之候得ハ壱人立穏ニ其筋々江可申出一同之者押而参候旨申立候得ハ其節処置振も可有之処無其義村内一同之者共出願致候処ヨリ其風波及他村之者共同意与ハ不相聞候得共村々動揺村吏之居宅及乱暴候ニ立至リ其節他村江も談示候義可有之与再応御吟味ヲ被候得共前条之外差蔵候義更ニ無御座頑愚之処よ里前後不弁不図御見分奉備候段申上候処右様村内之者同道出願致候始末不埒之旨御吟味ヲ受申披キ無御座奉恐入候

右之通相違不申上候已上

明治五年壬申五月十四日　　塩見虎三郎

断獄御役所

扣

備前国上道郡百枝月村百姓三宅喜佐治塩見美喜三口書

岡山県

年十二月三日夕村内岡分之者而已二十七八人喜佐治宅江寄合虎三郎ヨリ右藤原敏造殿江出願之義一同江申談候処何連も同意仕候ニ付倶々難渋之趣相認虎三郎私共三人惣代与して参リ候様申聞候処右三人者難渋ニも無之一同之義ニ付是非共同道参候様一同ヨリ申出候付翌四日暁右二十七八人之者共立出途中ニ而右藤原敏造殿ハ沖新田九番江御出張之由承リ同所江向ケ参リ候処御同人御出張無之同郡大里正沖新田外七番角南作五□殿御出張有之ニ付右歎願之趣申上候処無程御官員様御出張ニ付虎三郎私共居残リ其外之者共ハ引取候様被申聞候付一同引取らセ置右三人罷在候処監察掛権大属大島守人様租税掛窪田升三様御廻村ニ而御出候付右歎願之趣申上候処一応御聞届追而御処置も可有之旨被仰聞候付直ニ同日七ツ時頃帰村仕候処同暁よ里近郷同郡寺山村内ケ原村分村々之者共動揺仕内ケ原村里正畠中太郎宅乱暴仕夫よ里同郡楢原村江押懸ケ居申旨承リ実ニ相驚申候私村方岡分之者共ハ其侭帰村仕右動揺ニハ不相加義ニ御座候前件九番ニ而一同空腹相成村役人江願上一飯ヲ請ひ其後飯料払入申候御普請夫米者去暮御渡し相成頂戴仕候義ニ御座候

右之通申上候付被仰聞候ハ実以難渋情願之筋有之候得者壱人立穏ニ其筋々江可申出一同之者押而参候旨申立候得ハ其節処置振も可有之処無其義村内一同之者とも出願致し候処ヨリ其風波及い堂し他村之者共同意与ハ不相聞候得共村々動揺村吏之居宅及乱暴候ニ立至リ其外見聞以堂し居申義有之候ハヽ可申出旨再応御吟味ヲ被候得共前条之外差蔵候義更ニ無御座段申上候処右様村内之者同道出願致し候始末不埒之旨御吟味ヲ受申披無御座奉恐入候

右之通相違不申上候已上

明治五年壬申五月十四日　　三宅　喜佐治

断獄御役所　　塩見　美喜三

扣

備前国上道郡西祖村百姓久保石松口書

岡　山　県

備前国上道郡西祖村百姓

久保　石松申口

申四十七歳

先般村々一同動揺仕候始末有体申上候様御吟味ニ御座候

私義農業専らニ而高四石三斗所持仕居申候然ル処去辛未年十二月四日暁近郷村々動揺仕村方之者共一同立出候付私義も無拠罷出候処上道郡内ケ原村郷中法性寺屹と申処江多人数寄集罷在夫ヨリ山之南内ケ原村江一同下リ候付倶々罷越候処同村酒造家ヨリ酒持出し私義少々酌飲仕候処大酔仕候夫ヨリ多人数之者同村里正畠中太郎方江押懸ケ候付私義も附随ひ跡よ里罷越候処最早門内ハ多人数ニ而逼入候事不相成乱暴相働居候付私義酔中ニ乗し裏手へ廻リ塀之瓦二十四五枚取投捨又者長屋之軒ニ釣有之十大根五懸ケ程鎌ニ而切落し申候多人数之者共家財諸道具共持出し門前ニ而焼捨罷在候得共私義ハ携リ不申候夫よ里一同ニ随ひ同郡竹原村通リよ里楢原村江出同村ニ而踏留居申処同五日朝租税懸リ児嶋復三郎様角藤新八郎様窪田升三様御出張ニ而早々引取願筋有之候ハヽ惣代ヲ以穏ニ申出候様御申聞被成一同引取候付私義も同日九ツ時頃引取帰宅仕候義ニ御座候右之通申上候付被仰聞ハ実以難渋歎願之筋有之候得ハ穏ニ其筋々江可申出之処無其義多人数ニ与し村吏之宅江押懸倶々手ヲ着暴動致し候上ハ其節先立候者見覚へ或ハ姓名等伝聞候義可有之与再応御吟味ヲ被リ候得共前条之外差蔵候義更ニ無御座段申上候処右様多人数ニ与し村吏之居宅へ押懸倶々手ヲ着暴動致し候始末不埒至極之旨御吟味ヲ受申披無御座奉恐入候

右之通相違不申上候已上

明治五年壬申五月十四日　　久保　石松

断獄御役所

扣

備前国上道郡百枝月村百姓三木桂次郎口書

岡　山　県

備前国上道郡百枝月村百姓

三木　桂次郎申口

申五十六歳

先般村々一同動揺仕候始末有体申上候様御吟味ニ御座候

私義農業専らニ而高拾七石所持仕居申候然ル処去辛未年十二月四日暁村方之内岡分之者共出訴仕候趣承リ村方之者共立出候付私義も同朝五半時頃上道郡西大寺村迄参候処右岡分之者共罷帰居申ニ付私義も同道帰村仕居候処尚又同郡内ケ原村郷中法性寺屹与申山江近郷村々

之者寄集罷在候旨承リ罷越候処一同之者共同郡内ケ原村与里同郡竹原村江向押行候付跡よ里附随罷越同村之内酒造家よ里酒持出し候付多人数倶々酒飲候処私義大酔仕前後忘却一同之者ニ随ひ同郡楢原村へ出候処同村土□之上ニ而小隊長桜井鑑吉様一同之者江早々引取候様御制馭被為成候節私義酔中ニ而御同人様御馬江登付候処突倒され又起上リ同様登付候処御着服少々損し候由夫ヨリ同村酒造家ニ而又候酒飲候処益熟酔仕帰路難覚翌暁帰宅仕其後前条之趣承知仕奉恐入候義ニ御座候

右之通申上候付被仰聞候ハ村々ヨリ多人数押行候付相加リ候義ニ候ハヽ心得方も可有之筈無其義衆人ニ先立御出張役人江対し粗暴之挙動有之上ハ尚暴動致し候義可有之与再応御吟味ヲ受候得共前条之外差蔵候義更ニ無御座段申上候処右様役人江対し粗暴之挙動致し候始末不埒至極之旨御吟味ヲ受申披無御座奉恐入候

右之通相違不申上候已上

明治五年壬申六月四日　　三木桂次郎

断獄御役所

高座石祖師堂と祖師講中

奥野本洋

はじめに

高座石妙石庵の開基は学禅院日逢上人である。上人は七〇四（宝永元）年九月十五日に遷化されているが、存生発起人として高座石の祖師堂を新建立する計画をしている。宝永三年十月十三日の日付がある棟札が妙石坊に現存するが、身延山三十三世遠沾院日亨法主が書かれたもので、その為書きには江戸一結講中が祖師堂新建立の施主であると記されている。また、その棟札には、「宮殿者往古大堂有之改造之時移此堂」と書かれている。宮殿は元祖師堂（久遠寺）にあったものである。時代を溯ること四百五十年前、天文十四乙巳（一五四五）年、山内西之坊日祐、大蓮坊日守が施主となり大工池上縫殿允正重らの外護により建立されたものであり、遠沾院日亨上人の時、新宮殿が造立されたために古宮殿が高座石に移されることとなった。新宮殿は、宝永五戊子年九月京都に於て大仏師山田式部によって作られたものである。諸堂建立記の久遠寺本には金子五百両余成二就之一とあることから、新しく出来上った宮殿は当時の金で五百両という大金をかけ作られたものであった。ちなみに、古宮殿は高座石へと金十両也で下げられている。宝永五年（一七〇八）から二八六年経った本年（一九九四）、その古宮殿の修復を発願し、本山棲神閣祖師堂の修復を手がけた小西美術工芸に依頼。九月彼岸会に完成。その折、祖師堂内を整頓中一枚の板札を発見、横四十

九センチ、縦九十六センチ、厚さ一、五センチのその板には、首題が金文字で書かれており、その下に祖師講中、現当二世とあり、大願成就所、宝永五戊子天五月吉祥日、江戸浅草東中町、願主若松屋茂兵衛、萬屋徳兵衛の名があった。[1] 宝永五年五月といえば祖師堂の宮殿が造営された年であり、その古宮殿の修復を発願した時に、祖師講中の寄進者名が数多く書かれた板札が発見されるというのも何か深い因縁が感じられた。

(一) 身延山の信徒

妙石坊は妙石庵として学禅院日逢により開基されている。学禅院は延宝三年（一六七五）に七面山参道に影向坊を開基しているが、この時は日通上人が三十世の法主であり、その下で執事として活躍されていた。又、同年七面山においては、七面大明神の本宮をはじめ、幣殿、拝殿、廊下、御供屋、庫裏、池大神宮、随身門、鐘堂、客寮、籠屋の一式が通師の名のもとに建立されている。この仕事に関しても執事であった学禅院日逢の力が強く働いていたとみられるのである。さらに七面山の登り口にある神力房の三間四間の堂を建立する時にも学禅院が七面山の古材を用立てていることが身延山諸堂建立記からわかるのである。[2]

延宝七年に日脱が身延山に晋山するが、日脱の晋山について賛成派の最右翼として働いた学禅院の力は、さらに強力になっていったであろう。しかし、いくら法主や執事の力が強くとも、それに答えて諸堂建立等に丹精する信徒がなくては諸堂の整備は出来ないと思われる。学禅院は七面山の諸堂を建立する時に、甲駿両国を巡って道俗を勧化し浄財を集められたのである。その時代の身延山へ参拝する信徒はいか様な人があったのか、今回祖師講中の板札が発見されたことを機会として、少しく考察を試みてみることにした。

三十三世遠沾院日亨上人は正徳二年（一七一二）に宿房の定二十ケ房他四ケ房計二十四ケ房を各門流の登山参詣の際の宿院として制定しているが、それをみることによって全国各地からの登山参詣があったことがわかる。身延山々内支院各坊を調査することによって、花立て、香爐、あるいは仏具等に書き残された施主、奉納主、願主等を調査し、どの地域からどのような信徒の参詣があったかの裏付けをとることが可能である。宿房の定によれば江戸感応寺門中が樋沢坊、江戸当門徒古末寺が大林房となっている。江戸の信徒については、両房を調査することによって何らかの手がかりが得られる可能性がある。

又身延山久遠寺、七面山敬慎院、奥之院思親閣等の調査をすることによって信徒の形体を知ることが出来るであろうが、それを実施するには時間が必要である。今回、身の回りである高座石妙石坊の調査のみによって江戸時代中期の江戸の信徒について考察してみた。境内妙法堂の鰐口には、施主江戸伊勢屋廣田八郎右衛門の名がみられた。元禄六（一六九三）年五月十五日と日付けがあり、宗恵日明代と刻まれている。又、身延山高座石と書かれているところから高座石の為につくられ奉納されたものである。しかし、宗恵日明たる歴代住職はいないため、妙石庵が開基される前、庵主ではなく、高座石の別当として本山から直接任命されていた人であろうか？その頃、七面山への参道として参拝者が立ち寄り通っていたことがわかるものとして題目塔が残されている。この題目塔は京都の有名な信者、谷口一族の妙信院法悦が施主であり、元禄十（一六九七）年正月丁丑十九日との日付けが刻まれており、題目の左側には左山道右七面の道しるべとしての案内が刻まれている。[3] 妙信院法悦については、その親と思われる法春日陽に対し、二十八世日奠法主が本尊を授与しているが、その本尊は現在北之坊に残っている。その年代をみるに寛文三（一六六三）年七月二日である。その頃、熱心に身延山へ参詣していたであろうことが想像できるのである。又、貞享元（一

六八四）年に発行された、身延山々内絵図には「貞享元甲子歳九月板行之田舎遠国参詣発心勧者也」とあり、その左最下部に「洛陽妙信院法悦」とあるところから、その絵図の発行施主は妙信院法悦であることがわかる。[4] 関西・京を代表する信徒の一人が谷口一族であることが理解できる。

(二) 浅草東仲町祖師講中

今回の調査で一つわかったことがある。妙石坊の唐銅の祖師の台座には、元禄十丁丑歳（一六九七）年七月廿八日とその鋳造された日付けが刻まれている。参詣之衆中硯（ママ）当二世大願成就祈者也、法界万霊とあり、その正面中心には天下泰平国土安全、その脇に江戸浅草東中町講中五拾人とあり、右端には神田鍋町御鋳物師太田駿河守藤原正儀作と作者の名がみられる。唐銅祖師の信者は江戸中の多くの信者方、講中の方が協力されているのだが、正面に書かれている五十名は江戸浅草東中町の講中である。[5] それからおくれること九年目の宝永三（一七〇六）年には妙石坊の祖師堂が建立された（遠沾院日亨の棟札）となっており、さらに翌々年の宝永五（一七〇八）年には祖師講中による御堂造成の記録が残っている。宝永三年に祖師堂が建立されたのか、あるいは五年に完成したのであろうか、又唐銅の祖師も鋳造されたのは元禄十年七月廿八日であるが、宝永五年の板札の裏には、元禄十一年八月上浣御当山江安置されたと記録されている。もともと奥之院に安置されたものを高座石に下げてきて祀りなおした云々という説があるが、板札の裏書きによれば高座石の唐銅の祖師は元禄十一年に高座石妙石庵に安置され日脱上人によって開眼されたが、御堂が仮家であったため遠沾院日亨上人の時に御堂を造営したとある。それから推すと、約十年間仮家であったと考えられる。いづれにしろ元禄十年に記録されている鋳造に対する施主名とそれから約十年後の宝永五年に祖師講中の

中に出てくる施主名に共通の人の名を拾うことが出来た。当然十年の間には時代の変化もあり、隆盛を極めていた人が衰退したり、逆にさほどでもなかった商人が大きく成功を納めたり、当代が亡くなり次の代の人に変わっていたり、あるいは信仰を変えてしまう人もあったであろう。

脱省亨三師は、高座石に力をいれ発顕していったことは確かなようである。一六九九年（元禄十二）五月十三日には、六老僧の塔が高座石に建てられているし、元禄十三（一七〇〇）年正月十三日には学禅院日逢が経石墳を高座石に建立、元禄十四（一七〇一）年九月十二日には高座石の前に唐銅の灯籠が建立されている。この灯籠は江戸神田鍛治町鋳物師奥田出羽大掾長廣が作ったものであり、本願主は武江浅草玉泉寺下勤修院自覚日了とある。又、灯籠の笠の部分並びに胴の部分には数多くの施主・題目功徳主らの名前や法号が記されているが、それらを細かく拾い出していくと、共通の名前が何組もみつかると思えるのだが、その作業をせず不完全なままこのような報告をするのは本意ではないが、わかった範囲内で問題を提示することも必要と考え今回の報告となった。

祖師講中板札には、首題をはさんで右側に十段、一段には十名分の枠があり、計百名。左側にも十段、一段に十名分の枠があり計百。又、真ん中首題の下に八人ずつ書かれている段が二段、三段目には七人の枠、そして四段目に十八人枠、五段目も十八人の枠が出来ている。総計二五九の枠にそれぞれ屋号、名前、講の名等が彫り込まれている。一つの枠に一人の名であるならば二五九人の信者となるわけだが、一つの枠に何人かがはいっている。性輪、躰玄と二人の名が記されている場合もある。それらを考慮にいれながら総人員を拾ってみると為祈祷とあるものの人数合計が二百四十名、為菩提とあるものの合計人数が二〇五名、祈祷とも菩提ともなく、ただ為とある人数合計が四一六名である。それらの数の総計八六一名、尚個人名が記されているものの数二三九を足すと千二百名にものぼる。祖師講

中が高座石の祖師堂を建立するのに浄財を出したのであろうが、それには講中の人々の協力があればこそ実現出来たのである。金額については記されていないため、一人がいくらずつの奉納をしたのか、いくら以上の奉納の人の名が彫られたのかについては知ることが出来ない。

祖師講中の中に彫られている人の中には、すでに唐銅の祖師鋳造の折、寄進者の中に名を連ねている人々が数多く残っている。田中忠兵衛、大黒屋加兵衛、豊屋六右衛門、萬屋源兵衛、三口屋半兵衛、中塚与左衛門、告茂右衛門、たばこや甚兵衛、村田屋重兵衛、硏屋太郎兵衛、坂本屋五郎兵衛、又、屋号と名前から推して同一人物と思われるものをひろってみると、甲州屋与兵衛と粉屋与兵衛。同じく越後屋金兵衛が後に若木屋金兵衛に、権兵衛は薪屋権兵衛か?、粥子伝兵衛とは和泉屋傳兵衛か伊勢屋傳兵衛、傳兵衛という名については近江屋伝兵衛という人物もいるので粥子の伝兵衛を決定することは少々むずかしい。高橋八左衛門は、家根屋八左衛門のことか?、吉佐衛門という名にあてはまる人物は鈴之木屋吉佐衛門、湊屋吉左衛門の二人がいる。いずれかであろうがここでどちらと判断することは出来ない。権右衛門とは桔梗屋権右衛門を指すのであろうか、講元柳屋六兵衛については祖師講中の板札の中に名前を捜すと、中村六兵衛という人物が六兵衛というので柳屋は中村なのかと想像できる。又、唐銅祖師台座の正面真ん中に書かれている「ほっとう人（発頭人）若松屋茂兵衛」の名については祖師講中の代表の一人として願主若松屋茂兵衛と記録されている。江戸浅草東中町講中五拾人とあるが、その元禄十年の五十人が宝永五年にどれだけ残っていたのか表にして対照させてみると左のようになる。

講双万屋源兵衛
（寿仙院宗久日恵）
講双柳屋六兵衛
（随信院順喜日行）
講双山田屋源兵衛
栄吉左衛門
（蓮乗院栄知日浄）
久保田庄兵衛
（圓妙院宗近日禅）
川口屋吉兵衛
藤本玄泰
田中忠兵衛
（法妙院道詠日讃）
高橋八左衛門
大黒屋嘉兵衛
宗仙越後屋金兵衛
山城屋角左衛門

萬屋源兵衛
中村六兵衛か？
（鈴之木屋吉佐衛門
湊屋吉左衛門）
藤本玄泰
田中忠兵衛
家根屋八左衛門
大黒屋加兵衛
若木屋金兵衛？

（道順日随）
参河屋作左衛門
豊屋六右衛門
中塚与左衛門光重
糸屋忠兵衛
告茂右衛門
大和屋権兵衛
甚左衛門
（岸心日通）
たばこや甚兵衛
粥子伝兵衛
八左衛門
（万樹院寛恵日鐃）
村田屋重兵衛
次兵衛
おかち

三河屋治左衛門？
豊屋六右衛門
中塚与左衛門
福嶋屋忠兵衛か？
告茂右衛門
薪屋権兵衛？
たばこや甚兵衛
（和泉屋傳兵衛
伊勢屋傳兵衛）
家根屋八左衛門？
村田屋重兵衛
和泉屋治兵衛？

ほっとう人若松屋茂兵衛
伊勢屋七左衛門
相模屋清次郎
柳屋作兵衛
（信解院實圓日相）
相模屋甚五兵衛
とき屋太郎兵衛
甲州屋与兵衛
道具屋兵八郎
三口屋半兵衛
権右衛門
こんぶや藤兵衛
左次兵衛
（善行院祐心日通）
おさん
泊中花長兵衛

願主若松屋茂兵衛
伊勢屋七左衛門
研屋太郎兵衛
粉屋与兵衛？
三口屋半兵衛
桔梗屋権右衛門？
笹屋藤兵衛？
菓子屋長兵衛？

吉左衛門
近江屋傳兵衛
山田嘉兵衛
坂本屋五郎兵衛
仁兵衛
権兵衛
茂兵衛
（了受院澄心日浄）
市右衛門
大黒屋嘉兵衛
（為父母）
紀伊国屋忠右衛門
（小長院長圓日井為母）
了圓坊
（浄志院日理）

（鈴之木屋吉左衛門
湊屋吉左衛門）
（伊勢屋傳兵衛
和泉屋傳兵衛）
和泉屋加兵衛？
坂本屋五郎兵衛
薪屋権兵衛？
大黒屋加兵衛
豊屋忠右衛門？

今回の調査研究を行なうにあたり、名前を解読する苦労があったが、木に彫っている為読みにくい分は唐銅の祖師台座に彫られている方を読み、唐銅台座の読みにくい文字に関しては木の方に彫ってある文字から想像するなどの努力をした結果ほとんどの文字を解読することが出来た。

現在でも三河屋、美濃屋という地方名の屋号は酒屋等に残っているが、江戸時代にもその人の出身地が屋号になっていたようである。祖師講中の中にも美濃屋、常陸屋、難波屋、伊勢屋、濱松屋、和泉屋、三河屋、上総屋、丹後屋等の名がみられる。又、その仕事や扱っている品物の上から屋号となったであろうと思われるものには胡粉屋、薪屋、研屋、粉屋、塗師屋、指物屋、花師、家根屋、布袋屋、萬屋、茗荷屋、扇屋、菓子屋、たばこや、八百屋、楊枝屋(?)、人形屋、石屋、湯屋、粉那屋、表具屋、綿帽子屋、阿めや、桐屋、砂利屋等が見られる。胡粉屋、粉屋、粉那屋と粉屋について三通りの呼び方があるのは扱っている粉についての違いがあったのではと想像できるのである。茗荷を扱ってたので茗荷屋なのだろう。指物師という言葉は最近では使わなくなったが、そのような仕事は現在でも存在している。薪屋は現在の燃料屋にあたろうか。研屋も最近では少なくなったが、昭和にはいってもあった職業である。湯屋については銭湯のことであろうが、これも近年少なくなっている職業である。桐屋という屋号は、桐材を用いて仕事をした職人であろう。萬屋については雑貨を取り扱った商人を指すのであろう。石屋は石材店で現在も存在するものである。塗師屋については輪島などに行けば現在も多く存在する仕事である。家根屋も現在存在する職業である。布袋屋、扇屋については屋号として一部残ってはいるようだが、その職業名としては存在しないと思える。楊枝屋、綿帽子屋、人形屋、銭屋、葛籠屋、逢蒔屋等はその時代の独特の職業ではなかったろうか。菓子屋、たばこ屋、八百屋

は今でも使われている屋号である。小普請方は江戸幕府の職名である。金之亟などという名は役者であろうか。湊氏、山本氏、今野氏とは武士であると思われる。告茂右衛門とあるが、告とは神仏の託宣、おつげであるのでそれを仕事としていた人であろう。又、講中の名前には、僧侶であろうと思われる人の名前も多くみられるのである。一妙院日信、勧喜院日圓、修心院日成、成修院日躰、法増院日順、讃寿院博良、是躰院日信、知眼院日達等である。元禄十四年鋳造の唐銅灯籠に彫られている江戸の僧侶の名としては最教寺日示、四谷戒行寺日乗、牛込清隆寺日遵、駒込法輪寺秀学等の名がみられる。祖師講中の板札中に書かれている僧侶の名は浅草寺院の僧侶に限られているのだろうが、当然その時代の僧侶であるため何らかの面識はあったであろう。同じように院日号がついていても随信妙喜日理、一如院妙香日中、暁誦院覚山日悟、信教院妙詠日照、信文院妙持日行、延智院元陰日重、修得院妙性日全、正要院妙行日達、信受院妙圓日教等については法号と判断した。又、正信院、正覚院のように逆修で載っている場合もみられるし、妙秋、永林、妙閑、妙高というように法号の一部のみ書かれているものもある。貞孩、童子というような子供の戒名もみられる。又、講中の一番下の欄の中心に正傳日久とあるが、時代から推察するに遠寿院日久（享保十二年五月十六日遷化）なのではと思われる。総じて祖師講中と称しているが、ここでは八日講中、九日講中、十一日女講中、十三日講中、十九日講中が中心であり、南馬道[8]町講中の名も見られる。唐銅台座には富沢町七日講中、富沢町十三日講中、油町十日講中、富沢町十二日講中、富沢町十七日講中、富沢町十四日講中、神田明神前茂兵衛講中、新屋八郎兵衛講中等の名が出ている。さらに江戸の講中ばかりでなく上総国の人の名も一部彫られている。

富沢町七日講

八日講中

九日講中

油町十日講中

十一日女講中

富沢町十二日講中

富沢町十三日講中

神田明神前茂兵衛講中

新屋八郎兵衛講中

馬道町講中

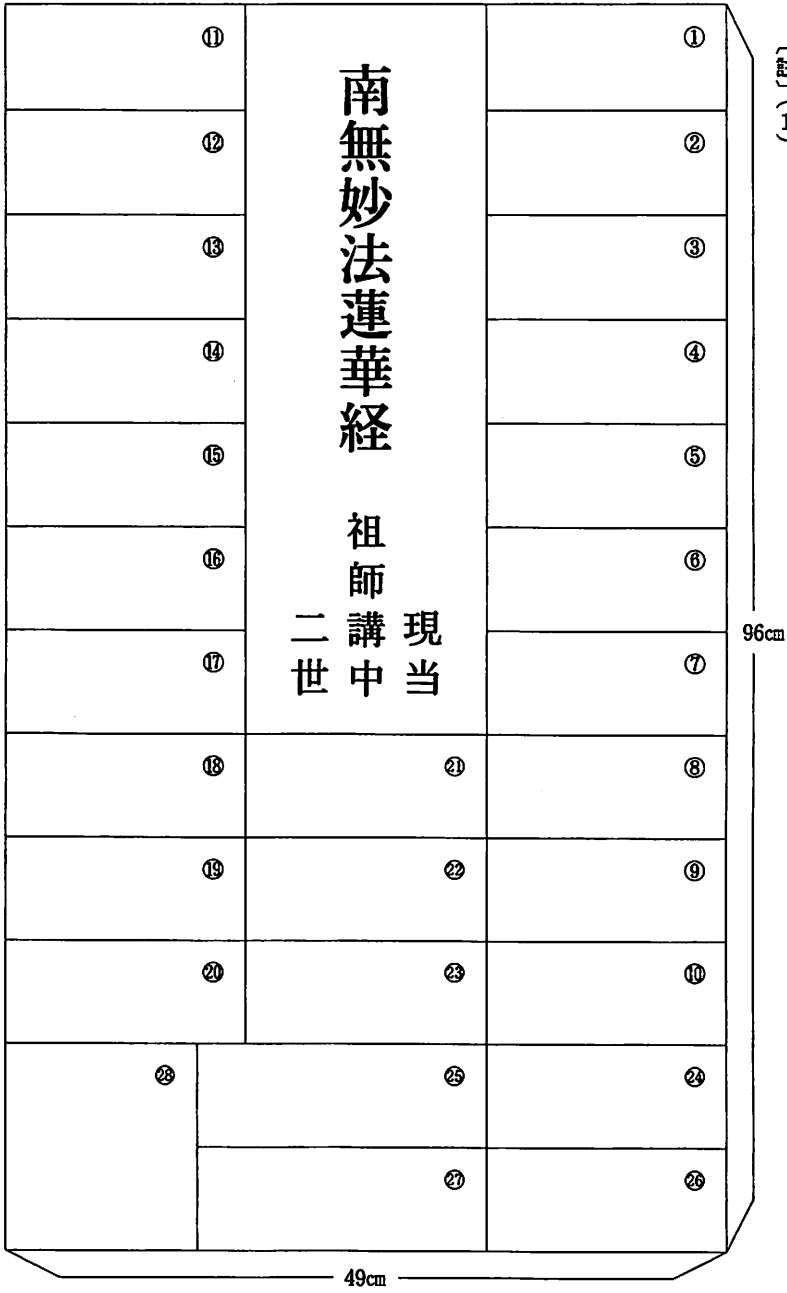
十三日講中

南馬道町講中

おわりに

甚だ雑駁な報告となってしまったが、資料としては唐銅の台座の左右に数多くの未解読のものを残している為、今後時間をかけ、当時の江戸町民の信仰に関する取り組みや動向について調べてみたいと思う。

〔註〕（1）


南無妙法蓮華経
現当
祖師講中
二世
①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
⑩
⑪
⑫
⑬
⑭
⑮
⑯
⑰
⑱
⑲
⑳
㉑
㉒
㉓
㉔
㉕
㉖
㉗
㉘
96cm
49cm

①為祈祷
和泉屋　岩女
祈祷　次兵衛
同　又次郎
同　千代女
同　まち女
同　ぬい女
同　逢薄屋
性輪　躰玄
了也　妙輪
妙普　成閑

②祈祷
同　六兵衛
湯屋　松屋
難波屋　次郎兵衛
石屋　弥右衛門
玉信　加兵衛
河内屋　法消
伊勢屋　吉兵衛
柏屋　久兵衛
為母　利兵衛
伊兵衛

③下山田　新五郎

同　妻
同　梅
同　久平次
同　豊三良
小普請方　長久
為　十七人
知眼院　日達
法性院　五兵衛
新城　金之亟

④正受院妙行日修
正理院　日善
正信院　逆修
正覚院　逆修
信受院妙圓日教
善資院殿日良
祈祷　小栗氏
栗田　善太夫
祈祷　かく
同　とよ

⑤湊氏　成福
信文院妙持日行

為　六十六人
光月　山本氏
祈祷　今野氏
為　四十二人
小倉　平左衛門
為二親　大阪屋
宗智　妙空
妙光　玄族

⑥延智院元陰日重
修得院妙性日全
暁月雅山逆修
妙長　日冨
消要院　浄依
夜月　宗閑
法理院妙境日用
信境院　寿貝
圓宗院殿
一妙院　日信

⑦恵命院　妙立
圓珠　元教
岩井町　元右衛門

玄定　妙心
湯屋　利兵衛
神田　妙順
川口屋　消左衛門
得受院　日相
堀江　拾三郎
御薫　又右衛門

⑧廉嶋　徳兵衛
正要院妙行日達
桐屋重兵衛内
同　梅
同　いぬ
依兵衛　伊兵衛
七兵衛　伊佐衛門
阿めや　伝兵衛
為　六拾四人
行圓　日縁

⑨妙順　是教
砂利屋　市左衛門
占月　妙信
覚翁　又玄

松巷　栄守
美濃屋　太兵衛
美濃屋　徳兵衛
祈祷　いと女
為同　拾四人
常照院　妙順

⑩明照院　善照院
為　百廿壱人
柏屋　佐兵衛
小塚原　玄忠
正養院　日達
柏屋　重兵衛
受玄　日覚
宗有　妙有
妙是　法信
為　七拾九人

⑪南馬道町講中
上総屋　久右衛門
三河屋　四郎兵衛
藤代屋　角左衛門
若松屋　勘右衛門

柏屋　五郎兵衛
濱松屋　長右衛門
小多満屋　清次郎
楊枝屋　平右衛門
長井屋　清右衛門

⑫海老屋　四郎兵衛
麓屋　六兵衛
薄屋　権右衛門
きつふや　弥兵衛
弥右衛門　善右衛門
柏屋　長右衛門
高橋　八右衛門
和泉屋　吉兵衛
人形屋　五郎兵衛
菊屋　市左衛門

⑬たばこや　権右衛門
伊勢屋　七兵衛
田原屋　権兵衛
大塚屋　八左衛門
八百屋　七郎兵衛
性輪　躰玄

了也　妙輪
妙普　妙智
蓮久　了達
妙通　妙休

⑭妙養　妙心
妙玄　拾三人
小川　重右衛門
若利　童子
随信院妙喜日理
祈祷　市右衛門
三河屋　豊右衛門
伊勢屋　喜兵衛
為祈祷　九十九人
為菩提　九十五人

⑮常陸屋　五右衛門
清光　妙智
春野童子　与左衛門
清光院　道伯
庄右衛門　辰之助
六兵衛　伊兵衛
中村　玄朝

一如院妙香日中
大嶋屋　権兵衛
七左衛門　伝右衛門

⑯表具屋　次郎兵衛
清左衛門　伊兵衛
妙善道秋妙想
浄性院　法通
妙光妙善恵閑
本性院　妙善
是教　法山日長
光性院　宗蔵
清涼院　妙源
祈祷　牛之助

⑰祈祷　百卅人
菩提　百十人
妙秋　永林
妙閑　妙高
妙園　妙信
妙桂　宗閑
葛籠屋　弥左衛門
冨田屋　市良兵衛

粉那屋　仁右衛門
春岸院　法入

⑱錢屋　源兵衛
妙修　妙喜
為　拾四人
泰玄　志万女
是躰院　日信
穴栖院　自閑
暁誦院覚山日悟
宗蓮　妙春
妙久　妙円
妙善　善趣

⑲信教院妙詠日照
仙室　玄銅
池田屋　善兵衛
萬屋　留兵衛
綿帽子屋　五郎兵衛
浄雲　性月
貞孩　松女
七右衛門　妙円
宗寿　妙善

為二親　法界

⑳早川
妙寿　玄意
親了　清休
祈祷　清閑
覚院　六兵衛
観喜院　道悟
修心院　日圓
成修院　日成
法増院　日躰
讃寿院　日順
博良

㉑福嶋屋
三河屋　忠兵衛
田中　治左衛門
村田屋　忠兵衛
大黒屋　重兵衛
大黒屋　加兵衛
大若　八兵衛
藤屋　弥右衛門
平四郎

㉒豊屋　六右衛門

豊屋　忠右衛門
石井　長左衛門
たばこや　甚兵衛
菓子屋　長兵衛
丹後屋　安左衛門
扇屋　げん女
中村　六兵衛

㉓茗荷屋
伊勢屋　九兵衛
笹屋　傳兵衛
和泉屋　藤兵衛
桔梗屋　加兵衛
萬屋　権右衛門
和泉屋　源兵衛
治兵衛

㉔布袋屋
上総屋　半兵衛
鈴之木屋　伊兵衛
三口屋　吉左衛門
樽屋　半兵衛
湊屋　又兵衛
佐野屋　吉左衛門
半兵衛

家根屋　八左衛門
若木屋　金兵衛

㉕中塚
中塚　五郎大夫
告　与左衛門
藤本　茂右衛門
勝田　玄泰
胡粉屋　友清
薪屋　彦兵衛
研屋　権兵衛
伊勢屋　大郎兵衛
七左衛門

㉖谷中
阿部川町　妙了
山崎屋　弥右衛門
粉屋　利右衛門
塗師屋　与兵衛
東金屋　市右衛門
坂本屋　七兵衛
和泉屋　五郎兵衛
指物屋　傳兵衛
七兵衛

㉗花師　半左衛門　浄志
正傳日久　宗女　了圓
妙相妙性常久　岩松屋茂兵衛
為　一門法界
八日　講中　寶永五戊子天
九日　講中　願主
十一日　女講中　萬屋徳兵衛
十三日　講中　五月吉祥日
十九日　講中　江戸浅草東中町

㉘大願成就所

裏書きには次のように書かれている。

抑高座石祖師御尊躰ハ金銅ニ而奉ㇾ鋳元禄十一寅八月上浣御当山江奉ニ安置之ニ，則チ三十一世日脱尊師被ㇾ遊ニ御開眼ニ其ノ砌ニ御堂仮家ニ而御座候付遐ノ度講一結企ニ大願ニ御堂造営仕当山三十三世日亨尊師御代ニ奉ニ開眼供養ニ擬ㇾ報恩ノ一分ニ者也仰願已ニ遐ノ作善ニ煩悩ノ浪静ㇾテ顕ニ菩提ノ水ニ，生死海渇ㇾテ登ニ涅槃ノ山ニ付延至自他俱安同帰常寂ニ而

祖師講中　庵主宗善坊代

寶永五戊子歳五月吉祥日

さらに裏書きの下の方に

伏見屋茂兵衛
河内屋源兵衛

心浄院常久日甚　岩雪乗閑
信女　妙久日徳　本源院円心
顕理院覚玄日性　林月院妙圓日是

窓前院松樹日栄　常休　妙寿
円際了察
紅岑葉秋　田中忠右衛門

（2）学禅院日逢以、七面社ノ古材木、造三間ニ四間ノ堂、奉レ安二置三宝明神、
（身延山諸堂記）

（3）この題目塔は幅三十九㎝　丈八十八㎝

（4）御本尊鑑　遠沾院日亨上人　八三頁

（5）神田鍋町御鋳物師太田駿河守藤原正儀作
講双　万屋源兵衛　森仙院宗久日恵
同　柳屋六兵衛　随信院順喜日行
同　山田屋源兵衛
蓮乗院栄知日浄　栄吉右門
国妙院宗近日禅　久保田庄兵衛
川口屋吉兵衛
藤本玄泰
法妙院道詠日讃　田中忠兵衛
高橋八左衛門
大黒屋吉兵衛
宗仙越後屋金兵衛
道順日随　山城屋角右衛門
参河屋　作左衛門
豊屋　六右衛門
中塚　与左衛門　光重

高座石祖師堂と祖師講中（奥野）

高座石祖師堂と祖師講中（奥野）

糸屋　忠兵衛
告　茂右衛門
大和屋　権兵衛
岸心日通　甚左衛門
たばこや　甚兵衛
粥子　伝兵衛
万樹院寛恵日鐃　八左衛門
村田屋　重兵衛
次兵衛
おかち

江戸浅草東中町
天下泰平国家安全
講中五拾人
ほっとう人　若松屋茂兵衛
浄貞院宗彦日春　伊勢屋光左衛門
相模屋　清次郎
信解院實圓日相　柳屋作兵衛
相模屋　甚五兵衛
とき屋　太郎兵衛
甲州屋　与兵衛
道具屋　善八郎
三口屋　半兵衛
権右衛門

こんふや藤兵衛
善行院祐心日通　左清兵衛
おさん
酒中花　長兵衛
吉左衛門
近江屋　伝兵衛
山田　嘉兵衛
坂本屋　五郎兵衛
仁兵衛
権兵衛　茂兵衛事法号
松屋　作兵衛　了受院澄心日浄
道瑞妙慶　江戸富沢町　市右衛門
為父母　大黒屋七兵衛　同町紀伊国屋
小長院長圓日井　為母　忠右衛門
浄志院日理　了圓坊
参詣之衆中硯当二世大願成就祈者也
元禄十丁丑歳七月廿八日　法界万霊

(6) 拙稿　棲神第六十六号　江戸中期における諸堂整備についての八十頁参照。

(7) 国語大辞典によると①楊枝を作って売る店、木を削って楊枝を作る人、②江戸、浅草寺の境内にあった床店で、美人の看板娘を置いて楊枝、五倍子（ふし）酒中花などを売った店。酒中花とは、酒席に興を添えるため、山吹の茎のずいなどで花鳥などを作り、おしちぢめておき、酒などの中に浮かべるとふくれて開くようにしたもの。唐銅祖師の台座の中に酒中花の名が見られる。

(8) 南馬道町　地名辞典によれば、台東区、浅草を冠称、矢大臣門より花川戸町へ出る筋、北側には金剛院、覚善院、徳善院、高座石祖師堂と祖師講中（奥野）

高座石祖師堂と祖師講中（奥野）

妙音院、頭松院、南側には自性院、寿徳院あり（浅草寺志）とあるから現在の浅草寺二天門から馬道通りに出る通りの両側を占めていたことになる。浅草寺と境内の掃除や雑用の助けとして境内で楊枝や線香を売っていた家持ち二十九人の役店として開いた町屋で、のちに即席料理屋、菓子屋、そば屋、摺物屋などが住むようになる。明治五年戸数一二三、人口五三一人。

富沢町　日本橋富沢町、町名は蔦沢某が開いた地なので蔦沢町としたが、のちに富沢町となったと伝える。蔦沢某は江戸初期の盗賊で、家康に捕えられたが助命され盗賊詮議の役を命じられた。蔦沢は改心して配下の者を呼び寄せ、古着屋仲間をつくって蔦沢町を形成したという（落穂集）。のち大いににぎわい蔦を富と改めた。古着市は日本橋の魚市、神田多町の菜市と並んで早くから知られ、夜の明ける頃から家の前にむしろを敷いて、古着を山のように積んだ。

神田鍋町　須田町と鍛冶町の間にあり、寛永年中にはすでに成立。鋳物師の椎名山城に下された土地なので鍋町と称した。国役の町で毎年椎名家に銀十五枚を納めていた（東京地理志料）。明治元年東京府に所属。同二年一部は神田東鍋町となり、残余に同五年神田鍋町西横町、北横町、神田東鍋町を合併。同年の戸数四〇九、人口一六四七、物産はこうもり傘、木櫛があった。（府志料）

阿部川町　浅草阿部川町　寛永十三年御小人衆の拝領大縄地となり、元禄九年代官支配地となり、浅草阿部川町と称した。町名の由来は、御小人川村太四郎の先祖が鎮守の孫三稲荷とともに駿河阿部川（静岡市安部川）から移住してきたことに由来する。正徳三年町奉行支配となった。新堀川に架かる橋をこし尾橋といった。橋畔にこし屋五郎兵衛が住んでいたからである。（御府内備考）

通油町　慶長年間はじめて町屋が置かれ、小伝馬町、通旅籠町に隣接し、灯油を売る店があったのにちなんだ町名（府志料）町の北側の裏通りは伝馬役の馬屋があったため廐新道と呼ばれた。常盤橋から浅草御門へ向かう本町通り両側に位置し、蝋燭、木綿、茶問屋があり、また当所の浄瑠璃、本屋、鶴屋喜右衛門、山形屋市郎右衛門は元禄期の流行物にあげられ（武江年表）特に鶴屋の錦絵は長く江戸の名物となった。

浅草東仲町　寛文五年浅草仲町（万治二年町奉行支配地となる）を二分、その東北地域を浅草東仲町と改称。嘉永の切絵図では浅草広小路に面して雷門前に三か所に分かれている。名主喜平次は小田原出身の農民で、明治期に至るまで代々名主を勤めた。明治元年東京府に所属。同二年浅草寺裏門番屋敷を合併。同五年、現在の浅草通りの北側の町域が分立して

浅草北東仲町となる。当時の戸数二一二、人口八八六（府志料）同十一年浅草区に所属。昭和九年雷門二丁目の一部となる。現行の雷門一丁目十三～十四番、雷門二丁目十三～十六、十七番。

高座石祖師堂と祖師講中（奥野）

◇学園彙報（平成六年度）

◇図書館だより

本学園図書館では、今年も一人一冊献本運動を展開しております。お蔭様にて同窓の各聖・各位・有縁の皆様方の献本運動のご協力を賜わり、成果も上っております。平素より仁心のご高配・ご厚志に対しまして、館員一同より厚く御礼申し上げます。

平成六年度図書寄贈者ご芳名

1 大阪日蓮宗青年会殿　大阪の日蓮宗①寺院めぐり　②寺宝資料集
2 イラン・イスラム共和国大使館殿　イラン・イスラム共和国
3 大倉精神文化研究所殿　旧制高等学校文庫目録（山岡望関係資料目録）
4 大森孝殿　高祖累歳録（全）その他24冊
5 天津小湊町殿　天津小湊の海浜生物
6 大阪日蓮宗青年会殿　大阪日青　第三百号特別号
7 尾崎文英殿　噴泉―尾崎文英詩歌集―
8 忍野村役場殿　写真集「忍野」
9 一宮嘉孝殿　数珠考
10 庵谷行亨殿　日蓮聖人教学基礎研究
11 池上本門寺殿　日蓮宗寺院大鑑
12 池原錬昌殿『春雷』第14巻3・4・5・6号第15巻1号
13 国際佛教学研究所殿　道 in Kumarajiva's Translation of the Lotus sutra　他2冊
14 甲府市教育委員会殿　文芸こうふ　第3号
15 経済広報センター殿　日本再生の処方箋
16 国際学園（学校法人）殿　国際学園六十年史
17 クオン薬局殿　漢方実用大事典
18 経済広報センター殿　日本再生の処方箋　1・2
19 国際佛教学研究所殿　Studia Philologica Buddica Monograph Series X
20 佼成図書館殿　佼成図書館増加図書目録（平成二年～平成五年版）
21 聖徳大学川並記念図書館殿　図書資料目録　コンパクトディスク
22 私立短期大学図書館協議会殿　所蔵雑誌目録　一九九四年版
23 新曜社殿　心理学とは何だろうか
24 聖徳大学図書館殿　川並弘昭先生還暦記念論集
25 須藤顕本殿　泣かされる聖者
26 鈴木曦寛殿　（ビデオ）日持上人第七百遠忌報恩大会

27 浅草寺殿　浅草寺仏教文化講座　第38集
28 順天学園殿　順天百六十年史
29 新潮社殿　新幹線のぞみ号
30 髙田恵尚殿　日蓮宗の安心
31 中央学術研究所殿　DASAVEYALIYA（Monograph Series 1）
32 電気事業連合会殿　さんすい　地球規模で考えるエネルギー問題
33 TRC殿　愛について（上）ドニ・ド・ルージュモン
34 中央学術研究所殿　ISIBHASIYAIM（Monograph Series 2）
35 東京教学社殿　新編　生活科学
36 中央学術研究所殿　AYARANGA（Monograph Series 3）
37 手川誠士郎殿　根拠への思索
38 日蓮宗新聞社殿　日蓮宗新聞　縮刷版　No.3・4
39 南部町教育委員会殿　私たちのまちと南部氏
40 日蓮宗新聞社殿　ご真蹟にふれる
41 日蓮本宗本山要法寺殿　本宗史綱（旧本門宗）上・下
42 成田山新勝寺殿　モノグラフシリーズ3―2
43 中山光勝殿　基礎政治学　他計10冊
44 日蓮宗布教院殿　日蓮宗布教院院報　平成五年度号
45 内閣総理大臣官房広報室殿　平成六年　日本の白書
46 日蓮宗現代宗教研究所殿　日蓮宗現代宗教研究所蔵書目録
47 乃木神社殿　乃木希典全集（上・中・下）
48 中山光勝殿　ポケット六法　平成七年版・刑事政策
49 日蓮宗宗務院殿　日蓮宗宗報
50 日外アソシエーツ殿　環境問題情報事典
51 藤井教雄殿　人生録　他2冊
52 法華会殿　法華（八二四、八二五、八二六、八二八）
53 長谷川五郎殿　ソクラテスの打ち方
54 放送大学学園殿　放送大学十年史
55 日蓮本宗本山要法寺殿　本宗史綱（旧本門寺）上・下巻
56 仏教・哲学系大学会議殿　仏教・哲学系大学・短期大学一覧
57 原田憲雄殿　広布山　妙徳寺年表
58 本田陽子殿　ひとつの命の誕生
59 堀智仙殿　信人、日蓮主義　他計54冊
60 藤井教雄殿　富士を拓く
61 富士急行株式会社殿　富士を拓く
62 法華会殿　法華（八二九、八三〇、八三一、八三二、八三三）
63 堀智仙殿　日蓮主義新講座　他計58冊
64 平凡社殿　ボーヴォワールは語る
65 望月海淑殿　法華4・5・6・7・8月号
66 松本光華殿　民話風法華経童話（その30）

67 望月正登殿　井上秋濤遺墨集（1）
68 身延山久遠寺殿　観心本尊抄講話
69 持田實宣殿　失われしもの　他計338冊
70 町田是正殿　日蓮聖人にみる宗教思想
71 松本修明殿　本化興風略要品・本化興風法式壹
72 宮崎英修殿　〈カセット〉久保田正文上人法話選集
73 山梨英和短期大学殿　蔵書目録（和書・洋書・雑誌）
74 山梨・群馬・埼玉・東京・長野教育委員会殿　関東山地カモシカ保護地域特別調査報告書　平成四、五年度
75 山梨県殿　やまなしの森林一〇〇選
76 大平智恩殿　日本高僧遺墨　他全502冊
77 山梨県殿　やまなしの環境―環境首都・山梨をめざして―
78 山梨ふるさと文庫殿（代表岩崎正吾）　終焉の記　他4冊
79 米田淳雄殿　平成新修日蓮聖人遺文集
80 山梨県立文学館殿　中村星湖展・少年行
81 山梨県立女子短期大学図書館殿　収書目録
82 山梨県芸術祭実行委員会殿　県民文芸
83 ユネスコ東アジア文化研究センター殿　Directory of Buddhist and Indic Studies in Japan 1994
84 山梨県殿　写真集　やまなし
85 山梨県殿　幸住県やまなし紹介ビデオ
86 立正大学日蓮教学研究所殿　日蓮教学とその周辺
87 霊友会殿　老いをはらう心の支度
88 立正短期大学部殿　仏教社会福祉に関する実態調査報告書

（掲載順不同）以上

◇同窓会本部だより

身延山短期大学は、学園同窓生各聖・卒業生の長年の念願であります四年制大学に移行し、平成七年四月一日より身延山大学となります。誠に慶賀に堪えません。何卒、同窓生各位におかれましては学園に対し今後共、更なる物心両面の応援を下さりますよう切に心よりお願い申し上げる次第で御座います。

身延山短期大学学園同窓会役員会の開催

平成六年度、同窓会役員会が平成六年十月二十八日（金）、身延山短期大学学園を会場として左記の式次第にて盛会裡に行われました。

※役員会次第（司会・桑名貫正庶務幹事）

(1) 開会の辞（永田寿昶副会長）
(2) 玄題三唱・会長挨拶（小崎龍雄会長）
(3) 理事長挨拶（藤井教雄理事長）
(4) 学長挨拶（宮崎英修学長）
(5) 校長挨拶（秋山智孝校長）
(6) 学園担当理事挨拶（切刀貞如布教部長）
(7) 議事

イ、議長選出

ロ、役員推挙
ハ、身延山大学設置経過報告
ニ、同窓会勧募現況報告
ホ、会計報告
ヘ、本部庶務報告
ト、各支部の現況報告
チ、入試広報についての報告
リ、その他
(8) 玄題三唱（牛居一教副会長）
(9) 閉会の辞（谷川寛徳副会長）

※議事録

イ、議長選出　佐藤秀旭宵森県支部長が選出される。
ロ、役員推挙　欠員になっていた副会長に牛居一教、望月頡悦両師が推挙された。
ハ、身延山大学設置経過報告　中條暁秀設置準備事務局次長より左記の報告がなされた。
身延山大学設置申請経過報告
①平成五年四月三十日　第一次申請書類提出
大学設置分科会関係　「身延山大学認可申請書」（設置の趣旨等）
学校法人分科会関係　「学校法人寄附行為変更申請書」
②平成五年七月三十日　第一次申請一部追加書類提出
大学設置分科会関係　「身延山大学認可申請書」（大学の概要、学長・学部長の個人調書、経費及び維持方法等）
学校法人分科会関係　「学校法人寄附行為変更申請書」
③平成五年十月七日
学校法人分科会　面接審査（於　文部省）
④平成五年十月二十五日
大学設置分科会　面接審査（於　国立教育会館）
⑤平成六年一月七日　文部省高等教育局長より「継続審査」の通達
⑥平成六年六月三十日　第二次申請書類提出
大学設置分科会関係　「身延山大学認可申請書」（大学の概要、教員個人調書等）
学校法人分科会関係　「学校法人寄附行為変更申請書」
⑦平成六年九月二十日
学校法人分科会　実地調査
⑧平成六年十月二十日
大学設置分科会　実地審査
⑨平成六年十二月中旬　設置審議委員会（結果待ち）
ニ、同窓会勧募現況報告　奥野本洋会計幹事より別紙の如く明細に報告がなされた。
ホ、会計報告　奥野本洋会計幹事より別紙の通り平成五年度の会計報告がなされ、承認された。
ヘ、本部庶務報告　桑名貫正庶務幹事

1　各支部の総会への学園関係者出張（四大改組転換の経過報告・勧募の要請）

平成五年六月　山梨支部総会へ桑名貫正庶務幹事出張

平成五年十二月　九州地区総会へ宮崎学長、中條準備室事務次長出張

平成六年二月　大阪支部総会へ小崎会長・奥野本洋会計幹事出張

なお、平成六年度は十月中旬までに十二支部の総会に出席した経過報告・並びに勧募のお願い学園広報現況報告がなされた。

2　慶弔規定に基づき弔電八本の報告（本部へ連絡のあった分）がなされた。

3　同窓会会員名簿作成の提案（会員名簿は有料化の方向で前向きに検討すること、但し住所等の確認をし、時間をかけてしっかりしたものを作ることが討議された）

ト、各支部の現況報告

兵庫支部　谷口宗敏支部長　本日の役員会の内容を持ち帰り、近日中に支部総会を開くことになっている。

京都一部支部　奥田恵遠支部長　勧募目標を達成するため卒業生以外のひとにも積極的に呼び掛けていく。

香川県　岡　観隆理事　会費については支部長から一言も無いので、もう少し徹底してもらいたい。

新潟支部　円山博良支部長　支部総会には秋山校長・桑名幹事が出席してくれた。目標額を達成する予定。

神奈川支部　小林海優支部長　春に総会・秋に懇親会を開いている。十一月には本部より幹事が来県の予定。

岐阜支部　堀　智仙師（代理）釈　潮興支部長　伝師部成満後、総会を開き御希望にそえるよう努力したい。

山梨支部　平原要俊副支部長　毎年総会と研修旅行を実施。今年の総会には桑名・奥野幹事出席し協力要請。

石川支部　出島元学支部長　北陸四県で会合をもち、足並みを揃え学園基金の勧募目標に努力していきたい。

大分支部　首藤昭幸支部長　今年は別府で延山会を開催。この度の基金勧募で大分の同窓会が結束出来た。

静岡支部　平岡日静・永田寿昶両支部長　総会を開き相談し、未納の本部会費を納め、全面的に協力したい。

大阪支部　牛居一教支部長　学校はお祖師様のお弟子をつくる所、本化の地涌の菩薩の出現する場所である。

富山支部　谷川寛徳支部長　本学は日本一の僧風教育の学校である。親子三代に亘る大恩は絶対に忘れない。

宵森支部　佐藤秀旭支部長　毎年一回総会を開催。今年は学園関係者三名が来県、基金勧募の協力を約束。

チ、入試広報についての報告　短大については奥野本洋入試広報担当より、高校については進藤義遠庶務主任より報告がなされた。

・身延山短期大学は、平成六年十二月十四日、文部省の大学設

置・学校法人審議会の決定により、十二月二十一日、平成七年度より四年制に移行することが正式に認可され、認可状の交付を受けた。学園は平成七年一月十三日、身延山大学仏教学部設置認可報告式・祝賀会を（於下部ホテル）開催した。小崎龍雄同窓会会長は祝辞の中で、これから学園に対して同窓会は全面的になお一層の協力と資金等の応援をすることを誓われた。当日の報告式・祝賀会には同窓会関係者として谷川寛徳・永田寿昶・牛居一教同窓会副会長・各理事・各支部長・各方面から多数の同窓生が出席され祝意を表わされた。

同窓会本部からのお願い

身延山学園は只今、「教育振興のための基金（最低十億円）の創設」をし、法器の養成、教育機関の充実につとめております。同窓生の皆々様、何卒一人でも多く有縁の方々に呼びかけて基金造成目標達成の為に、身延山久遠寺『百万人講』を通じて御協力下さりますようにお願い申し上げます。

（文責　桑名貫正）

研究活動報告

(1)日本印度学仏教学会

第四十五回学術大会は、平成六年五月二十一日（土）・二十二日（日）の両日にわたり、当番校武蔵野大学（東京）の主催で、同大学を会場に開催された。本学からの発表者とテーマは次の通りである。

◆　竜神信仰と仏教の包容性　　髙橋堯昭

(2)日本宗教学会

第五十三回学術大会は、平成六年九月九日（金）・十日（土）・十一日（日）の三日間にわたり、当番校立正大学（東京）の主催で、同大学を会場に開催された。本学からの発表者とテーマは次の通りである。

◆　金綱集の研究　　中條暁秀

◆　「明閣」考　　渡辺寛勝

(3)日本仏教学会

平成六年度学術大会は、「仏教における誓願」を研究課題として、十月八日（土）・九日（日）の両日、当番校仏教大学（京都）の主催で、同大学を会場に開催された。本学からの発表者とテーマは次の通りである。

◆　日蓮における「三大誓願」の成立と意義　　間宮啓壬

(4)日蓮宗教学研究発表大会

第四十七回研究発表大会は、平成六年十月二十七日（木）・二十八日（金）の両日にわたり、日蓮宗宗務院（東京）を会場に開催された。本学からの発表者とテーマは次の通りである。

◆　火の仏 ―― 法華経の包容性 ――　　髙橋堯昭

◆ 日蓮聖人の思想における「三大誓願」の位置　間宮啓壬

平成六年度　卒業論文一覧

優陀那日輝和上の教学の一考察　石井慎重
日蓮聖人の報恩観　佐々木英寿
日蓮聖人の救済について　鈴木正康
法華神道の一考察　髙山明徳
立正安国論の一考察　内田慈恵
常楽院日経上人の研究　内山恵里
日蓮聖人の守護神観　太田英義
北海道開拓史の一考察―法華村について―　大野圭一
七面山信仰の一考察　上撫育子
四条門流の成立と展開　木内隆敬
日蓮聖人の摂折論の一考察　北里康記
日像上人の研究　清瀬一仁
宮沢賢治の法華経観　佐藤大五
日蓮聖人の伝教大師観　鹿谷修也
遠沾院日亨上人の研究　嶋原光慈
身延山における墓碑・板碑考　清水正人
久遠成院日親上人の研究　杉町元茂
清正公信仰の一考察　杉本一光
日蓮聖人の「信」の研究　多田博典
常不軽院日真上人の一考察　田仲良向
池上日樹の研究―配流地飯田での生活―　谷川完樹
立正安国論の一考察　中尾成幸
日蓮聖人の大曼荼羅考　野中和幸
日蓮聖人遺文に現れた「安心」についての一考察　花村武
中村檀林の成立と展開　林健太郎
久遠成院日親上人の研究―折伏正義抄について―　平岡聳徳
身延山と武田氏の関係　深沢恵修
身延山と河内領主穴山氏の関係　福森要
日蓮聖人の比叡山遊学　藤岡智健
大黒天信仰の一考察　松岡克典
身延山での日蓮聖人の御生活　松本義正
日蓮聖人の上行自覚について　山口龍泰
宗祖直檀池上開基大檀越池上宗仲公　山本伸也
身延山における日蓮聖人の御生活　吉田光弘
日蓮聖人の上行自覚についての一考察　神部貴久

Ratnākaraśānti's Sūtrasamuccayabhāṣyaṃ Ratnālokālaṃkāra (III)

Kaie Mochizuki

4 Chapter 4 : The Rareness of Having Trust[(1)]

4.0 Introduction

da ni byang chub kyi sems bstan pa bshad par bya'o[(2)] // de la re zhig mtshams[1] sbyor ba ni *de bzhin gshegs pa'i bstan pa la dad pa rnyed par dka' ste* zhes bya'o // ci'i phyir zhe na /

sangs rgyas bye ba khrag khrig brgya stong la bsnyen bkur byas na gzod[2] dad pa thob po[(3)]

zhes gsungs pa'i phyir ro[3] // (P.267b) de la *bstan pa* ni dam pa'i chos lung dang rtogs pa'i bdag nyid la bya'o // *dad pa* ni mi phyed pa'i mtshan nyid dang ldan pa'o[(4)] // de ni rnam pa gsum ste / dang ba'i[4] dad pa dang / yid ches pa dang / 'dod pa'i dad pa'o[(5)] // de dag kyang yul ni dkon mchog la sogs pa rnam pa gsum la ci rigs par skye ba'o[5] // 'on lung las kyang

dad pa gang zhe na / (C.230b) las dang 'bras bu bden pa

---

1) P mchams. 2) P bzod. 3) P re. 4) D pa'i. 5) C,P skye'o.

dang / dkon mchog[1] gsum la mngon par yid ches pa dang / 'dod pa dang sems dang ba'o[2] (6)

zhes pa dang 'gal lo zhes rgol ba'i *dad pa ji lta bu zhe na* zhes bya ba'o//

4.1 Tathāgataguhyasūtra (7) (D.151a2, P.175b3, T.50c20, BP.9.15)

lan ni de dgongs pa'i don te / bye brag gam sgo nas spyi mtshon pas 'gal ba med pa bstan pa de ni *de bzhin gshegs pa'i gsang ba'i mdo las* zhes bya ba la sogs pa'o // *'di la* zhes[3] bya ba ni dad pa bstan par bya ba'i skabs 'di la'o // *rigs kyi bu 'am rigs kyi bu mo* zhes bya bas ni[4] dal 'byor thob pa'i gang zag (8) bstan to // stong pa nyid dang snying rje mi phyed pa[5] dang ldan pa ni *lhag[6] pa'i bsam pa'o* // *sems bskyed de[7]* zhes bya ba ni smon pa'i bdag nyid do // spyi'i don la gnas skabs kyi[8] stobs kyis dgos pa bye brag tu bstan pas na *dad pa yin* zhes bya'o // de'i phyir dad pa bstan par bya ba ni *dang ba mang zhing* zhes bya ba la sogs pa ste / byed pa dang / yul dang / ngo bo nyid dang / phan yon yang rig par bya'o (9) //

de la byed pa ni rnam pa gsum ste / dang ba'i byed pa dang / 'dod pa'i byed pa dang / yid ches pa'i byed pa'o//

de la dang ba'i byed pa ni nor bu chu dang byed ltar rgyud gyi rnyog pa med pa ste (10) / phyir zhing *'phags pa rnams la lta 'dod pa*

---

1) P mcheg. 2) P pa'o. 3) P omits zhes. 4) P omits ni.
5) P omits pa. 6) P omits pa ni lhag. 7) C do. 8) P omits kyi.

dang / *dam pa'i chos nyan par 'dod pa'o* // de la dang ba (D.228a) ma yin pa ni rtag tu bsgom pa'i phyir ro // *'phags pa* ni las dang nyon mongs pa las ring du song ba ste / yang dag par rdzogs pa'i sangs pa'i sangs rgyas dang / de'i dge 'dun dag go // *dam pa* ni gang zag de dag ste /[1] de dag gis spyad pa'i phyir *dam pa'i chos so* //

'dod pa'i byed pa ni *ser sna med pa* la (P.268a) sogs pa ste / thob pa dang spangs pa la dmigs pa'i phyir mya ngan las 'das pa thob pa'i rgyu lam gyi bden pa dang / sdug bsngal gyi rgyu kun 'byung (10b) la dmigs pa'o // sdug bsngal gyi rgyu[2] kun 'byung spangs[3] pa'i phyir *ser sna med* ces bya ba ste / ser sna dang 'chal pa'i tshul khrims la sogs pa dag (11) ni sdug bsngal gyi rgyu yin pa'i phyir ro // mya ngan las 'das pa'i rgyu lam gyi bden pa thob par bya ba'i phyir *lhug par gtong ba* (12) *dang* zhes bya ba la sogs pa ste (13) / ma chags pa'i ngo bo nyid la sogs pa pha rol tu phyin pa drug (13b) ni lam du 'dod pa'i phyir ro // de la *lhug par gtong ba* ni sbyin pa dang 'bras bu ma (C.231a) 'brel ba ste (14) mya ngan las 'das pa bsngo ba'i phyir ro // *lag pa brkyang ba* (15) ni gus pa dang rgya cher rab tu sbyin par bya'o // *gtong ba la dga' ba* (16) ni snga rol dang de'i[4] tshe dang byin zin nas yi rang ba dang / dang ba dang / 'gyod pa med pa'o (17) // sbyin pa mi 'chad par byed pa (18) ni gcig tu chos dang bab col ma yin pas longs spyod sgrub ste dus dus su yang dang yang du sbyin par bya ba'i dngos po yongs su gtong ba'o // *gtong ba phun sum tshogs pa* ni sbyin gnas dag la 'bul ba'o // *sbyin pa 'gyed par dga'*

---

1) P omits /. 2) P omits rgyu. 3) P spang. 4) P po'i.

ba[19] ni dus dus su pha dang ma dang bu dang bran pho dang bran mo la sogs pa[20] la kun 'gyed pa'o //

yang na sbyin pa rnam pa drug ste / mi rten pa dang / dga' ba dang / yang dang yang du sbyin pa dang / snod du gyur pa la sbyin pa dang / yongs su gzung ba sbyin pa dang / 'khor la sbyin pa ste[1] / de ltar sbyin pa dang / gang la sbyin pa'i dbang du byas nas *lhug par gtong ba* la sogs pa rnams su rig par bya'o //

rnam grangs gzhan yang mi srid pas *lhug par gtong ba'o* // mi 'gyod bas na *dga' ba'o* // gus pa dang ldan pas *mchod sbyin no*[21] // lus dang longs spyod dang dge ba gtong bas[2] *gtong ba phun sum tshogs pa'o* // rjes su dga' (D.228b) bas *'gyed pa la dga'* (P.268b) *ba'o* // gtong ba'i tshe na *khong khro ba med pa'o* // 'bras bu 'dod pa'i re ba med pas *rnyog pa med pa'o*[22] //

yang na pha rol tu phyin pa drug gis zin pa ste / de la sbyin pa'i sbyin pa ni *lhug par gtong ba'o* // tshul khrims ni *dga' ba* dang gus pa'i *mchod*[3] *sbyin no* // brtson 'grus ni *gtong ba phun sum tshogs pa'o* // bzod pa ni *dga' ba* dang *khong khro ba med pa'o* // bsam gtan dang shes rab kyis zin pas na *rnyog pa med pa ste* / de ltar na sbyin pa ji lta ba bzhin du tshul khrms kyi sbyin pa la sogs pa rig par bya ste / 'dir ni mtshon par rig par bya'o //

yid ches pa'i byed pa bstan pa ni *las dang las kyi rnam par smin pa la yid ches pa dang* zhes bya ba[4] la sogs pa'o // de la *yid*[5] *ches pa* la sogs pa gsum[23] ni *som nyi med pa*[24] la sogs pa gsum[25] dang sbyar bar bya'o //

---

1) P dang. 2) P omits gtong bas. 3) D mchog.

4) P omits dang zhes bya ba. 5) D yis.

yang na mi phyed pas *yid ches par bya'o* // nges par 'dzin pas *mos pa'o* // bye brag phyed pas *rtogs pa'o* // thos pa'i tshe (C.231b) *som nyi med pa'o* // bsam pa'i tshe *the tshom med pa'o* // bsgom pa'i tshe *yid gnyis med pa'o'* zhes kha cig 'dod do //

la la dag ni sbyor ba la sogs pa gsum du *som nyi med pa* la sogs pa yin no zhes so //

lus can rnams kyis[2] las dag ni //
bskal pa brgyar yang chud mi za //
tshogs shing dus la bab pa na //
'bras bu nyid du 'gyur ba yin // (26)

zhes gnyen pos ma bcos par zad par mi 'gyur bas *chud mi za'o* // chud mi za ci zhig gnod // nyon mongs pa spong na so sor ma brtags[3] pa'i[4] 'gog par 'gyur ro (27) // ma yin te *chud mi za ba* zhes bya ba ni gnyen pos ma bcos na 'bras bu bskyed pa la bya ste / nyon mongs pa zad na de ni 'dod pa kho na ste / thog ma med pa'i las dag ji ltar zad par 'gyur zhe na / gnyen pos bsgom zhing rgyu 'gog pas na *mi bya ba mi byed pa'o* //

4.2 Tathāgataguhyasūtra 2 (28) (D.151a5, P.175b8, T.50c27, BP.10.7)

des don bstan pa'i sgo nas bsdu ba ni / *yang de nyid las 'byung ba* zhes bya ba yin no //

(P.269a) 'dun dang zhe sdang 'jigs pa dang //
rmongs pas gang zhig chos mi 'da' // (29)

---

1) P pa'o // 2) P kyi. 3) P brtag. 4) AKBh, pas.

zhas bya ba'i tshul gyis ni bya[1] ba kha na ma tho ba mi byed pa ste / gzhan du na /

nga yi bstan la ma gus gang //
de yis nga mthong ci zhig bya //[30].

zhe'o //

4.3 *Vimatisamudghātasūtra[31] (D.151a5, P.176a1, T.50c29, BP.10.10)

dad pa'i yul[2] bstan pa'i phyir *dad pa ni* (D.229a) zhes bya ba la sogs pas mtshams sbyor te / *dge ba'i chos* ni dkar po'i chos mtha' dag bskyed pa'i rgyu byang chub kyi sems so // *sngon du 'gro ba* ni /

rgyal dang rgyal ba'i chos la dad gyur cing //
byang chub bla na med la dad gyur pa //
sangs rgyas sras kyi spyod la dad byed na //
skyes bu dam pa rnams kyi sems skye'o //[32]

zhes 'byung ba lta bu'o // de la dad pa rnam pa gsum gyis yul gang la dad par gyur zhe na / *'di ltar de bzhin gshegs pa* zhes bya ba[3] la sogs pa gsungs te / dad pa'i yul ni rnam pa gsum ste / sangs rgyas dang chos dang dge 'dun dang / sdug bsngal dang kun 'byung ba[4] dang 'gog pa dang / lam dang / las dang / 'bras bu rnams so[33] // yul de gsum mtshon pa'i don du de bzhin gshegs pa smos te / gtso bo yin pa'i phyir ro // de bzhin ghsegs pa de'i

---

1) P omits ba'i tshul gyis ni bya. 2)P tshul yul.

3) C omits zhes bya ba, D, P la sogs zhes bya ba. 4) P omits ba.

yon tan gang rnams she[1] na / 'di lta ste / phung po yongs su dag pa'i yon tan dang /[2] brjod pa yongs su dag pa dang / mdzad pa yongs su dag pa dang / mkhyen pa yongs su dag pa dang / gzigs pa (C.232a) yongs su dag pa dang / mngon par 'phags pa'i yon tan rnams so //

de la phung po yongs su dag pa ni / tshul khrims kyi phung po dang / ting nge 'dzin gyi phung po dang / shes rab kyi phung po dang / rnam par grol pa'i phung po dang / rnam par grol ba'i ye shes gzigs pa'i phung po'o[(34)] //

brjod pa yongs su dag pa ni ji lta ba las brtsams nas chos rnams kyi rang bzhin brjod pa dang / ji snyed yod pa las brtsams nas chos kyi rnam grangs (P.269b) brjod pa'o[(35)] //

mdzad pa ni rnam pa gnyis te / mi rtag pa dang / dus thams cad pa'i phrin las so //

mkhyen pa ni rnam pa drug ste / rdzu 'phrul gyi yul shes pa dang / lha'i rna ba'i mngon par shes pa dang / gzhan gyi sems shes pa dang / 'chi 'pho[3] dang / skye ba shes pa[4] dang / sngon gyi gnas rjes su dran pa dang / zag pa zad pa mngon par mkhyen pa'o /[(36)]

gzigs pa ni rnam pa lnga ste / sha'i spyan dang / lha'i spyan dang / shes rab kyi spyan dang / chos kyi spyan dang / sangs rgyas kyi spyan no /[(37)]

mngon par 'phags pa ni rnam pa gsum ste / sku dang[5] (D.229b)

---

1) P zhe. 2) P omits /. 3) P 'bo. 4) P omits pa.
5) C, D dang /.

gsung dang thugs kyis mngon par 'phags pa ste / de bzhin gshegs pa'i yon tan ni mdor bsdu[1] na 'di dag tu zad de / de[2] ci'i phyir zhe na / rang dang gzhan gyi don mtha' dag bsdus pa'i phyir[3] te[4] / lung las yon tan ji snyed brjod pa thams cad kyang 'di gnyis kho nar zad do //

de la zag pa med pa'i phung po lnga las gtso bo yin pa'i phyir /[5] rnam par grol ba'i ye shes mthong ba'i phung po ni *sgrib pa med pa'i ye shes mthong ba* zhes smos pa yin no //

ji lta ba las brtsams nas chos kyi rang bzhin brjod pa ni des bstan pa ni *mthong par dka' ba* zhes bya ba la sogs pa gsungs te / tshu rol mthong ba'i yul ma yin pas *shes par dka' ba'o* // tshad ma'i yul ma yin pas[38] shes par dka' ba'o // 'phags pa'i spyod yul du gyur pas *zab pa'o* // spros pa dang bral bas[39] *rgyu ba chad pa'o*[40] // gzhi ma grub pas[41] *mig kyang med* ces bya ba la sogs pa'o // chos can med pa la chos mi[6] 'thad pas *mi 'gag*[7] *pa yang med* ces bya ba la sogs pa gsungs pa'o // de lta mod kyi 'on kyang kun rdzob tu ji snyed yod pa las brtsams (C.232b) te / chos rnams kyi rnam grangs brjod pa ni *yan lag drug cu dang ldan pa*[42] zhes bya ba la sogs pa gsungs te / gsung yan lag drug cu ni / gsang ba bsam gyis mi khyab pa'i mdo[43] las shes par bya'o // (P.270a) de las ci byed ce[8] na / 'khrul pa mtha' dag gi gnyen po yin pa'i phyir ro // ngag gi las *yongs su dag pa dang* zhes bya ba la sogs pa gsungs pa yin no // de ltar rgyas par bshad pa bsdu ba'i phyir *mi mkhyen pa'm*

---

1) P sdu. 2) C, D omit de. 3)P omits phyir. 4) C to, P ste.
5) P ro //. 6) P omits mi. 7) P 'gal. 8) P zhe.

zhes bya ba la sogs pa[1] gsungs te / ji lta ba'i don mkhyen pas mi mkhyen pa med pa'o // ji snyed yod pa mkhyen pas *ma gzigs pa* med pa'o // de gnyis ka'i ngo bos mngon sum du ma mdzad pa med pa dang / mngon par sangs rgyas pa med pa'o //

mdzad pa yongs su dag pa ni / *spyan yongs su dag pa dang ldan pa*[2] (44) zhes gsungs te / nyin mtshan lan drug tu gzigs pas na *kun nas spyan dang ldan pa'o* (45) // yang na gdul bya dus gsum pa rnams yal bar mi 'dor bar dus thams cad pa'i phrin las dang mi rtog pa'i phrin las kyis gzigs pas na kun nas spyan dang ldan pa'o (46) //

(D.230a) drug mngon par mkhyen pa'i gtso bo yin pa'i phyir zag pa zad pa'i mngon par shes pa (47) bstan pa ni / *'dod chags dang bral ba* zhes bya ba la sogs pa'o //

gzigs pa yongs su dag pa spyan lnga las dang po yin pa'i phyir / *sha'i spyan* smos te (48) / mthar thug pa med pas *dpag tu med pa'o* //

mngon par 'phags pa'i yon tan las sku *mngon par 'phags pa* ni / *spyi gtsug bltar*[3] *mi snang ba'o* (49) // kun rdzob kyi bden pa ston pas *zab pa'o* // don dam pa'i bden pa ston pas *don dam pa ston pa ste* / 'di gnyis ni gsung mngon par 'phags pa'i yon tan no // thugs mngon par 'phags pa ni / *sangs rgyas kyi chos thams cad kyi bla na med par gyur pa ste* / de la mtshan bzang po sum cu rtsa gnyis (50) dang / dpe byad bzang po brgyad cu mtshon pa'i (51) phyir sku mngon par 'phags pa'o // gsung yan lag lnga (52) dang ldan pa bstan pa'i phyir gsung 'phags pa bstan te / gsung yan lag lnga gang

---

1) C, D omits la sogs pa. 2) SS omits dang ldan pa. 3) P ltar.

zhe na / yongs (P.270b) su shes shing rnam par shes par 'gyur ba dang / mnyan na bde zhing mi mthun pa med pa dang / zab cing dbyangs rjes su 'byung ba dang / gtang mi bra zhing rnar snyan pa dang / ma 'khrugs (C.233a) shing gsal ba'o // byang chub kyi phyogs kyi chos sum cu rtsa bdun[53] dang / tshad med pa bzhi[54] dang / rnam par thar pa brgyad[55] dang / mthar gyis gnas pa'i snyoms par 'jug pa dgu[56] dang / zad par gyi skye mched bcu[57] dang / zil gyis gnon pa'i skye mched brgyad[58] dang / nyon mongs pa med pa[59] dang / smon nas mkhyen pa[60] dang / so so yang dag par rig pa bzhi[61] dang / rnam pa thams cad du yongs su dag pa bzhi[62] dang / dbang bcu[63] dang / stobs bcu[64] dang / mi 'jigs pa bzhi[65] damg / srung ba med pa gsum[66] dang /[1] dgongs[2] pa nye bar gzhag[3] pa gsum[67] dang / bsnyel ba mi mnga' ba'i chos nyid[68] dang / bag chags yang dag par bcom pa[69] dang / thugs rje chen po[70] dang / ma 'dres pa'i chos bco brgyad[71] dag[72] ni sangs rgyas kyi chos thams cad de thugs mngon par 'phags pa'o // yon tan rnam pa gsum po 'di dag ni shes rab kyi pha rol tu phyin pa las rig[4] par bya'o //

4.4 Śraddhābalādhānasūtra[73] (D.151b4, P.176a8, T.51a11, BP.11.12)

de dag gi ngo bo (D.230b) nyid gang zhe na / *de la dad pa'i stobs gang zhe na* zhes bya ba la sogs pa gsungs te / dad pa ni rnam pa gsum ste[5] / yid ches pa dang / dang ba dang / 'dod pa'i dad pa'i ngo bo nyid do // de la mi brdzi bas ni *stobs* zhes

---

1) P omits /. 2) AAK dran. 3) P bzhag. 4) P rigs. 5) P omits

bya ste[74] /[1] chen po zhes bya ba'i don to //

de la yid ches pa'i ngo bo nyid ni *mngon par dad pa dang*[2] zhes bya ba la sogs pa ste / sangs rgyas kyi chos ni des gsungs pa'i las dang 'bras bu phyin ci ma log pa'i mtshan nyid de / *las dang las kyi rnam par smin pa* zhes bya'o //[3] de la lus la sogs pa'i mngon par 'du byed pa ni *las* zhes bya ste / dge ba la sogs pa rnam pa gsum mo[75] // *rnyog pa* ni bdag tu lta ba[76] yin la / mos par spyod pa'i sa la chos thams cad bdag (P.271a) med par yid ches pa ni rtog pa med pa'i sems so // *chos thams cad* ces bya ba ni phyi dang nang gi dngos po thams cad de[77] / gcig dang du ma dang bral ba'i phyir[78] / ngo bo nyid med pas *stong pa nyid dang* / rang dang gzhan gnyi ga dang rgyu med pa las mi skye bas[79] rgyu'i *mtshan ma med pa dang* / yod pa dang med pa dang gnyi ga las mi skye bas[80] 'bras bu *smon pa med pa dang* / de'i phyir 'du byed thams cad dang bral (C.233b) nas *mngon par 'du mi byed pa* ni rnam par rtog pa thams cad kyis dben pa ste mthong[4] ba'i lam gyi mnyam par gzhag[5] pa'i gnas skabs su[6] dad pa'o // de'i rjes la thob pa nas sa lnga pa'i[81] bar du thabs shes rab zung du 'brel pa'i ngo bo nyid du dad pa ni *sbyin pa* la sogs pa'o // sa drug pa nas bcu pa'i bar du[82] shes rab rnam pa bzhi ni rten cing 'brel par 'byung ba shes pa la sogs pa ste / de ltar na pha rol tu phyin pa bcu[83] ni mthong ba dang bsgom pa'i lam la yid ches pa'i ngo bo nyid do //

la la dag ni mtho ris kyi rgyu ni *las dang las kyi*[7] *rnam par smin*

---

1) C, D omit /. 2) P dang /. 3) P omits //. 4) D ma mthong. 5) P bzhag. 6) P omits su. 7) P omits kyi.

po'o // nyon mongs pa'i sgrib pa spong ba ni *rnyog pa med pa'o* // shes bya'i sgrib pa spong bas na *stong pa nyid* la sogs pa'o[84] // theg pa mchog 'dod pas na pha rol tu phyin pa drug ste / mdor na mtho ris dang byang grol gyi sa la yid ches pas yin no zer ro //

la la dag ni dngos su byung ba dang zhar la byung ba'i don te[1] / *las dang las kyi rnam par smin pa* la dad (D.231a) pa ni dngos su yid ches pa'i dad pa ni yin la / *rnyog pa med pa'i sems* la sogs pa ni zhar las byung ba ste / de la rnyog pa ni gzung ba dang 'dzin pa'o[85] // de dang bral ba'i[2] rang rig pa'i[86] sems 'od gsal ba'i ngo bo nyid[87] ni rnyog pa med pa'i sems so // kun tu brtags pa dang / gzhan gyi dbang[3] dang /[4] yongs su grub pa'i rang bzhin dag ni mtshan nyid dang / skye ba dang / don dam pa'i ngo bo nyid med pas stong pa nyid la sogs pa nyid yin la[88] / 'od gsal ba'i (P.271b) sems las ma gtogs pa'i sems gzhan gyi ngo bo nyid tshol bar mi byed pa dang / chos nyid sems las gzhan pa'i sems gzhan no // yod pa ma yin rang bzhin brjod do[5] zhes 'byung bas *mngon par 'du mi byed pa'o* // de ltar lta[6] ba rnam par dag pas spyod pa phun sum tshogs pa ni pha rol tu phyin pa rnam pa[7] drug[89] dang bsdu ba'i dngos po bzhi[90] bstan to zhes 'dod do //

4.5 Śradhābalādhānasūtra 2[91] (D.151b6, P.176b4, T.51a17, BP.12.1)

---

1) P ste. 2) P ba'i sems. 3) P dbang ba. 4) C, D omit /.
5) P do //. 6) P blta. 7) P omits pa.

dang ba'i[1] ngo bo nyid ni *dang ba'i mtshan nyid ni dad pa*[2] *ste* zhes bya ba ste / 'dod chags la sogs pa'i rtog pa dang bar byed pas na nor bu[3] chu dang ltar dang bar byed pa'o // rtog pa med pa nyid gang zhe na / *gang chags pa med pa* zhes bya'o // yul gang zhe na / *theg pa chen po*[4] zhes bya (C.234a) ste / rnam pa bzhi ni theg pa chen po rgyud dang bar byed pa'i gtso bo yin pas theg pa chen po smos so //

gzhan dag ni dang ba'i dad pa ni mos pa gtso bo yin pas mos par spyod pa'i sa la 'dod de / re zhig tshogs kyi sa la sgra'i rjes su 'gro bas byang chub sems dpa' rtag tu ngu (91b) dge ba'i bshes gnyen dang shes rab kyi pha rol tu phyin pas shin du skom nas du zhing cho nges 'debs te / nyin mtshan bdun 'das pa lta bu dang / rgyal po la gdams pa las / yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas kyi gzugs brnyan mthong bas zhag bdun du mig mi 'dzums[5] par lta zhing mchi ma'i rgyun mi 'chad par byung zhing zhes bya ba dang / 'phags pa nor bzangs kyis dge ba'i bshes gnyen mthong ma thag tu mig mchi mas gang bar dus te zhes bya ba lta bu'o // de'i phyir tshogs kyi sa la ni theg pa la mos pa mi bzlogs[6] pas na (D.231b) *dad pa'i stobs* zhes bya'o // drod dang rtse mo'i gnas skabs na dbang byed pa'i phyir dbang po'o // bzod pa dang chos kyi mchog tu mi brdzi ba'i phyir stobs zhes bya'o (92) //

'dir gtso bo yin pas dad pa 'ba' zhig smos te brtson 'grus la sogs pa yang rig par bya'o // de la lus la sogs pa la ma zhen pas *chags pa med pa* (P.272a) *khong du chud pa ste* / dper na byang chub

---

1) RA po'i. 2) P dang. 3) P bus. 4) P po'i. 5) P 'dzum. 6) P bzlog.

sems dpa' rtag tu ngu brla'i sha btogs[1] shing rus pa gcog pa dang / lag pa phug ste khrag gzag go zhes pa lta bu'o // ma zhen pa ni rang bzhin med par khong du chud pas dngos por lta bas mi brdzi ba'i phyir *stobs zhes bya'o* zhes 'chad do //

de ltar dang ba'i ngo bo nyid bshad nas 'dod pa'i dad pa'i ngo bo nyid bstan[2] pa ni *gzhan yang* zhes gsungs pa'o // bden pa bzhi rtogs par 'dod pas dge ba'i bshes gnyen la brten pa ni *gzhan gyi sgra la dad pa'o* // de la dad pa ni 'dod pa'i dad pa'o // ji ltar zhe na 'og nas gzhan gyi sgra thos nas mngon par dad pa zhes 'byung ba'i phyir ro // 'dod pa ni 'dun pa ste / gzhan gyi sgra dang tshul bzhin yid la byed pa las don rnyed pa'i phyir ro // de la sdug bsngal dang / kun 'byung[3] (C.234b) dang / 'gog pa dang / lam dag ni shes par bya ba dang / spong[4] bar bya ba dang / mngon du bya ba dang / rgyud la bskyed par 'dod pa'i phyir[(93)] dang po *gzhan gyi sgra la dad pa ste* / chos thos par 'dod pa'o // chos gang zhe na / sbyor ba rim can du bslab par bya bas bden pa bzhi[5] rtogs par bya ba'i phyir ro // sbyor ba rim can zhes bya ba ni tshul khrims dang / thos pa dong / bsam pa dang / bsgom pa la bya ste /

'di na dang por thos la
brten nas yid la byed pa 'byung //
tshul bzhin yid la byed las[6]
yang dag don yul ye shes 'byung //

---

1) P brtogs. 2) P brtan. 3) C spung. 4) P spang. 5) D bzhin. 6) P pas.

de las chos thob de yod

de las blo gros rab tu skye //

gang tshe de ni so so

yang rig med na ji ltar nges //[1] (94)

zhes bya ba lta bu'o // de lta bas na dang po smon pa dang ldan pa'i sems rgyud la bskyed pas na *byang chub sems yang dag par 'dzin pa'o* // 'jug pa'i sdom pa len pas na *spyod pa'o* // mthong ba'i lam gyis bsdus pa'i sems rnam pa bcu (95) (D.232a) ni *byang chub kyi sems so* // lam de la 'jug pa'i rgyud pa'i 'byor pa[2] ni rnam pa gsum ste / de gsum mtshon pa'i phyir 'gyur ba med pa ni (P.272b) *bsam pa'o* // dngos kyi sbyor ba 'bras bu gsum dang ldan pa ni *sbyor ba'o* // rang gi don bsgrub pa'i thabs ni *pha rol tu phyin pa'o* // gzhan gyi don bsgrub pa'i thabs ni *bsdu ba'i dngos po'o* // gnyi ga'i bsgrub pa'i rgyu ni *thabs la mkhas pa* ste / dge ba'i bshes gnyen no // 'bras bu'i ngo bo nyid ni sngar bshad pa'i chos rnams te / sangs rgyas kyi chos so // lam rnam pa bzhi (95) ni byang chub sems dpa'i chos de dag ni sbyor ba rim[3] bzhin du bslab pa rnams so //

la la na re mos pa gtso bor gyur pa'i dang po'i ngo bo nyid kyi bzod pa dang chos kyi mchog tu dad pa'i stobs[4] gtso bor bshad pa de la ci'i phyir stobs zhes bya / gang gis brdzi bar mi nus she[5] na / byang chub kyi sems la sogs pa 'og nas 'chad[6] pa rnams dang ldan pas stobs zhes bya la / de dag gis mi mthun pa zil gyis non pas na mi brdzi ba'o // *byang chub kyi sems* la sogs pa rnams dang ldan pa

---

1) P omits //. 2) P sbyor ba. 3) P rim pa. 4) P omits stobs.
5) P zhe. 6) P 'chang.

ni yongs su 'dzin pa la rag lus pas na[1] (C.235a) *gzhan gyi sgra'o* // *gzhan las* zhes bya ba ni yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas la sogs pa ste /

de tshe chos kyi rgyun[2] la ni //
sangs rgyas rnams la zhi gnas dang //
ye shes yangs pa thob bya'i phyir //
gdams ngag rgya chen rnyed par 'gyur //[3] (97)

zhes bya ba lta bu'o zhes 'dod do //[4]

4.6 Bodhisattvapiṭaka (98) (D.152a2, P.176b8, T.51a24, BP.12.16)

da ni phan yon[5] bshad par bya ste / *shā ri'i bu* zhes bya ba la sogs pa skabs 'byed pa yin no // de la mdo gcig gis bshad pa ni *byang chub sems dpa'i sde snod las kyang* zhes bya'o // mdo du ma'i sgo nas bshad pa ni / zla ba snying po dang / klu'i rgyal po rgya mtshos zhus pa las bstan pa'o //

de la dang ba'i phan yon ni / *dang ba mang ba dang* / *'phags pa rnams la lta 'dod pa dang dam pa'i chos nyan par 'dod pa'o* // yid ches pa'i phan yon ni / *las dang las kyi rnam par smin pa la yid ches pa'o* // 'dod pa'i phan yon ni *mi dge ba bcu'i las kyi lam spong zhing* zhes bya ba la sogs (D.232b) pa ste / sdug bsngal gyi rgyu yin pa'i phyir ro // (P.273a) mi dge ba bcu'i (99) mtshan nyid ni 'og nas ston to // bya ba dang bya ba ma yin pa'i ngo bo nyid yin pa las kyang yin la / bde 'gro dang ngan 'gro'i lam yang yin pas las kyi lam mo // (100)

---

1) D omits na. 2) P rgyu. 3) P omits //. 4) P de /. 5) D yan

phan yon dang ldan pa'i dad pa skye ba'i rim pa gang zhe na / dang ba'i dad pa dang ldan pa dag ni yid ches par 'gyur ro // yid ches na 'dod pa'i 'dun pa skye bar 'gyur te / 'di ni go rims so[1] // de'i phyir dad pa brtan par bya ba'i thabs bshad par bya ste / dang po mtshan nyid dang ldan pa'i dge ba'i bshes gnyen la gsol ba gdab par bya ste / slob dpon khyad las bdag byang chub kyi sems bskyed par bya ba'i phyir dad pa'i rtsa ba brtan[2] pa'i thabs nod par 'tshal gyis[3] thugs brtse ba'i slad du bstan du gsol / des kyang rigs kyi bu dkar po'i chos mtha' dag gi rtsa ba dad pa brtan par 'dod pa[4] ni legs so // de'i phyir khyod kyis yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas mtshan sum cu rtsa gnyis dang dpe byad bzang po brgyad cu dang ldan pa yid la gyis shig dang / des khyod lus kyi ba spu ldang pa dang / (C.235b) mchi ma 'khrug pa'i dang ba nyon mongs pa med pa skye bar 'gyur ro // yang na ji ltar thos pa'i rnam par yid la gyis shig dang / yang na 'phags pa'i gang zag gi tshogs kyi rnam pa de ltar yid la gyis shig dang de kho no bzhin du 'gyur ro // de 'ang rtag tu bsgom zhing brtan por bya'o zhes bya ba bstan par bya'o // yang rigs kyi bu khyod kyis[5] 'di lta bu'i rgyu yid ches par bya ste / dkar po'i chos mtha' dag las skyes pa rigs kyi bu de bzhin gshegs pa'i sku ni chos kyi sku ste bsod nams brgya las skyes pa'o[6] (102) zhes bya ba la sogs pa 'og nas 'byung ba ltar[7] yid ches pa'i dad pa bskyed par bya'o // de'i phyir khyod kyis sku 'di lta bu la 'dod pa bskyed de thop pa don du gnyer bar bya'o // mi dge ba mtha' dag

---

1) P rim mo. 2) C, D brten. 3) C, D gyi. 4) P 'dod pa gsum.
5) P kyi. 6) P pa'o // 7) D lhar.

spang par bya'o // 'khor ba'i phung po lnga'i sdug bsngal shes par bya'o // 'phags pa'i lam yan lag brgyad (P.273b) pa bsgom par bya'o // mya ngan las 'das pa thob par bya'o zhes bstan nas / de dag kyang de kho na bzhin du bsgoms pas (D.233a) mi phyed pa dang ldan pa (103) ni dad pa'i rtsa ba brtan pa zhes bya'o // de'i phyir dang por dge ba'i bshes gnyen sten[1] par byed pa ni *dad pa can de dge spyod dang bram ze* zhes bya ba la sogs pa'o // de la *yang dag par song ba* ni 'bras bu thob pa de'i rgyu ni *mang du thos pa dang / thos pa la brtson pa* ni lung len pa'i dge ba'i bshes gnyen no // *tshul bzhin yid la byed pa* ni / bsgrub pa'i dge ba'i bshes gnyen no // 'di dag gis ni so so'i skye bo'i dge ba'i bshes gnyen bstan to // 'phags pa'i gang zag ni *the tshom las brgal ba dang / yang srid zad pa'o* // bla na med pa'i dge ba'i bshes gnyen ni *rdzogs pa'i sangs rgyas so* // gang zag de dag gang zhe na / *byang chub sems dpa' dang sangs rgyas kyi nyan thos* zhes smos so // yid ches pa la sogs pa gsum ni dang po dang bar dang tha mar bstan to // 'di dag gis ni dang po'i dad pa bsgom pa'i thabs bstan to // *las dang rnam par smin pa ston to*[2] zhes bya ba ni yid ches pa bsgom pa'i thabs bstan to // *snod du rig nas* zhes bya ba la sogs pas ni 'dod pa'i dad pa bsgom pa'i thabs (C.236a) te mya ngan las 'das pa thob par 'dod pas bden pa gnyis ldan du bsgom par bya ba (104) ni *stong pa nyid dang* zhes bya ba la sogs pa ste / de la don dam pa'i bden pa bstan pa ni stong pa nyid la sogs pa'o // 'on kyang rkyen nyid 'di pa[3] tsam[4] du yod pas (105) rten cing 'brel par 'byung ba'i gtam mo //

---

1) P bstan. 2) P omits to. 3) P la. 4) P rtsam.

stong pa nyid la sogs pa ni bshad zin to // chos nyid la rgyu 'bras mi 'thad pas na *ma skyes shing ma byung ba'o*(106) // kun du brtags[1] pas med pas na bdag la sogs pa med pa ste / nga rgyal ba'i phyir *bdag go* // zhum pa'i phyir *sems can no*(107) // 'tsho ba'i phyir *srog go* //(108) 'byung zhing 'jigs pas *gang zag go* // rgyu rkyen tshogs pa las 'bras (P.274a) bu 'byung bas *rten cing 'brel par 'byung ba'o* //(109) ji ltar thos pa bzhin bsgrub pas *chags pa med par 'jug* ces bya ba la sogs pa gsungs te / chags pa ni dngos por zhen pa'o // lhag par zhen pa'i gnas yin pas phung po la sogs pa smos te / spungs pa'i phyir *phung po'o* // rigs (D.233b) kyi don yin pas *khams so* // skye ba'i sgo yin pas *skye mched do* //(110) de dag kyang chad pa'i gnas spangs pa *rang bzhin gyis* zhes bya ste / ngo bo nyid kyis stong pa'i phyir ro // 'o na thob par[2] bya ba med do zhe na / *sangs rgyas kyi ye shes tshol* zhes bya ba ste / stong pa nyid bsgom pa ni sgom pa[3] rnams kyi dam pa yin pas / des mya ngan las 'das pa 'gog pa thob par 'gyur te /

sgom pa rnam par mi sgom pa'i //
sgom pa dam pa 'dod pa ste //
thob par lta ba med rnams kyi //
thob par yang ni dam par 'dod //(111)[4]

ces 'chad pa lta bu'o // stong pa nyid de yang thabs kyis yongs su zin pas bstan pa ni *bag yod pa la gzhol ba yin no* zhes bya'o // de nyid bshad pa ni / *dbang po sdom pa* zhes bya ba la sogs pa'o // de'i phyir 'og nas kyang / thabs dang bral ba'i shes rab ni 'ching bar bshad do //

---

1) P brtag. 2) P omits par. 3) P omits ni sgom pa. 4) P omits //

4.7 Candragarbhaparivarta[112]

(D.152b1, P.177a8, T.51b8, BP.13.25)

da ni mdo du ma'i sgo nas dad pa'i phan yon bstan pa'i phyir / *zla ba'i snying po'i le'u las kyang* zhes bya ba la sogs pa gsungs te / dang ba'i phan yon (C.236b) ni / *dper na yid bzhin gyi nor bu rin po che dper brjod pa bzhin no* zhes gsungs te / sngar bshad pa'i yon tan rnams thob par byed pa'i phyir ro //

4.8 Sāgaranāgarājaparipṛcchā[113] (D.152b2, P.177b1, T.-, BP.14.3)

yid ches pa dang 'dod pa'i phan yon spyir bstan pa ni / *mos pa'i stobs* zhes bya ste / mos pa ni nges par 'dzin pa'o[113b] // gang la mos pa zhe na / yid ches pas ni *las kyi rnam par smin pa la 'jug pa'o* // 'dod pas ni *byang chub kyi sems mi 'dor 'ba* la sogs pa ste / byang chub kyi sems ni smon pa dang ldan pa'o // *yi dam*[1] *la brtan*[2] *pa* ni 'jug pa'i sdom pa'o[3] // ji ltar yi dam[4] la brtan[5] zhe na / sdom pa'i tshul khrims kyis ni *mi dge ba'i* (P.274b) *chos thams cad spong ba'o* // sems can gyi don byed pas ni *nyes par byas pa thams cad bzod pa'o* // *ldan pa* zhes bya ba ni thams cad la sbyar bar bya ste / thob par 'gyur zhes bya ba tshig gi lhag pa'o //

kha cig sngar bshad pa'i dad pa dang ldan pa ni dkon te / dkon

---

1) P yid dam. 2) C, D brten. 3) P po'o. 4) P yid dam.
5) C, D brten.

pa'i dpe rin po che bzhin no // dad pa'i mtshan nyid tshul gzhan gyis bshad pa ni *mos pa'i stobs* la sogs pa'o // mos pa ni theg pa chen po'o // (D.234a) *'jug pa* ni yid ches pa bsgom pa'o // *mi 'dor ba* ni mi gtong ba'o //[1] *brten*[2] *pa* ni mi g-yo ba'o // *spangs pa* ni 'dor ba'o // bzod pa ni len pa'o zhes kyang 'chad do //

4.9 Tathāgataguṇajñānācintyaviṣayāvatāranirdeśasūtra[114]

(D.152b3, P.177b3, T.51b10, BP.14.11)

da ni sngar bshad pa'i dad pa'i yul gzhan bstan[3] pa'i phyir *chos thams cad* ces bya ba la sogs pa gsungs te 'bras bu thob par 'dod pas na sems dpa'o // nyan thos dang rang sangs rgyas kyi theg pa las / khyad zhugs pas na *sems dpa' chen po'o* // yon tan gyi[4] bye brag ni gnas skabs kyi stobs kyis drangs na byang chub kyi sems brtan par 'gyur ba la bya'o // de la 'dod pa'i dad pa'i yul bstan pa ni / *chos thams cad* ces bya ba la sogs pa ste / chos thams cad ni bden pa bzhi'o // de la 'gog pa ni / gnyen po med pa ste / gdul bar mi nus pa'i phyir ro // lam gyi bden pa dag ni /[5] *ma 'gags pa ste* gong nas gong du ye shes skye ba'i phyir ro // de dag kyang spang bya yin pa'i phyir 'gog pa kho na'o // ma yin te skyes pa'i lam gtsor byed pa'i phyir ro // sdug bsngal (C.237a) dang kun 'byung dag ni log pa'i shes pa las byung bas 'khrul pa yin pas bden pa *brjod du med pa'o* //

---

1) P omits //. 2) D brten. 3) D brtan. 4) P omits gyi.
5) P omits /.

la la na re *yon tan gyi bye brag* ni mdo nyid gtsor byas pa la'o // chos ni phyi nang gi dngos po thams cad do // chos kyi rang bzhin stong pa nyid ni dngos pos sgyur[1] bar mi nus pas *gnyen po med pa'o* // gcig dang du ma dang bral ba la sogs pa *ma skyes pa'o* //(115) chos can med pa la chos kyi mtshan nyid mi 'thad pas *ma 'gags pa'o* // kun rdzob dang don dam pa ni gcig dang tha dad pa mi (P.275a) 'thad pas *brjod du med pa'o* //(116) des na 'gog pa'i ngo bo nyid gtsor bstan to zhes 'grel pa gzhan 'dod do //[2]

da ni sngar bshad pa'i dang ba'i dad pa'i yul de nyid phrin las kyi yon tan brtsams pa ni / *lhun gyis grub cing* zhes bya ba la sogs pa'o // de la mi rtog[3] pa'i phrin las ni lhun gyis grub cing rnam par mi rtog pa zhes gsungs pa ste / *spyod pa* ni thugs dang gsung gi phrin las rnams so // *spyod lam* ni rnam pa bzhi ste /[4] bzhugs pa dang / bzhengs pa dang / gzims pa dang / 'chag pa ste gnas skabs (D.234b) bzhir don mdzad pas na phrin las so // *bya ba* ni gzhan don 'ba' zhig pa la bya ste / rang gi don mdzad zin pa'i phyir ro // rang gi don ji ltar mdzad ce na / bden mod kyi 'on kyang rgyal po lta bu sems bskyed pa'i phyir ro // phrin[5] las de dag kyang gdul bya ma lus pa'i bya ba yin pas na khyab pa ste /

sangs rgyas mdzad pa rgya che'i phyir //
khyab pa zhes ni rab tu brjod //(117)

ce'o // phrin[6] las dag kyang gang du mdzad ce na / *gnas* zhes smos te / sprul pa bzhugs pa'i rten yin pa'i phyir ro // phrin[7]

---

1) P bsgyur. 2) P de /. 3) P rnyeg. 4) C, D omits /.
5) P 'phrin. 6) P 'phrin. 7) P spin.

kyang gcig tu zad dam zhe na ma yin te / gdul bya'i bsam pa'i dbang gis[1] sna thshogs ba dang / mi zad pa ste

phrin[2] las zad pa med pas na /

rtag pa nyid du mngon par brjod //[118]

ces bya ba'i tshul gyis na / *'dzam*[3] *bu'i gling gi rdul* zhes bya ba la sogs pa gsungs so // dus thams cad pa'i phrin las ni / *seng ge 'bangs bzangs*[119] zhes bya (C.237b) ba la sogs pa gsungs te[120] / gzhan gyi bsam pa'i dbang gis gzhan du sprul pa dang / de yang 'das pa'i dus dpag tu med pa'i snga rol nas *shā kya thub pa mngon par sangs rgyas nas bstan pa* dang / de'i[4] dus las bzhengs pas na da ltar bstan pa dang rnam pa gsum du *mos na*[5] zhes bya ba ni /[6] mdo rnam pa gsum yin no // de la *seng ge 'bangs bzangs* zhes bya ba ni rgyal po seng ge'i bu'i ming ngo // *rtogs pa brjod pa* ni sdon gyi tshul lo // *sems can yongs su smin par bya ba* ni / sha'i phyir 'khor la sogs pa la (P.275b) btags[7] pa la bstan[8] pas so // *mar me mdzad*[121] ni bskal pa grangs med pa gsum gyi grangs med pa gnyis pa'i tha mar bsnyen bkur ba'i yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas kyi ming ngo // *bzung*[9] *ste* zhes bya ba ni de las lung bstan pa thob nas so // sangs rgyas gcig gis mkhyen pas na *sangs rgyas kyi yul lo* // *shā kya* zhes bya ba ni mas dben gyi chung ma blangs pa las btags pa'i ming ngo // *bsad pa* zhes bya ba ni shi ba'i ming gi rnam grangs te 'tsho ba dang bral zhes bya ba'i don te / *bstan pa* zhes bya ba ni bden pa mthong pa'i gang zag rnams rgyal po 'bags

---

1) P gi. 2) P omits phrin. 3) P dzam. 4) C, D de'ang. 5) P na /. 6) P omits /. 7) P brtags. 8) D brtan. 9) C. D bzang

skyes pos bsad par bstan pa'o // (D.235a) *smin par byas pa* ni skyo ba bskyed pa'i phyir ro //

4.11 Colophon

mdo kun las btus[1] pa'i bshad pa lung gi tshad mas sbyar ba las / dad pa rnyed par dka' ba'i gtam brjod pa ste[2] bzhi pa'o //

dad pa rnyed par dka' ba bstan zin to //

Notes

(1) Skt.:śraddhā. See Mizuno (1978), pp.593-601, Fujita (1976), pp.586-618, Mochizuki (1980), pp.10-16.

(2) The Thema on "cittotpāda" is treated in the next chapter of SS. Dr.Bhikkhu Pāsādika refers to Lindtner (1982), p.228, n.5 and RĀ 1.5 (Hahn (1982), pp.2-3, Tib.:Samten (1990), p.13, Eng.:Tucci (1934), p.309.9-12, Ger.:Frauwallner (1994), p.209.10-13, Dan.:Lindtner (1991), p.19.16-19, Jap.:Uryuzu (1974), pp.233.11-234.1, Kitabatake (1988), p.3.3-4) in his revised translation. See also Śik., Bendall (1977), p.2.13-14 (Vaidya (1961), p.1.7-8, Eng.:Joshi (1965), pp.10.5-11.3, cf. Asano (1991), pp.27.17-28.25).

(3) Cf. Śraddhābalādhānasūtra, Tib.(P), no.867, Tsu 40b8-41a1 (Tib.(D), no.201, Tsha 38b5-6, Chin. (T), no.305, p.946b6-7):

sangs rgyas bye ba khrag khrig brgya stong mang po la bsnyen bkur byas pa'i sems can de dag chos kyi rnam grangs 'di thos par 'gyur zhing thos nas kyang mos par 'gyur ro //

(4) Cf. SN, vol.2, p.69.21-22:

idha gahapati ariya-sāvako Buddhe aveccappasādena samannāgato hoti //

---

1) P btud. 2) P ste /.

See Fujita (1952), pp.85-88, Fujita (1970), pp.592.17, 608.6-13, Fujita (1992), pp.111.14-114.9, Mochizuki (1980), pp.58-60.

(5) SU, Jaini (1979), p.38.19 (Tib. (P), Tha 77b2-3, ŚM, Tib. (P), Ta 153b4 Jap.:Isoda (1922), p.28.5-6):

adhimuktiḥ śraddhā-chandau saṃpratyayâbhilāṣa-lakṣaṇau.

(6) TŚBh, Lévi (1925), p.26.24-25 (Mimaki (1989), D 11a6 and I 20.2-3 Tripāṭhī (1984), pp.77.14-78.2, Tib.:Teramoto (1977), pp.33.18-34.3, Fr.: Lévi (1932), p.86.23-25, Eng.:Chatterjee (1980), p.66.20-23, Ger.: Jacobi (1932), pp.27.30-28.2, Jap.:Ui (1952), p.63a14-15, Yamaguchi (1953), p.264.12-13, Teramoto (1977), p.65.6-7, Aramaki (1976), pp.94.15-95.3):

tatra śraddhā karma-phala-satya-ratneṣv abhisaṃpratyayaḥ prasādhaś cetaso 'bhilāṣaḥ /

AKBh, Pradhan (1967), p.55.6-7 (Tib.:Stcherbatsky (1970), p.138.15-17, Chi. (T), no.158, p.19b2-4, no.1559, p.178.23-24, Fr.:la Vallée Poussin (1971), t.1, pp.156.21-157.2, Eng.:Pruden (1988), vol.1, p.191.5-7, Jap.:Sakurabe (1969), p.283.8-9):

tatra śraddhā cetaaḥ prasādhaḥ / satya-ratna-karma-phalâbhisaṃ-pratyaya ity apare /

Cf. AAP, Tib. (D), Taipei ed., 611.5 (Chin. (T), p.982a28-b1, Jap.: Sakurabe (1975), p.139.20-22), PSP, Tib. Dantinne (1980), p.135.23-25 (Eng.:Anacker (1986), p.67.16-18, Fr.:Dantinne (1980), p.11.1-5, Jap.:Shimokawabe (1976), p.9.4-5). See also Takasaki (1988), pp.266-271.

(7) Tib. (P), no.760 (3), Chin. (T), no.310 (3), 312? But I have not yet been able to identify this passage there.

(8) See chapter 3 of SS and RA (Mochizuki (1994), pp.9-20).

(9) In this chapter Ratnākaraśānti classifies the sūtras, which are cited by Nāgārjuna, under four topics of Trust:

[1] action (byed pa): Tathāgataguhyasūtra, [2] object (yul): Vimatisamudghātasūtra and Tathāgataguṇajñānācintyaviṣayāvatāra-nirdeśa, [3] nature (ngo bo nyid): Śraddhābalādhānasūtra, [4] benefit (phan yon): Bodhisattvapiṭaka, Candragarbhaparivarta and Sāgaranāgarājaparipṛcchā.

(10) Cf. AAP, Tib. (D), Taipei ed., 611.5-7 (Chin. (T), p.982b1-2, Jap.:

Sakurabe (1975) , p.139.23-25) :

dper na chu dang bar byed pa'i nor bu mtsho'i nang du bcug na / rdzab kyi rnyog pa thams cad bstal nas chu gsal bar byed pa de bzhin du.

(10b) AVS-nibandhana, Samtani (1971) , p.162.5-6 (Jap. : Honjo (1989) , p.91.4-6) :

samantād utpadyate 'smād ity arthaḥ / duḥkhasya samudayo duḥkha-samudayaḥ, duḥkhasya hetur ity arthaḥ /

(11) Skt. : mātsarya-dauḥśīlyādi. See AAV, Amano (1986), p.79.22 (Jap. : Amano (1972) , p.187.8) .

(12) Mvy, Sakaki (1981), no.2844 (Fukuda (1989), no.2848) : muktatyāgaḥ.

(13) AKVy, Wogihara (1971b) , p.435.6 (Law (1957) , p.113.2-3, Śastri (1987) , p.745.23-24) :

uttamârthasya prāptir arhattvaṃ nirvāṇasya vā prāptiḥ. tasmai prāptaye dānaṃ.

See Matsunami (1990) , p.44.

(13b) Skt. : ṣaṭ-pāramitāḥ.

〔1〕dāna-pāramitā, 〔2〕śīla-pāramitā, 〔3〕kṣānti-pāramitā, 〔4〕vīrya-pāramitā, 〔5〕dhyāna-pāramitā, 〔6〕prajñā-pāramitā.

(14) Cf. MSA Lévi (1904) , p.129.9 (Bagchi (1970) , p.125.7, Śastri (1985) , p.125.8, Eng.:Thurman (1979) , p.258.1-2, Limaye (1992) , p.370.9-10, Fr. : Lévi (1911) , p.224.7-8, Jap. : Ui (1961) , p.408.2-3) :

dānaṃ dadatā dānaṃ ca dāna-phalṃ ca tan mayā satveṣu dattaṃ /

(15) Mvy, Sakaki (1981) , no.2845 (Fukuda (1989) , no.2849) :

pratatapāṇiḥ.

(16) Mvy, Sakaki (1981) , no.2846 (Fukuda (1989) , no.2850) :

vyavasargarataḥ.

(17) ŚBh, Shukla (1973), p.154.9-10 (Shomonji kenkyukai (1990), p.36.8-9, Tib. (P), Wi 74a2-3, Chin. (T), p.421.15-16, Jap. : Shomonji kenkyukai (1990), p.37.9-10 :

pūrvam eva dānāt sumanā dadaṃś cittaṃ prasādayati dattvā vāvipratisārī bhavati /

(18) Mvy, Sakaki (1981), no.2847 (Fukuda (1989) , no.2851 : yāyajūkaḥ. In SS here comes *mchod sbyin byed pa'i ngang tshul can.*

(19) Mvy, Sakaki (1981) , no.2848 (Fukuda (1989) , no.2852) :

dāna-saṃvibhāga-rataḥ.

(20) Cf. BSBh, Wogihara (1971) , p.132.14-16 (Dutt (1978) , p.92.3-5, Tib. (P) , Shi 82b1-2, Chi. (T) , p.509c6-9, Jap. : Ui (1961b , p.150.3-4) :

yad bodhisattvaḥ svakaṃ vā paraṃ vā samādāpya deya-vastu sva-bhṛtyeṣu mātā-pitṛ-putra-dāra-dāsī-dāsa-karma-kara-pauruṣeya-mitrâmātya-jñāti-sālohiteṣv anuprayacchati.

(20b) Cf. BBh, Wogihara (1971), pp.132.24-133.2 (Dutt (1978), p.92.11-15, Tib. (P) , Shi 82b5-7, Chi. (T) , p.509c16-20) :

aniśrita-dānatā viśada-dānatā mudita-dānatā svabhīkṣṇa-dānātā pātra-dānatā apātra-dānatā sarva-dānatā sarvatra-dānatā sarva-kāla-dānatā anavadya-dānatā sattva-vastu-dānatā deśa-vastu-dānatā dhana-dhānya-vastu-dānatā. itīdaṃ trayo-daśākāraṃ dānaṃ bodhisattvasya sarvākāram ity ucyate.

(21) See note (16). Cf. Mvy, Sakaki (1981), no.2866 (Fukuda (1989), no. 2870) : kratuḥ.

(22) MSA 17.59, Lévi (1904) , p.130.10-11 (Bagchi (1970) , p.126.8, Śastri (1985) , p.126.15, Eng. : Thurman (1979) , p.259.21-22, Limaye (1992) , p.373.7-9, Fr. : Lévi (1911) , p.222.22-23, Jap. : Ui (1961) , p.411.1-2) :

nirlepaṃ pratikāra-vipāka-niḥspṛhatvāt /

(23) SS, [1] yid ches pa, [2] mos pa, [3] rtogs pa.

(24) Skt. : ākāṅkṣaṇam. See AAK 4.41, Stcherbatsky (1929) , p.23.9.

(25) SS, [1] som nyi med pa, [2] the tshom mi za, [3] yid gnyis mi za.

(26) I have not been able to identify this verse.

(27) Cf. AKK 1.6cd and AKBh, Pradhan (1967), p.4.10-11 (Ejima (1989), p.5.4-6, Tib. : Stcherbatsky (1970) , p.10.11-15, Chi. (T) , no.1558, p.1c25-27, no.1559, p.162b23-25, Fr. : la Vallée Poussin (1971) , t.1, p.10.1-7 Eng. : Pruden (1988) , vol.1, p.60.18-24, Jap. : Sakurabe (1969) , p.144.1-2) :

utpādātyanta-vighno 'nyo nirodho 'pratisaṃkhyayā //6//

anāgatānāṃdharmāṇāṃ utpādasyātyantavighnabhūto visaṃyogād yo 'nyo nirodhaḥ so 'pratisaṃkhyā-nirodhaḥ /

(28) See note (7) .

(29) RĀ 1.6ab, Hahn (1982) , p.4.1-2 (Tib. : Samten (1990) , p.16.1-2,

Eng. : Tucci (1934) , p.309.17-19, Dan. : Lindtner (1991) , p.19.24-25, Jap. : Uryuzu (1974) , p.234.4-5, Kitabatake (1988) , p.4.1-3) :

chandād dveṣād bhayān mohād yo dharmaṃ nātivartate /

(30) I have not been able to identify this verse.

(31) SS, Tib : Yid gnyis yang dag par 'joms pa'i mdo, Chin. : 破染慧経. See Lindtner (1982) , p.178.28-29. Though this sūtra is cited also in Mahāsūtrasamuccaya by Atīśa four times (Tib. (D) , no.3961, Gi 18a1, 123a7, 127a6, 144a4), I have not been able to identify this sūtra.

(32) Ratnolkhadhāraṇī (Tib. (P) , no.472, Chi. (T) , no.299) . See Śik., Bendall (1977) , p.2.16-17 (Vaidya (1961) , p.4.22-23, Eng. : Bendall (1971), p.3.11-13, Ger. : Winternitz (1930), p.48.23-24, Jap. : Yamazaki (1976) , p.61.14-15, cf. Asano (1991) , p.28.5-6) :

śraddhayamānu jinān jina-dharmmān śraddhyate cari buddha-sutā nām /

bodhi anuttara śraddhayamāno jāyati citta mahā-puruṣāṇām //

(33) See note (6) .

(34) Skt. : anāsrava-skandhaḥ.

〔1〕śīla-skandhaḥ, 〔2〕samādhi-skandhaḥ, 〔3〕prajñā-skandhaḥ, 〔4〕vimukti-skandhaḥ, 〔5〕vimukti-jñāna-darśana-skandhaḥ.

Cf. MPPŚ, Chin. (T) , p.220a8-221b8, Lamotte (1970) , p.1233, n.3 and pp.1349.6-1362.1. In ASaṅ (Chin. (T), p.394b16, cf. Stache-Rosen (1968) , p.102.1-5) four kind of 'skandha' without 'vimuktijñāna-darśanaskandha' is explained as 'dharmaskandha'.

(35) Cf.BBh, Wogihara (1971), p.258.11-13 (Dutt (1978), p.176.12-14, Tib. (P) , Shi 155a8-156a1, Chi. (T) , p.539b9-11) :

yat punaḥ sarva-dharmāṇāṃ eva sarva-nirvacaneṣu yāvad-bhāvikatayā yathāvad-bhāvikatayā ca bhāvabāmayam asaktam avivartyaṃ jñānam. iyam eṣāṃ nirukti-pratisaṃvit.

RGV, Johnston (1950), p.14.8-10 (Eng. : Obermiller (1931), p.138.13-16, Takasaki (1966) , p.173.7-11, Jap. : Takasaki (1989) , p.25.9-11, cf. ibid., 233.6-234.11) :

anena samāsato 'vaivartika-bodhisattva-gaṇa-ratnasya dvābhyām ākārābhyāṃ yathāvad-bhāvikatayā yāvad-bhāvikatayā ca lokottara-jñāna-darśana-viśuddhito 'nuttara-guṇānvitatvam udbhāvitam /

AS, Tib. (D), Ri 102b2-4 (re-Skt., Pradhan (1950), p.17-20, Chin. (T), p.686c27-29, Fr., Rahula (1971), pp.134.41-135.5, ASBh, Tatia (1976), p.98.11-17, Tib. (D), Li 70b4-7 and 235b3-7. see also Yeh (1984), pp.186-194.) :

ji snyed yod pa ni / phung po dang / khams dang / skye mched rnams so // ji lta ba bzhin du yod pa ni / 'phags pa'i bden pa bzhi dang / rnam pa bcu drug dang / de bzhin nyid dang / 'du byed thams cad mi rtag pa dang / 'du byed thams cad sdug bsngal ba dang / chos thams cad bdag med pa dang / mya ngan las 'das pa zhi ba dang / stong pa nyid dang / smon pa med pa dang / mtshan ma med pa'o //

(36) Skt. : ṣaḍ-abhijñāḥ. AKK 7.42ab, AKBh, Pradhan (1967) , p.421.6-9 (Tib. (P) , nGu 69b8-70al, Chin. (T) , no.1558, p.142c23-26, no.1559, 293c23-26, Fr. : la Vallée Poussin (1971) , t.5. pp.97.14-100.3, Eng. : Pruden (1990) , vol.4, p.1157.15-30, cf. Chaudhury (1983) , pp.199.20-200.3) :

〔1〕ṛddhi-viṣayā, 〔2〕divya-śrotram, 〔3〕cetaḥ-paryāyaḥ, 〔4〕pūrva-nivāsānumṛtiḥ, 〔5〕cyuty-upapādaḥ, 〔6〕āsravakṣaya-jñānaḥ.

Cf. ASaṅ, Chin. (T) , p.432b17-19 (Cf. Stache-Rosen (1968) , p.170.4-11), AS Pradhan (1950) , p.97.5-14, (Tib. : Griffiths (1989) , p.315.23, Eng. : ibid., pp.144.31-145.4, Fr. : Rahula (1971) , pp.166.33-167.23, ASBh, Tatia (1976) , p.128.16-25, Griffiths (1989) , p.316.1-11, Eng. : ibid., p.145.5-21) , MSAT, Griffiths (1989) , p.315.20-22 (Eng. : ibid, p.144.27-30, Jap. : Hakamaya (1983) , p.18.15-19) , AAm, Chin. (T) , p.975c22-23 (Skt. : Śāstri (1953) , p.100.10-11) ,

(37) MSA, Lévi (1907), p.143.8-9 (Bagchi (1970), p.137.20-21, Śastri (1985), p.137.26-27, Eng. : Thurman (1979), p.283.18-19, Limaye (1992), p.408.15-17, Fr. : Lévi (1911), p.240.19-20, Jap. : Ui (1961) , p.445.4-5, Hakamaya (1993) , p.321.15-16) :

〔1〕māṃsa-cakṣus, 〔2〕divya-cakṣus, 〔3〕āryaṃ prajñā-cakṣus, 〔4〕dharma-cakṣus, 〔5〕buddha-cakṣus.

Cf. DS 66, Müller, p.14.7 (Namdol (1989), p.35.13-19, Jap. : Hakamaya (1979) , p.22.1-4) , MPPŚ, Chin. (T) , p.305.18-19, Lamotte (1980) , pp.2260.13-2263.16.

(38) See also Kitagawa (1985) , p.25.18-19 and n.34.

(39) MSA, Lévi (1904) , p.188.15 (Bagchi (1970), p.180.4, Śastri (1985), p.183.2, Eng. : Thurman (1979) , p.368.11-12, Limaye (1992) , p.533.17-18, Fr. : Lévi (1911) , p.306.7-8, Jap. : Ui (1961) , p.580.10-11) :

niṣprapañcatvaṃ sarva-vikalpa-prapañcāsamudācārāt /

(40) According to Tib. (D) of SS, BP (Pāsādika (1989) , p.10.15) read "rgya che ba" for "rgyu ba chad pa"

(41) Skt. : āśrayāsiddhaḥ. NP, Dhruva (1968) , p.3.14-15 (Tachikawa (1971) , p.142.1-2, Eng. : ibid., pp.123.35-124.2, Jap. : Ui (1966) , p.327.7-8, Yasumoto (1987) , p.119.14-15) :

dravyam ākāśaṃ guṇāśrayatvād ity ākāśāsattva-vādinaṃ praty āśrayāsiddhaḥ

See also Chi (1984) , p.109.12-17, Pandey (1984) , p.129.

(42) Skt. : ṣaṣṭy-aṅgī. MSA, Lévi (1907) , pp.79.17-81.2 (Bagchi (1970) , pp.78.5-79.5, Śastri (1985) , pp.77.8-78.18, Eng. : Thurman (1979) , pp.161.13-164.6, Limaye (1992) , pp.232.7-234.3, Fr. : Lévi (1911) , pp.143.2-145.20, Jap. : Ui (1961) , pp.259.13-262.6, Hakamaya (1993) , pp.207.10-209.2 und Hakamaya (1973) , pp.3-9) :

〔1〕snigdhā, 〔2〕mṛdukā, 〔3〕manojñā, 〔4〕mano-ramā, 〔5〕śuddhā, 〔6〕vimalā, 〔7〕prabhāsvarā, 〔8〕valguḥ, 〔9〕śravaṇīyāḥ, 〔10〕anelā, 〔11〕kalā, 〔12〕vinītā, 〔13〕akarkaśā, 〔14〕aparuśā 〔15〕suvinītā, 〔16〕karṇa-sukhā, 〔17〕kāya-prahlādana-karī, 〔18〕cittodvilya-karī, 〔19〕hṛdaya-saṃtuṣṭi-karī, 〔20〕prīti-sukha-jananī, 〔21〕niṣparidāhā, 〔22〕ājñeyā, 〔23〕vijñeyā, 〔24〕vispaṣṭā, 〔25〕premaṇīyā, 〔26〕abhinandanīyā, 〔27〕ājñāpanīyā, 〔28〕vijñāpanīyā, 〔29〕yuktā, 〔30〕sahitā, 〔31〕punar-ukta-doṣa-jahā, 〔32〕siṃha-svara-vegā, 〔33〕nāga-svara-śabdhā, 〔34〕megha-svara-ghoṣā, 〔35〕nāgendra-rutā, 〔36〕kinnara-(Mvy : gandharva-) saṃgīti-ghoṣā, 〔37〕kala-viṅka-svara-rutā, 〔38〕brahma-svara-rutā-ravitā, 〔39〕jīvañ-jīvaka-svara-rutā-ravitā, 〔40〕devendra-madhura-nirghoṣā, 〔41〕dundubhi-svarā, 〔42〕anunnatā, 〔43〕anavanatā, 〔44〕sarva-śabdhānupraviṣṭā, 〔45〕apaśabdha-vigatā, 〔46〕avikalā, 〔47〕alīnā, 〔48〕adīnā, 〔49〕pramuditā, 〔50〕prasṛtā, 〔51〕sakhilā, 〔52〕saritā, 〔53〕lalitā, 〔54〕sarva-svara-pūraṇī, 〔55〕sarvendriya- saṃ toṣaṇī, 〔56〕aninditā, 〔57〕acañcalā, 〔58〕acapalā, 〔59〕sarva-

pariṣad-anuravitā, [60] sarvākāra-varopetā.

Cf. Mvy, Sakaki (1981) , no.444-504 (Fukuda (1989) , no.442-503) .

(43) In it is called Guhyakādhipatinirdeśa in MSA. See Lévi (1904) , p.79.15 and n.6 and Hakamaya (1993) , pp.426b20-427a5

(44) Mvy, Sakaki (1981) , no.328 (Fukuda (1989) , no.326) : viśuddha-netra (Tib. : spyan rnam par dag pa) .

(45) Mvy, Sakaki (1981) , no.329 (Fukuda (1989) , no.327) : viśālanetra (Tib. : spyan yangs pa) .

(46) Cf. BBh, Wogihara (1971) , p.90.18-19 (Dutt (1978) , p.63.25-26, Tib. (P) , 58a1-2, Chin. (T) , p.499b9-11, Jap. : Ui (1961) , p.89.6-7) :

tathāgatas triś-kṛtvo rātrau triṣ-kṛtvo divase ṣaṭ-kṛtvo rātrim-divena buddha-cakṣuṣā lokaṃ vyavalokayati.

See also MSA, Lévi (1907) , p.187.13 (Bagchi (1970) , p.179.4, Śastri (1985) , p.182.2, Eng. : Limaye (1992) , p.530.25-26, Fr. : Lévi (1911) , p.304.24-26, Jap. : Ui (1961) , p.578.3-5, Hakamaya (1983) , p.31.1-2).

(47) See note (36) [6] .

(48) See note (37) [1] .

(49) Skt. : anavalokitamūdhtā. See MPPŚ, Chin. (T) , p.219c21, Lamotte (1979) , p.1346.1-3 and n.1.

(50) Skt. : dvātriṃśan-mahāpuruṣa-lakṣaṇāni. See AAK 8.13-17, Stcherbatsky (1929) , pp.35.9-36.12 (Amano (1983) , pp.7.14-8.30, Eng. : Conze (1954), pp.98.20-99.32, Jap. : Mano (1972), pp.252.14-254.14, ŚM, Tib. (P) , Ta 230a3-231b1, AAĀ, Wogihara (1973) , pp.918.25-919.20, Vaidya (1960b) , pp.537.18-538.7) :

[1] cakrāṅka-hasta-pādatā, [2] supratiṣṭhi-pādatā, [3] jāla-vanaddhāṅguli-pāṇi-pādatā, [4] mṛdu-taruṇa-hasta-pādatā, [5] saptocchrayatā, [6] dīrghāṅgulitā, [7] āyata-pārṣṇitā, [8] bṛhad-ṛju-gātratā, [9] ucchaṅkha-pādatā, [10] ūrdhvaṃga-romatā, [11] eṇeya-jaṅghatā, [12] paṭūru-bāhutatā, [13] kośa-gata-vasti-guhyatā, [14] suvarṇa-varṇatatā, [15] ślakṣṇa-cchavitā, [16] pradakṣiṇāvartaika-romatā, [17] ūrṇāṅkita-mukhatā, [18] siṃha-pūrvārdha-kāyatā, [19] susaṃvṛtta-skandhatā, [20] citāntarāṃsatā, [21] rasa-rasāgratā, [22] nyagrodha-parimaṇḍalatā, [23] uṣṇīṣa-śiraṣkatā, [24] prabhūta-jihvatā, [25] brahma-svaratā, [26] siṃha-hanutā, [27] śukla-dantatā, [28]

sama-dantatā, [29] avirala-danta, [30] sama-catvāriṃśad-dantatā, [31] abhinīla-netratā, [32] go-pakṣma-netratā.

Cf. LV VII, Hokazono (1994), pp.484.14-486.5 (Lefman (1902), p.105.8-106.4, Mitra (1980), p.120.10-121.7, Tib. : Foucaux (1847), pp.97.16-98.17, Chi (T), no.187, p.557a13-29, Fr. : Foucaux (1884), pp.95.4-96.11, Jap. : Hokazono (1994), pp.842.18-845.8), AVS, Samtani (1971), pp.54.11-55.2 (Jap. : Honjo (1989), pp.33.20-34.11), BBh, Wogihara (1971), pp.375.9-376.10 (Furusaka (1991), pp.433-458), RGV 3.17-25, Johnston (1950), pp.94.9-95.18 (Eng. : Obermiller (1931), p.263.8-264.15, Takasaki (1966), pp.344.1-347.2, Jap : Takasaki (1989), pp.168.10-170.14), RĀ, 2.76-96, Hahn (1982), pp.66-71 (Tib. : Samten (1970), pp.147-156, Dan. : Lindtner (1991), pp.41-44, Jap. : Uryuzu (1974), pp.264-267, Kitabatake (1988), pp.112-121), DS 83, Müller (1984), pp.18.6-19.4 (Namdol (1988), pp.46.13-49.8), MPPŚ, Chin.(T), p.90b3-91a18 (Fr. : Lamotte (1949), pp.272-279), Mvy, Sakaki (1981), no.235-267 (Fukuda (1989), no.232-265), etc. See Okada (1989, 1991b and 1992) and Honjo (1990) on its tradition.

(51) Skt. aśīty-anuvyañjanāni. See AAK 8.21-32, Stcherbatsky (1929), pp.37.3-38.10 (Amano (1983), pp.9.12-12.5, Eng. : Conze (1954), pp.100.16-102.14, Jap. : Mano (1972), pp.255.7-258.13) and AAĀ, Wogihara (1973), pp.920.21-922.21 (Vaidya (1960b), 539.3-540.18, Okada (1991), pp.615-619) :

[1] tāmran-akhatā, [2] snigdha-nakhatā, [3] tuṅga-nakhatā, [4] vṛttāṅgulitā, [5] citāṅgulitā, [6] anupūrvāṅgulitā, [7] gūḍha-śiratā, [8] nigranthiśiratā, [9] gūḍha-gulphatā, [10] aviṣama-pādatā, [11] siṃha-vikrānta-gāmitā, [12] nāga-vikrānta-gāmitā, [13] haṃsa-vikrānta-gāmitā, [14] vṛṣabha-vikrānta-gāmitā, [15] pradakṣina-gāmitā, [16] cāru-gāmitā, [17] avakra-gāmitā, [18] vṛtta-gātratā, [19] mṛṣṭa-gātratā, [20] anupūrva-gātratā, [21] śuci-gātratā, [22] mṛdu-gātratā, [23] viśuddha-gātratā, [24] paripūrṇa-vyañjanatā, [25] pṛthucāru-maṇḍala-gātratā, [26] sama-kramatā, [27] viśuddha-netratā, [28] sukumāra-gātratā, [29] adīna-gātratā, [30] utsada-gātratā, [31] susaṃhatana-gātratā, [32] suvibhaktāṅga-pratyaṅgatā, [33] vitimira-śuddhālokatā, [34] vṛtta-kukṣitā, [35] mṛṣṭa-kukṣitā, [36] abhugna-kukṣitā, [37] akṣāma-kukṣitā,

〔38〕 gambhīra-nābhitā, 〔39〕 pradakṣiṇāvarta-nābhitā, 〔40〕 samanta-prāsādikatā, 〔41〕 śuci-samudācāratā, 〔42〕 vyapagata-tila-kāla-gātratā, 〔43〕 tūla-sadṛśa-sukumāra-pāṇitā, 〔44〕 snigha-pāṇi-lekhatā, 〔45〕 gambhīra-pāṇi-lekhatā, 〔46〕 āyata-pāṇi-lekhatā, 〔47〕 nātyāyata-vacanatā, 〔48〕 bimba-pratibimbopa-mauṣṭhatā, 〔49〕 mṛdu-jihvatā, 〔50〕 tanu-jihvatā, 〔51〕 rakta-jihvatā, 〔52〕 megha-garjita-ghoṣatā, 〔53〕 madhura-cāru-mañjusvaratā, 〔54〕 vṛtta-daṃṣṭratā, 〔55〕 tīkṣṇa-daṃṣṭratā, 〔56〕 śukla-daṃṣṭratā, 〔57〕 sama-daṃṣṭratā, 〔58〕 anupūrva-daṃṣṭratā, 〔59〕 tuṅga-nāsatā, 〔60〕 śuci-nāsatā, 〔61〕 viśāla-nayanatā, 〔62〕 cita-pakṣmatā, 〔63〕 sitāsita-kamala-dala-nayanatā, 〔64〕 āyata-bhrūkatā, 〔65〕 ślakṣṇa-bhrūkatā, 〔66〕 susnigdha-bhrūkatā, 〔67〕 sama-roma-bhrūkatā, 〔68〕 pīnāyata-bhujatā, 〔69〕 sama-karṇatā, 〔70〕 anupahata-karṇendriyatā, 〔71〕 aparimlāna-lalāṭatā, 〔72〕 pṛthu-lalāṭatā, 〔73〕 suparipūrṇottamāṅgatā, 〔74〕 bhramara-sadṛśa-keśatā, 〔75〕 cita-keśatā, 〔76〕 ślakṣṇa-keśatā, 〔77〕 asaṃluḍita-keśatā, 〔78〕 aparuṣa-keśatā, 〔79〕 surabhi-keśatā, 〔80〕 śrī-vatsa-svastika-nandyāvarta-lalita-pāṇi-pādatalatā.

Cf. LV VII, Hokazono (1994), pp.486.12-488.18 (Lefman (1902), pp.106.11--107.14, Mitra (1980), p.121.15-122.21, Tib. : Foucaux (1847), pp.99.2-100.19, Chi. (T), no.187, p.557b5-c10, Fr. : Foucaux (1884), pp.96-99, Jap. : Hokazono (1994), pp.843.15-844.19), AVS, Samtani (1971), pp.63.1-66.4 (Jap. : Honjo (1989), pp.36.1-37.8), DS 84, Müller (1984), pp.19.4-20.13 (Namdol (1988), pp.49.8-55.3), Mvy, Sakaki (1981), no.268-349 (Fukuda (1989), no.266-347). See Okada (1991) and Honjo (1990).

(52) Tib. : gsung dbyangs yan lag lnga (Rigzig (1986), p.453, 『蔵漢大辞典 下』, p.3015) :

〔1〕 'brug ltar zab pa, 〔2〕 snyan zhing 'jebs la rna bar snyan pa, 〔3〕 yid du 'ong zhing dga' bar byed pa, 〔4〕 rnam par gsal zhing rnam par rig par byed pa, 〔5〕 mnyan 'os shing mi mthun pa med pa.

(53) Skt. : saptatriṃśad bodhipākṣikā dharmāḥ. DS 43-50, Müller (1984), pp.9.8-11.4, 44.3-46.11 (Namdol (1988), pp.23.14-27.12, Jap. : Hakamaya (1979), pp.16.12-18.5) :

〔1-4〕 catvāri smṛty-upasthānāni, (i) kāya-smṛty-upasthānam, (ii) vedanā-smṛty-upasthānam, (iii) citta-smṛty-upasthānam, (iv) dharma-smṛty-upasthānam, 〔5-8〕 catvāri samyak-prahāṇāni, (i) utpannānāṃ kuśala-mūlānāṃ saṃrakṣaṇam, (ii) anutpannānāṃ samutpādaḥ,(iii) utpannānām akuśalānāṃ dharmāṇāṃ prahāṇam, (iv) anutpannānāṃ punar-anutpādaḥ, 〔9-12〕 catvāri ṛddhi-pādāḥ, (i) chanda-samādhi-prahāṇāya saṃskāra-samanvāgata ṛddhi-pādaḥ, (ii) citta 〔-samādhi-prahāṇāya saṃskāra-samanvāgata〕 ṛddhi-pādaḥ, (iii) vīrya 〔-samādhi-prahāṇāya saṃskāra-samanvāgata〕 ṛddhi-pādaḥ, (iv) mīmāṃsā-samādhi-prahāṇāya saṃskāra-samanvāgata ṛddhi-pādaḥ, 〔13-17〕 pañcendriyāni, (i) śraddhā, (ii) samādhiḥ, (iii) vīryam, (iv) smṛtiḥ, (v) prajñā, 〔18-22〕 pañca-balāni, (i) śraddhā, (ii) vīryam, (iii) smṛtiḥ, (iv) samādhiḥ, (v) prajñā, 〔23-29〕 sapta-bodhy-aṅgāni, (i) smṛti-saṃbodhyaṅgam, (ii) dharma-pravicaya-saṃbodhyaṅgam, (iii) vīrya-saṃbodhyaṅgam, (iv) prīti-saṃbodhyaṅgam, (v) prasrabdhi-saṃbodhyaṅgam, (vi) samādhi-saṃbodhyaṅgam, (vii) upekṣā-saṃbodhyaṅgam, 〔30-37〕 āryāṣṭāṅgika-mārgaḥ, (i) samyak-dṛṣṭiḥ, (ii) samyak-saṃkalpaḥ, (iii) samyk-vāk, (iv) samak-karmāntaḥ, (v) samyag-ājīvaḥ, (vi) samyag-vyāyāmaḥ, (vii) samyak-smṛtiḥ, (viii) samyak-samādhiḥ.

Cf. AVS, Samtani (1971), pp.28.8-42.13 (Jap. : Honjo (1989) , pp.23.16-29.14) , LV IV, Hokazono (1994) , pp.332.8-334.10 (Lefman (1902) , p.33.11-34.17, Mitra (1980) , pp.36.17-38.6, Tib. : Foucaux (1847) , pp.35.15-37.7, Chin. (T) , no.187, p.544c5-25, Fr. : Foucaux (1988) , pp.34.18-35.34, Jap. : ibid., pp.752.3-753.10) , VM, Waren (1989) , pp.582.30-583.30, AAm, Chin. (T) , p.977a22-c26 (Śāstri (1953) , pp.113-117) . See also Mvy, Sakaki (1981) , no.952-1004 (Fukuda (1989) , no.954-1006) , EncBuddh, vol.3, Fas.2, pp.209b-212a, Lamotte (1970) , pp.1119-1137, Dayal (1978) , pp.80.1-82.32, Shinoda (1988) , pp.2-14, Tanaka (1993) , pp.132-168.

(54) Skt. : catvāry apramāṇāni. MSA, Lévi (1904) , p.121.13 (Bagchi (1970) , p.118.5, Śastri (1985), p.118.8, Eng. : Thurman (1979), p.242.6-7, Limaye (1992) , p.348.11-12, Fr. : Lévi (1911) , p.209.12-13, Jap. : U i (1961) , p.385.4) :

〔1〕 maitrī, 〔2〕 karuṇā, 〔3〕 muditā, 〔4〕 upekṣā.

Cf. ASaṅ, Chin. (T), p.392b7-8 (cf. Stache-Rosen (1968), p.96.21-25), AKBh, Pradhan (1967), p.452.5 (Tib. (P), nGu 89a2, Chin. (T), no.1558, p.150b19, no.1559, pp.301c29-302a1, Fr. : la Vallée Poussin (1971) , t.5, p.196.2, Eng. : Pruden (1990) , p.1264.1-3, Jap. : Sakurabe (1981), p.343.8, cf. Chaudhury (1983), pp.218-219) , AS, Pradhan (1950) , pp.94.20-95.3 (Tib. : Griffiths (1989) , pp.303.27-304.6, Eng. : ibid., p.130.20-28, Fr. : Rahula (1971) , pp.163.28-164.12, ASBh, Tatia (1976), p.124.12-17, Griffiths (1989) , p.304.7-12, Eng. : ibid., pp.130.29-39) , MSAT, Griffiths (1989) , p.303.18-26 (Eng. : ibid, p.130.10-19, Jap. : Hakamaya (1983), p.10.6-18), Sat, Chin. (T), p.336b7 (re-Skt. : Sastri (1975), p.389.20, Eng.:Sastri (1978), p.369.27-28, cf. Fukuhara (1969), pp.314-316) .

(55) Skt. : aṣṭau vimokṣāḥ. See SU, Jaini (1979) , pp.174.28-175.2 (Tib. (P), Tha 228a6-8), AAV, Amano (1983), p.4.2-5 (Jap. : Mano (1972), p.248.15-16) :

〔1〕 rūpī rūpāṇi paśyati, 〔2〕 adhyātmam arūpa-saṃjñī bahirdhā rūpāṇi paśyati, 〔3〕 śubhaṃ vimokṣaṃ kāyena sākṣātkṛtvopasaṃpadya viharati, 〔4〕 ākāśānantyāyatanam, 〔5〕 vijñānānantyāyatanam, 〔6〕 ākiṃcanyāyatanam, 〔7〕 naivasaṃjñā-nāsaṃjñāyatanam, 〔8〕 saṃjñā-vedita-nirodham.

Cf. ASaṅ, Chin. (T) , p.443a26-b6 (cf. Stache-Rosen (1968) , pp.193.36-194.23), AKBh, Pradhan (1967), pp.454.22-455.3 (Tib. (P), nGu 90b6-8, Chin. (T), no.1558, p.151b1-4, no.1559, p.302c15-19, Fr.:la Vallée Poussin (1971) , t.5, pp.203.15-205.6, Eng. : Pruden (1990) , p.1271.7-13, Jap. : Sakurabe (1981) , pp.360.9-365.5, cf. Chaudhury (1983) , pp.219-220) , AS, Pradhan (1950) , 95.4-19 (Tib. : Griffiths (1989) , pp.307.18-308.9, Eng. : ibid., pp.133.41-134.38, Fr. : Rahula (1971) , pp.164.12-165.15, ASBh, Tatia (1976) , pp.124.18-125.20, Griffiths (1989), pp.308.16-309.1, Eng. : ibid., pp.134.39-136.1), MSAT, Griffiths (1989), pp.305.10-28 (Eng. : ibid, pp.132.11-30, Jap. : Hakamaya (1983), pp.11.6-12.11), DS 59, Müller (1984), pp.12.11-13.2 (Namdol (1988), pp.31.11-32.12, Jap. : Hakamaya (1979), pp.19.25-20.9), Sat, Chin. (T), p.339a17-340a29 (re-Skt. : Sastri (1975), pp.400-404, Eng. : Sasri (1978), pp.379-384, cf. Fukuhara (1969), pp.318-319).

(56) Skt. : navānupūrva-samāpattiḥ (Hirakawa (1978), p.105b). See DN,

vol.3, p.266.6-17 :

〔1〕paṭhamajjhānaṃ samāpannassa kāma-saññā niruddhā hoti, 〔2〕dutiyajjhānaṃ samāpannassa vitakka-vicārā niruddhā honti, 〔3〕tatiyajjhānaṃ samāpannassa pīti niruddhā hoti, 〔4〕catutthaj-jhānaṃ samāpannassa assāsa-passāsā niruddhā honti, 〔5〕ākāsānañcāyatanaṃ samāpannassa rūpa-saññā niruddhā hoti, 〔6〕viññāṇcāyatanaṃ samāpannassa ākāsānañcātayana-saññā niruddhā hoti, 〔7〕ākiñcaññāyatanaṃ samāpannassa viññāṇañcāyatana-saññā niruddhā hoti, 〔8〕nevasaññā-nāsaññāyatanaṃ samāpannassa ākiñcaññāyatana-saññāniruddhā hoti, 〔9〕saññā-vedayita-nirodhaṃ samāpannassa saññā ca vedan ā ca niruddhā honti.

Cf. Sat, Chin. (T) , p.340b18-346b13 (Skt. : Sastri (1975) , pp.405-428, Eng. : Sastri (1978), pp.385-409, cf. Fukuhara (1969), pp.320-324). See also Pāsādika (1989b) , p.36.1-9, (Fujita (1984) , p.5, Honjo (1984) , pp.18-19, Jap. : Honjo (1983) , p.4.23-30) .

(57) Skt. : daśa-kṛtsnāyatanāni. See SU, Jaini (1079) , p.176.1-5 (Tib. (P), Tha 229a6-b1), AAV, Amano (1983) , p.4.6-7 (Jap. : Mano (1972) , p.248.17) :

〔1〕pṛthivī, 〔2〕āpas, 〔3〕tejas, 〔4〕vāyu, 〔5〕nīlam, 〔6〕pītam, 〔7〕lohitam, 〔8〕avadātam, 〔9〕vijñānam, 〔10〕ākāśam.

Cf. ASaṅ, Chin. (T) , p.447a25-b11 (cf. Stache-Rosen (1968) , p.203) , AKBh, Pradhan (1967), p.457.13-15 (Tib. (P) , nGu 92b1-2, Chin. (T), no.1558, p.151c24-25, no.1559, p.303b13-14, Fr. : la Vallée Poussin (1971) , t.5, p.214.3-5, Eng. : Pruden (1990) , p.1277.19-22, Jap. : Sakurabe (1981), p.373.6-8, cf. Chaudhury (1983), p.221), AS, Pradhan (1950) , p.96.9-14 (Fr. : Rahula (1971) , pp.165.16-166.4, ASBh, Tatia (1976), p.127.16-23), MSAT, (Jap. : Hakamaya (1983), p.14.8-13), Sat, Chin. (T), p.346b15-c22 (re-Skt. : Sastri (1975), pp.428-430, Eng. : Sastri (1978), pp.409-450, cf. Fukuhara (1969), pp.324.16-325.8), VM, Waren (1989), p.89.29-31

(58) Skt. : aṣṭābhibhvāyatanāni. See SU, Jaini (1979) , p.175.10-24 (Tib. (P) , Tha 228b4-229a2), AAV, Amano (1983), p.4.7-11 (Jap. : Mano (1972), pp.248.17-249.2) :

〔1〕adhyātma-rūpa-saṃjñī bahirdhā rūpāṇi paśyati parīttāni

suvarṇa-durvarṇāni tāni khalu rūpāṇy abhibhūya jānāty abhibhūya paśyati evaṃ saṃjñi ca bhavati, 〔2〕adhyātma-rūpa-saṃjñī bahirdhā rūpāṇi paśyati adhimātrāṇi. . ., 〔3〕adhyātmam arūpa-saṃjñī. . . parittāni. . ., 〔4〕adhyātmam arūpa-saṃjñī. . . adhimāṇi. . ., 〔5〕adhyātman arūpa-saṃjñī bahirdhā nīla. . ., 〔6〕. . . pīta. . ., 〔7〕. . . lohita. . ., 〔8〕. . . avadāta. . .

Cf. ASaṅ, Chin. (T), p.445b20-c18 (cf. Stache-Rosen (1968), pp.197-198), AKBh, Pradhan (1967), p.457.1-5 (Tib.(P), nGu 92a3-5, Chin. (T), (1971), t.5, pp.211-222, Eng. : Pruden (1990), p.1276.10-23, Jap. : Sakurabe (1981), pp.370.14-371.4), AS, Pradhan (1950), p.97.1-8 (Fr. : Rahula (1971), p.165.1-15, ASBh, Tatia (1976), pp.125.21-126.27), MSAT, Griffiths (1989), pp.305.28-307.16 (Eng. : ibid., pp.132.31-133.40, Jap. : Hakamaya (1983), pp.12.12-14.7), Sat, Chin. (T), p.346b2-9 (re-Skt. : Sastri (1975), p.405, Eng. : Sastri (1978), p.385, cf. Fukuhara (1969), pp.319.14-320.7). See also Bechert (1994), p.122b.

(59) Skt. : araṇā. See AAK 8.7 Stcherbatsky (1929), p.34.11-12 (Eng. : Conze (1954), p.97.16-23, AAV, Amano (1983), p.4.11-12 and p.5.19-25, Jap. : Mano (1972), p.249.2-3 and p.250.10-14) :

śrāvakasyāraṇā-dṛṣṭer nṛ-kleśa-parihāritā /
tak kleśa-srota-ucchittyai grāmādiṣu jināraṇeti //

Cf. AKBh, Pradhan (1967), p.417.2-7 (Griffiths (1989), p.311.9-14, Tib. (P), nGu 67b2-5, Chin. (T), no.1558, pp.141c25-142a6, Fr. : la Vallée Poussin (1971), t.5, pp.86.7-87.5, Eng. : Pruden (1990), p.1149.5-15, Griffiths (1989), pp.138.34-139.3), AS, Pradhan (1950), p.96.15-16 (Tib. : Grifitths (1989), p.311.1-2, Eng. : ibid., p.138.21-23, Fr. : Rahula (1971), p.166.4-7, ASBh, Tatia (1976), pp.127.26-128.4, Griffiths (1989), p.311.3-8, Eng. : ibid., p.138.24-33), MSAT, Griffiths (1989), p.310.25-28, Eng. : ibid., p.138.17-20, Jap. : Hakamaya (1983), p.16.2-5), MSU, Griffiths (1989), p.310.2-19 (Eng. : ibid., pp.137.22-138.7).

(60) Skt. : praṇidhi-jñānaḥ. See AAK 8.8, Stcherbatsky (1929), p.34.13-14 (AAV, Amano (1983), p.4.12-13 and p.6.1-8, Jap. : Mano (1972), p.249.3-4 and pp.250.14-251.2) :

anābhogam anāsaṅgam avyāghātaṃ sadā sthitaṃ /
sarva-praśnāpanud bauddhaṃ praṇidhi-jñānam iṣyata //

Cf. AKBh, Pradhan (1967), pp.417.18-418.1 (Tib. (P), nGu 68a1-2,

Chin. (T) , no.1558, p.142a7-9, no.1559, p.293a13-15, Fr. : la Vallée Poussin (1971) , p.88.2-7, Eng. : Pruden (1990) , p.1150.21-27) , AS, Pradhan (1950) , p.96.17-18 (Tib. : Grifitths (1989) , p.312.15-16, Eng. : ibid., p.140.15-17, Fr. : Rahula (1971), p.166.8-11, ASBh, Tatia (1976), p.128.5-7, Griffiths (1989) , p.312.17-20, Eng. : ibid., p.140.18-23), MSAT, Griffiths (1989) , p.312.11-14, Eng. : ibid., p.140.11-14, Jap. : Hakamaya (1983) , pp.16.21-17.2) , MSU, Griffiths (1989), pp.311.23-312.3 (Eng. : ibid., pp.139.24-37) .

(61) Skt. : catasraḥ pratisaṃvidaḥ. See AKBh, Pradhan (1967) , p.418.9 (Tib. (p), nGu 68a7-8, Chin. (T) , no.1558, p.142a22-23, no.1559, p.293 a23-24) :

〔1〕 dharma-pratisaṃvit, 〔2〕 artha-pratisaṃvit, 〔3〕 nirukti-pratisaṃvit, 〔4〕 pratibhāna-pratisaṃvit.

Cf.AS, Pradhan (1950) , pp.96.19-97.4 (Tib. : Grifitths (1989) , pp.313.26-314.1, Eng. : ibid., p.142.1-10, Fr. : Rahula (1971) , p.166.12-32, ASBh, Tatia (1976) , p.128.8-15, Griffiths (1989) , p.314.2-10, Eng. : ibid., p.142.11-26) , MSAT, Tib. : Griffiths (1989) , p.313.19-25, Eng. : ibid., p.141.31-38, Jap. : Hakamaya (1983) , p.17.15-23) , AVS, Samtani (1971), p.51.8-11 (Jap. : Honjo (1989), pp.32.22-33.7) , DS 51, Müller (1984), p.11.5-7 (Namdol (1988), pp.27.13-28.2, Jap. : Hakamaya p.18.6-9), MPPŚ, Chin. (T), p.240a22-23 (Lamotte (1970) , pp.1614-1615).

(62) catasraḥ pariśuddhayaḥ. SU, Jaini (1979) , p.176.6-7 (Tib. (P) , Tha 229b1) , AAV, Amano (1983) , p.4.14-15 (Jap. : Mano (1972) , p. 249.5) :

〔1〕 āśraya-pariśuddhayaḥ, 〔2〕 ālambana-pariśuddhayaḥ, 〔3〕 citta-pariśuddhayaḥ, 〔4〕 jñāna-pariśuddhayaḥ.

Cf. BBh, Wogihara (1971) , p.384.1-17 (Dutt (1978) , p.265.3-13, Tib. (P) , Shi 227b6-228a5, Chin. (T) , pp.568c19-569a3) 3, AS, Pradhan (1950) , p.97.18-24 (Tib. : Grifitths (1989) , p.318.25-33, Eng. : ibid., p.148.24-31, Fr. : Rahula (1971), pp.167.30-168.13, ASBh, Tatia (1976), p.129.5-14, Griffiths (1989), p.319.1-12, Eng. : ibid., pp.148.32-149.1) , MSA, Lévi (1904) , p.186.1-3 (Griffiths (1989), p.318.18-21, Bagchi (1970) , p.177.20-22, Śastri (1985) , p.180.18-20, Eng. : Griffiths (1989), p.148.14-21, Thurman (1979) , p.363.14-18, Limaye (1992) , p.526.16-22,

Fr. : Lévi (1911) , p.302.8-15, Jap. : Ui (1961) , pp.573.10-574.2, Hakamaya (1983) , p.20.7-13, MSAT, Tib. : Griffiths (1989), p.318.22-24, Eng. : ibid., p.148.23, Jap. : Hakamaya (1983) , p.20.14-16) , AVS, Samtani (1971) , p.51.8-11 (Jap. : Honjo (1989) , pp.32.22-33.7) .

(63) Skt. : daśa-vaśitāḥ. SU, Jaini (1979) , p.176.14-20 (Tib. (P) , Tha 229b5-8) , AAV, Amano (1983) , p.4.15-16 (Jap. : Mano (1972) , p.249. 5-6) :

〔1〕āyur-vaśitā, 〔2〕citta-vaśitā, 〔3〕pariṣkāra-vaśitā, 〔4〕karma-vaśitā, 〔5〕upapatti-vaśitā, 〔6〕adhimukti-vaśitā, 〔7〕praṇidhāna-vaśitā, 〔8〕ṛddhi-vaśitā, 〔9〕jñāna-vaśitā, 〔10〕dharma-vaśitā.

Cf. Mvy, sakaki (1981), no. 770-780 (Fukuda (1989), no. 772-782).

(64) Skt. : daśa-balāni. BBh, Wogihara (1971), p.384.18-25 (Dutt (1978), p.265.14-18, Tib. (P) , Shi 228a5-8, Chin. (T) , p.569.4-9) :

〔1〕sthānāsthāna-jñāna-balam, 〔2〕karmasvaka-jñāna-balam, 〔3〕sarvatragāminī-pratipaj-jñāna-balam, 〔4〕aneka-dhātunānādhātu-jñāna-balam, 〔5〕nānādhimukti-jñāna-balam, 〔6〕indriya-parāparya-jñāna-balam, 〔7〕dhyāna-vimokṣa-samādhi-samāpatti-jñāna-balam, 〔8〕pūrva-nivāsa-jñāna-balam, 〔9〕cyuty-upapatti-jñāna-balam, 〔10〕āsrava-kṣaya-jñāna-balam.

Cf. AKBh, Pradhan (1967), pp.411.13-412.9 (Tib. (P) , nGu 63b7-64a6, Chin. (T) , no.1558, p.140b9-19, no.1559, 291a26-b13, Fr. : la Vallée Poussin (1971), t.5, pp.69.1-71.12, Eng. : Pruden (1990), pp.1137-1138) , AS, Pradhan (1950), p.98.1-5, (Tib. : Grifitths (1989), p.322.13-18, Eng. : ibid., p.152.37-42, Fr. : Rahula (1971) , p.168.14-26 and n.l, ASBh, Tatia (1976), p.129.15-21) , MSAT, Tib. : Griffiths (1989), p.321.7-322.12, Eng. : ibid., pp.151.17-152.36, Jap. : Hakamaya (1983), pp.21.11-23.9) , RGV 3.5-6, Johnston (1950) , pp.91.20-92.2 (Eng. : Obermiller (1931), pp.259.18-260.14, Takasaki (1996), pp.338.15-339.6, Jap. : Takasaki (1989), p164.7-11) , AVS, Samtani (1971) , pp.48.1-49.8 (Jap. : Honjo (1989) , pp.31.10-32.1) , MPPŚ, Chin. (T) , pp.236c8-18 (Fr. : Lamotte (1970) , pp.1521.4-1522.3). See also Dayal (1978) , p.20.1126.

(65) Skt. : catvāri vaiśāradyāni. BBh, Wogihara (1971) , pp.402.3-403.9 (Dutt (1978), pp.277.11-278.6, Tib. (P), Shi 239b5-240b3, Chi. (T), p.573b20-c18, Eng. : Griffiths (1989), p.155.8-42) :

〔1〕abhisambodhi-vaiśāradyam, 〔2〕āsrava-kṣaya-vaśāradyam, 〔3〕antarāyika-dharma-vaiśāradyam, 〔4〕nairyāṇika-pratipad-vaiśāradyam.

Cf. AS, Pradhan (1950), p.98.6-14 (Tib. : Griffiths (1989), p.323.24-324.6, Eng. : ibid., p.154.19-31, Fr. : Rahula (1971), p.169.1-23, ASBh, Tatia (1976), pp.129.22-130.12), MSAT, Tib. : Griffiths (1989), p.323.7-23, Eng. : ibid., p.154.4-18, Jap. : Hakamaya (1983), pp.23.19-25.4), RGV 3.8, Johnston (1950), p.92.9-10 (Eng. : Obermiller (1931), p.260.18-21, Takasaki (1966), pp.339.21-340.2, Jap. : Takasaki (1989), p.165.8-9), AKVy, Wogihara (1971b), pp.645.33-646.13 (Śastri (1987), p.1091.8-19), AVS, Samtani (1971), pp.49.9-51.7, (Jap. : Honjo (1989), p.32.2-21), DS 77, Müller (1984), p.16.15-17 (Namdol (1988), pp.42.12-43.5), MPPŚ, Chin. (T), p.242a22-24 (Lamotte (1970), p.1573.12-19). See also Dayal (1978), pp.20.27-21.32.

(66) Skt. : trīṇy arakṣyāṇī. SU, Jaini (1979), p.176.21-24 (Tib. (P), Tha 229b8-230a1), AAV, Amano (1983), p.4.17-19 (Jap. : Mano (1972), p. 249.6-8) :

〔1〕pariśuddha-kāya-samudācāras tathāgato nāsti tasya apariśuddha-kāya-samudācāratā. 〔2〕pariśuddha-vāk-samudācāras. . ., 〔3〕pariśuddha-manaḥ-samudācāras. . .

Cf. ASaṅ, Chin. (T), p.381c20-25 (cf. Stache-Rosen (1968), pp.78-79), BBh, Wogihara (1971), pp.403.23-404.8 (Dutt (1978), p.278.17-25, Tib. (P), Shi 240b8-241a5, Chin. (T), pp.573c27-574a7, Eng. : Griffiths (1989), p.158.30-41), AS, Pradhan (1950), p.98.17-18 (Tib. : Griffiths (1989), p.327.17-20, Eng. : ibid., p.158.16-18, Fr. : Rahula (1971), p.170.1-5, ASBh, Tatia (1976), p.131.3-7), MSAT, Tib. : Griffiths (1989), p.325.31-326.12, Eng. : ibid., p.157.15-29, Jap. : Hakamaya (1983), pp.26.4-27.5). See Bechert (1994), p.141a.

(67) Skt. : trīṇi smṛtyupasthānāni. SU, Jaini (1979), p.176.25-31 (Tib. (P), Tha 230a1-4) :

tathāgatasya dharmaṃ deśayata ekatyāḥ śuśrūṣante / śrotram avadadhati / ājñā-cittam upasthāpayanti pratipadyante dharmasyānudharman / na tena tathagatasya nandī bhavati na saumanasyaṃ na cetasa utplāvitatvam / apare na śruśūṣante / na śrotram avadadhatītyādi / na tena tathāgatasyāghāto nākṣāntir

ntir nāpratyayaḥ na cetaso 'nabhirādbhiḥ / ekatyāḥśuśrūṣante / ekatyā naśuśrūṣante / na tena tathāgatasya dvayaṃ bhavati nandī āghātaś ca / sarvatropekṣako viharati smṛtimān samprajānan.

Cf. AAV, Amano (1983), p.4.19-21 (Jap. : Mano (1972), p.249.8-9), BBh, Wogihara (1971), p.403.10-22 (Dutt (1978), p.278.7-16, Tib. (P), Shi 240b3-8, Chin. (T), p.573c18-26, Eng. : Griffiths (1989), p.158.19-29), AKBh, Pradhan (1967), p.414.10-15 (Tib. (P), nGu 65b1-3, Chin. (T), no.1558, pp.140c25-141a5, no.1559, p.292a5-9), AS, Pradhan (1950), p.98.15-16 (Tib. Griffiths (1989), p.327.15-17, Eng. : ibid., p.158.13-16, Fr. : Rahula (1971), p.169.24-29, ASBh, Tatia (1976), p.131.3-7), MSAT, Tib. : Griffiths (1989), pp.326.12-327.14 (Eng. : ibid., pp.157.30-158.12, Jap. : Hakamaya (1983), pp.27.6-28.23).

(68) Skt. : asaṃmoṣa-dharmatā. SU, Jaini (1979), p.177.1-2 (Tib. (P), Tha 230a4-5, cf. AAV, Amano (1983), p.4.21-22, Jap. : Mano (1972), p.249.9-10) :

sattvārtha-kriyā-kālānatikramād buddhānām / ata evaiṣā lakṣaṇa-vidhānatopapannā bhavati /

Cf. BBh, Wogihara (1971), p.404.12-17 (Dutt (1978), p.279.3-7, Tib. (P), Shi 241a6-b1, Chin. (T), 574a11-17, Eng. : Griffiths (1989), p.162.10-17), AS, Pradhan (1950), p.98.19-20 (Tib. : Griffiths (1989), p.330.14-16 (Eng. : ibid., p.162.3-5, Fr. : Rahula (1971), p.170.6-9, ASBh, Tatia (1976), p.131.8-9), MSAT, Tib. : Griffiths (1989), p.330.6-13 (Eng. : ibid., pp.161.31-162.2, Jap. : Hakamaya (1983), p.30.7-17).

(69) Skt. : vāsanā-samudghātaḥ. SU, Jaini (1979), p.177.3-4 (Tib. (P), Tha 230a5-6) :

prahīṇa-kleśasya api yad aprahīṇa-kleśasyeva ceṣṭitaṃ sā kleśa-vāsanā / sāpi tathāgatasyāstaṃgateti samudghāta-kleśa-vāsanaḥ sa bhagavān ucyate //

Haribhadra's explanation, AAV, Amano (1983), p.4.22.23 (Jap. : Mano (1972), p.249.10) :

kleśa-jñeyāvaraṇānuśaya-rūpa-bīja-prahāṇād vāsanāyāḥ samudghātaḥ.

Cf. BBh, Wogihara (1971), p.404.18-22 (Dutt (1978), p.279.8-11, Tib. (P), Shi 241b1-3, Chin. (T), p.574a18-22, Eng. : Griffiths (1989), p.160.27-34), AS, Pradhan (1950), p.98.21-22 (Tib. : Griffiths (1989),

p.329.7-9, Eng. : ibid., p.160.17-20, Fr. : Rahula (1971) , p.170.10-14, ASBh, Tatia (1976) , pp.131.10-11) , MSAT, Tib. : Griffiths (1989) , p.329.1-6 (Eng. : ibid., p.160.11-16, Jap. : Hakamaya (1983) , pp.29.13-20).

(70) Skt. : mahā-karuṇā. SU, Jaini (1979) , p.177.5-6 (Tib. (P), Tha 230a6-7) : yathā bhagavān sarva-kālaṃ ṣaḍ-kṛtvo lokaṃ vyavalokayati, ko hīyata ko varddhata ity ādi //

Haribhadra's explanation, AAV, Amano (1983) , p.4.23-24 (Jap. : Mano (1972) , p.249.10.11) :

sakala-jana-hitāśayatā mahatī karuṇā jane /

Cf. BBh, Wogihara (1971), p.404.9-11 (Dutt (1978), p.179.1-2, Tib. (P), Shi 241a5-6, Chin. (T), p.574a8-10), AKBh, Pradhan (1967), pp.414.16-415.4 (Tib. (P), nGu 65b4-8, Chin. (T), no.1558, p.141a13-21, no. 1559, p.292a14-22, Fr. : la Vallée Poussin (1971), t.5, pp.77.14-78.14, Eng. : Pruden (1990), vol.4, pp.1143.17-1144.15), AS, Pradhan (1950) , p.98.23-24 (Tib. : Griffiths (1989) , p.331.20-22, Eng. : ibid., p.163.25-27, Fr. : Rahula (1971), p.170.15-18, ASBh, Tatia (1976), p.131.12-13, Eng. : Griffiths (1989), p.163.28-31), MSAT, Tib. : Griffiths (1989), p.331.16-19 (Eng. : ibid., p.163.20-24, Jap. : Hakamaya (1983), p.31.5-9), MPPŚ, Chin. (T) , p.256b11-257c18 (Lamotte (1970) , pp.1705-1717).

(71) Skt. : aṣṭādaśāveṇika-dharmāḥ. ASBh, Tatia (1976) , p.131.14-23 :

〔1〕nāsti tathāgatasya skhalitam, 〔2〕nāsti ravitam, 〔3〕nāsti muṣitā smṛtiḥ, 〔4〕nāsty asamāhitaṃ cittam, 〔5〕nāsti nānātva-saṃjñā, 〔6〕nāsty apratisaṃkhyāyopekṣā, 〔7〕nāsti cchanda-parihāṇiḥ, 〔8〕nāsti vīrya-parihāṇiḥ, 〔9〕nāsti smṛti-parihāṇiḥ, 〔10〕nāsti samādhi-parihāṇiḥ, 〔11〕nāsti prajñā-parihāṇiḥ, 〔12〕nāsti vimukti-parihāṇiḥ, 〔13〕sarvaṃ tathāgatasya kāya-karma jñāna-pūrvaṃgamaṃ jñānānuparivarti, 〔14〕sarvaṃ vāk-karma jñāna-pūrvaṃgamaṃ jñānānuparivarti, 〔15〕sarvaṃ manas-karma jñāna-pūrvaṃgamaṃ jñānānuparivarti, 〔16〕atīte 'dhvany asaṇgam apratihataṃ jñānam, 〔17〕anāgate 'dhvany asaṇgam apratihataṃ jñānam, 〔18〕pratyutpanne 'dhvany asaṇgam apratihataṃ jñānam.

Cf. MSA, Lévi (1904) , pp.187.18-188.2 (Griffiths (1989) , p.332.21-33, Bagchi (1970) , p.179.11-17, Śastri (1985) , p.182.10-17, Eng. : Griffiths (1989) , pp.164.29-165.10, Thurman (1979) , p.367.3-13, Limaye (1992),

pp.531.21-532.2, Fr. : Lévi (1911), p.305.1-19, Jap. : Ui (1961), pp.578.10-579.8, Hakamaya (1983) , p.31.5-9) , RGV 3.11-13, p.93.4-9 (Eng. : Obermiller (1931) , pp.261.19-262.2, Takasaki (1966) , pp.341.8-342.5, Jap. : Takasaki (1989), pp.166.11-167.6) , AVS, Samtani (1971), p.53.1-9 (Jap. : Honjo (1989) , p.33.8-18) , DS 79, Müller (1984) , p.17.4-13 (Namdol (1988) , pp.43.13-45.12) , MPPŚ, Chin. (T) , p.247b8-16 (Lamotte (1970) , pp.1625-1630). See also AKK 7.28ab and AKBh, Pradhan (1967), p.411.8-11 (Tib. (P), nGu 63b5-6, Chin. (T), no.1558, p.140a26-b1, no.1559, p.291a22-24, Fr. : la Vallée Poussin (1971), t.5, pp.66-67, Eng. : Pruden (1990), p.1136.21-27, Chaudhury (1983), pp.195-198).

(72) AAK 8.2-6, Stcherbatsky (1929) , p.34.1-10 (Amano (1983) , p.3.18-27, Jap. : Mano (1972) , p.248.4-13, cf. Conze (1954) , p.96.9-97.14) :

bodhipakṣāparamāṇāni vimokṣā anupūrvaśaḥ /
navātmikā samāpattiḥ kṛtsnaṃ daśavidhātmakaṃ //
abhibhv-āyatanāny aṣṭa prakārāṇi prabhedataḥ /
araṇā praṇidhi-jñānam abhijñā pratisaṃvidaḥ //
sarvākārāś catasro 'tha śuddhayo vaśitā daśa /
balāni daśa catvāri vaiśāradyāny arakṣaṇaṃ //
trividhaṃ smṛty-upasthānaṃ tridhāsammoṣa-dharmatā /
vāsanāyāḥ samudghāto mahatī karuṇā jane //
āveṇikā muner eva dharmā ye 'ṣṭadaśeritāḥ /
sarvākāra-jñatā ceti dharma-kāyo 'bhidhīyate //

Cf. AS, Pradhan (1950), p.94.15-19 (Fr. : Rahula (1971), p.163.14-17, Okada (1994), pp.19-24), MS, 10.9, Lamotte (1973), tome 1, pp.87.20-88.5 (Eng. : Griffiths (1989), pp.51.39-52.2, Fr. : Lamotte (1973), tome 2, pp.285.5-289.2, Eng. : Keenan (1992), p.109.21-32, Jap. : Nagao (1987), p.354 and p.356, n.1), MPPŚ, Chin. (T), 220c5-8 (Fr. : Lamotte (1970), pp.1354.18-1355.5).

(73) Tib. (P), no.867, Chin. (T), no.305. But I have not been able to identify this citation.

(74) Cf. AKBh, Pradhan (1967), p.384.17-18 (Tib. (P), nGu 45a4, Chin. (T), no.1558, p.132c24-26, no.1559, p.284a22-23, Fr. : la Vallée Poussin (1971), t.4, p.288.3-6, Eng. : Pruden (1989), p.1027.8-11) :

kleśaânavamardanīyatvād agraha-dharmeṣu balāni laukikânya-

dharmânavamardanīyatvād vā /

(75) AKK 4.45ab and AKBh, Pradhan (1967), p.227.4-6 (Tib. (P), Gu 222a2-3, Chin. (T), no.1558, p.80c22-24, no.1559, p.237a12-14, Fr. : la Vallée Poussin (1971), t.3, pp.105.16-106.2, Eng. : Pruden (1989), p.621.1-5, Jap. : Funahashi (1987), p.246.1-3) :

trīṇi karmāṇi / kuśalaṃ karmākuśalam avyākṛtaṃ karmeti /
tatra kṣemākṣemetarat karma kuśalākuśaletarat /

Cf. MV, Chin. (T), vol.27, p.263a6-12.

(76) Cf.TŚBh, Lévi (1925), p.23.12 (Mimaki (1989), D 8b5-6, I 15.8, Tripāṭhī (1984), p.59.3, Tib. : Teramoto (1977), p.25.1-3, Fr. : Lévi (1932), p.80.31-32, Eng. : Chatterjee (1980), p.54.16-18, Ger. : Jacobi (1932), p.21.22-24, Jap. : Ui (1952), p.47.1-2, Yamaguchi (1953), p.239.1, Teramoto (1977), p.50.14, Aramaki (1976), p.77.13-16) :

upādāna-skandheṣv ātmeti darśanam ātma-dṛṣṭiḥ satkāya-dṛṣṭir ity arthaḥ /

(77) Skt. : ādhyātmikabāhyavastu or bāhyādhyātmikaṃ bhāva (-jātaṃ) (Pras, Yamaguchi (1974), Tib.-Skt., p.121, 140). Cf. Pras, la Vallée Poussin (1977), p.340.6, 354.3, 365.4, 475.6.

(78) Cf. MAK 1, Ichigo (1985), p.22.3-6 (Jap. : ibid., p.120.1-3) :

bdag dang gzhan smra'i dngos 'di dag //
yang dag tu na gcig pa dang //
du ma'i rang bzhin bral ba'i phyir //
rang bzhin med de gzugs brnyan bzhin //

See also Ejima (1980), pp.211-226.

(79) MMK, 1.1, de Jong (1977), p.1.5-6 (Saigusa (1985), pp.8-9, Eng. : Inada (1970), p.39.14-16, Kalupahana (1986), p.105, Ger. : Frauwallner (1994), p.178.28-30, Dan. : Lindtner (1982), p.67.13-16, It. : Gnoli (1983), p 307.8-9) :

na svato nāpi parato dvābhyāṃ nāpy-ahetutaḥ /
utpannā jātu vidyante bhāvāḥ kvacana ke cana //

(80) MMK 1.7, de Jong (1977), p.1.17-18 (Saigusa (1985), pp.20-21, Eng. : Inada (1970), p.40.30-33, Kalupahana (1986), p.110.16-17, Ger. : Frauwallner (1994), p.21-23, Dan. : Lindtner (1982), p.68.13-16, It. : Gnoli (1983), p.308.11-14) :

na san nāsan na sad asan dharmo nirvartate yadā /

kathaṃ nirvartako hetur evaṃ sati hi yujyate //

(81) The fifth stage is sudurjayā (Tib. : shin tu sbyangs dka' ba).

(82) Five stages are : [6] abhimukhī (mngon du gyur ba), [7] dūraṃgamaḥ (ring du song ba) , [8] acalā (mi gyo ba) , [9] sādhumatī (legs pa'i blo gros), [10] dharma-meghā (chos kyi sprin). See Mvy, Sakaki (1981), no. 885-895 (Fukuda (1986), no. 887-897).

(83) Skt. : daśa-pāramitāḥ. MAV, Nagao (1964), p.34.5-18 (Tatia (1967), pp.15.18-16.6, Tib. : Yamaguchi (1966), pp.36.10-12, Chin. : ibid., pp.36.11-13, Eng. : Anacker (1986), pp.228.30-229.21, Jap. : Nagao (1976), pp.259.1-260.4) :

[1] dāna-pāramitā, [2] śīla-pāramitā, [3] kṣānti-pāramitā, [4] vīrya-pāramitā, [5] dhyāna-pāramitā, [6] prajñā-pāramitā, [7] upāya-pāramitā, [8] praṇidhāna-pāramitā, [9]bala-pāramitā, [10] jñāna-pāramitā.

Cf. DS 18, Müller (1984), p.4.9 (Namdol (1988), p.10.1-8, Hakamaya (1979), p.10.5-6), Mvy, Sakaki (1981), no.913-923 (Fukuda (1989), no.915-925).

(84) RGV, Johnston (1950), p.39.1-2 (Eng. : Obermiller (1931), p.181.3-5, Takasaki (1966), p.2288-10, Jap. : Takasaki (1989), p.67.11-12) :

tatra vimalaḥ kleśâvaraṇa-prahāṇāt / viśuddho jñeyâvaraṇa-prahāṇāt /

Cf. TŚBh, Lévi (1925), p.15.7-11 (Mimaki (1989), C 1b3-5, E p.2.6-10, F 1a5-7, G 1b3-5, H p.1.8-14, Tripāṭhī (1984), p.12.6-9, Tib. : Teramoto (1977), pp.1.14-2.7, Fr. : Lévi (1932), p.62.6-14, Eng. : Chatterjee (1980), p.32, Ger. : Jacobi (1932), p.1.16-25, Jap. : Ui (1952), p.4.5-12, Yamaguchi (1953), p.151.1-6, Teramoto (1977), p.2.1-5, Aramaki (1976), p.34.4-8) :

kleśa-jñeyâvaraṇa-prahāṇam api mokṣa-sarvajñatvâdhigamârtham / kleśā hi mokṣa-prāpter āvaraṇam iti atas teṣu prahīṇeṣu mokṣo 'dhigamyate / jñeyâvaraṇam api sarvasmin jñeye jñāna-pravṛtti-pratibandha-bhūtam akliṣṭam ajñānam / tasmin prahīṇe sarvākāre jñeye 'saktam apratihataṃ ca jñānaṃ pravartata ity ataḥ sarva-jñatvam adhigamyate /

(85) Cf. MAV, Nagao (1964), p.20.5 (Tatia (1967), p.3.14, Tib. :

Yamaguchi (1966), p.7.12, Chin. : ibid., p.7.13-14, Eng. : Anacker (1986), p.214.12-14, Jap. : Nagao (1976), pp.225.8-9) :

evam asal-lakṣaṇaṃ grāhya-grāhakayoḥ praviśati /

(86) RA, Tib. (D), 246a5-6 (Umino (1985), p.55b7-10) :

gnyis dang bral ba'i rang rig pa ni nges par yod pa lung dang rigs pa las mngon la / de med par 'dzin pa ni skur pa 'debs pa'i legs par ma zin pa'o zhes 'phags pa thogs med kyis gsal bar gsungs la.

See also Yamaguchi (1975), pp.273-362.

(87) Skt. : citta-prakṛti-prabhāsvara. Cf. RGV, Johnston (1950), p.71.7-8 (Schmithausen (1971), pp.156.21-157.4, Eng. : Obermiller (1950), p.228. 13-15, Takasaki (1966), p.287.6-9, Jap. : Takasaki (1989), p.125.2-3) :

yac-cittam aparyanta-kleśa-duḥkha-dharmânugatam api prakṛti-prabhāsvaratayā vikāraṃ na bhajate, ataḥ kalyāṇa-svarṇavad ananyathī bhāvârthena tathatety ucyate.

See S.Katsumata (1961), pp.485-500.

(88) See Umino (1971), p.386b, Umino (1984), pp.4-7, Umino (1989), pp.87-88.

(89) See note (13b).

(90) Skt. : catuvāri saṃgraha-vastūni.

〔1〕dānam, 〔2〕priyavacanam, 〔3〕artha-caryā, 〔4〕samānārthatā.

Cf. LV, Hokazono (1994), pp.346.6-8 (Lefman (1902), p.38.16-17, Mitra (1980), pp.42.18-43.1, Tib. : Foucaux (1847), p.42.6-8, Fr. : Foucaux (1988), p.40.6-8, Jap. : ibid., p.763.6-7), ASaṅ, Chin. (T), p.402c24-25 (cf. Stache-Rosen (1968), p.108.51-55), DS 19, Müller (1984), p.4.11 (Namdol (1988), p.10.9-14, Hakamaya (1979), p.10.7-10).

(91) Tib. (P), no.867, Chin. (T), no.305. But I have not been able to identify this citation.

(91b) Skt. : sadāprarudita. Nobel (1950), p.81 : Name eines Bodhisattva (常悲, 常啼).

(92) AAK 2.3-5, 9-10, Stcherbatsky (1929), pp.11-12 (Amano (1987), pp.41-42, Tib. : Stcherbatsky (1929), pp.21-22, Eng. : Conze (1954),pp.32-34, Jap. : Mano (1972), pp.138-140, SM, Tib. (P), Ta 147a2-149b7, Jap. :

Isoda (1991), pp.74-79) :

rūpādi-skandha-śūnyatvāc chūnyatānām abhedataḥ /
ūṣmāṇo 'nupalambhena teṣāṃ mūrddhagatam mataṃ //3
kṣāntayas teṣu nityādi-yoga-sthāna-niṣedhataḥ /
daśa-bhūmiḥ samārabhya vistarāsthāna-deśanāt //4
agradharmmagataṃ proktaṃ ārya-śrāvaka-vartmani /
tat kasya hetor buddhena buddvā dharmmāsamīkṣānād //5
prajñapter avirodhena dharmmatā sūcanākṛtiḥ /
ūṣamagam mūrdhagam rūpādy-āhānādi-prabhāvitaṃ //9
adhyātma-śūnyatādy-ābhī rūpāder aparigrahāt /
kṣāntī rūpādy-anutpādādy-ākārair agra-dharmmateti //10

Cf. AKK 6.17-19 and AKBh, Pradhan (1967), pp.343.9-345.7 (Tib. (P), nGu 15a4-16a5, Chin. (T), no.1558, p.119b3-c17, no.1559, p.271b19-c26, Fr. : la Vallée Poussin (1971), t.4, pp.163.1-167.10, Eng. : Pruden (1989), pp.930.1-933.14), MSA 14.23-27, Lévi (1904), p.93.6-26 (Bagchi (1970), pp.90.26-91.18, Śastri (1985), p.90.7-28, Eng. : Thurman (1979), pp.187.1-188.9, Limaye (1992), pp.267.19-269.23, Jap. : Ui (1961), pp.301.1-303.1, Odani (1984), pp.163.16-164.22).

(94) Cf. MMK 24.27, de Jong (1977), p.36.14-15 (Saigusa (1985), pp.784-785, Eng. : Inada (1970), p.150.4-7, Kalupahana (1986), p.346.13-16, Ger. : Frauwallner (1994), p.192.6-8, Dan. : Lindtner (1982), p.124.17-20, It. : Gnoli (1983), p.368.28-30) :

prahāṇa-sākṣātkaraṇe bhāvanā caivam eva te /
parijñāvan na yujyante catvāry api phalāni ca //

(95) MSA 1.16, Lévi (1904), p.7.3-6 (Funahashi (1985), p.11.16-19, Bagchi (1970), p.6.16-19, Śastri (1985), p.6.7-10, Eng. : Thurman (1979), p.12.16-21, Limaye (1992), p.15.26-33, Fr. : Lévi (1911), pp.14.32-15.4, Jap. : Ui (1961), p.56.4-8),

śrutaṃ niśrityādau prabhavati manaskāra iha yo
manaskārāj jñānaṃ prabhavati ca tatvârtha-viṣayaṃ /
tato dharma-prāptiḥ prabhavati ca tasmin matir ato
yadā pratyātmaṃ sā katham asati tasmin vyavasitiḥ //

(96) Cf. Nakamura (1975), p.594a : 十信.

(97) AKBh, Pradhan (1967), p.320.13-15 (Tib. (P), Gu 297b7-298a1, Chin. (T). no.1558, p.111b11-14, no.1559, p.264b22-25, Fr. : la Vallée

Poussin (1971), t.4, p.104.12-16, Eng. : Pruden (1989), p.855.10-24) :

〔1〕vidūṣaṇā-pratipakṣo duḥkha-samudayālambanaḥ prayoga-mārgaḥ 〔2〕prahāṇa-pratipakṣaḥ sarva ānantarya-mārgaḥ 〔3〕ādhāra-pratipakṣo vimukti-mārgaḥ 〔4〕dūrībhāva-pratipakṣo viśeṣa-mārgaḥ /

(98) MSA 14.3, Lévi (1904), p.90.14-15 (Bagchi (1970), p.68.10-11, Śastri (1985), p.87.11-12, Eng. : Thurman (1979), p.181.17-19, Limaye (1992), p.260.10-12, Fr. : Lévi (1911), p.161.17-19, Jap. : Ui (1961), p.291.6-7, Odani (1984), p.145.25-26) :

dharma-srotasi buddhebhyo 'vavādaṃ labhate tadā /
vipulaṃ śamatha-jūāna-vaipulya-gamanāya hi //

(99) Tib. (D), no.56, Taipei ed., 566.7-572.6 (Kha 103b7-106b6), Chin. (T), no.316, p.206c21-207c20.

(100) Skt. : daśākuśalakarmapathāḥ. DS 56, Müller (1984), p.12.4-6 (Namdol (1988), p.30.4-15, Hakamaya (1979), p.19.11-17) :

〔1〕prāṇātipātaḥ, 〔2〕adattādānam, 〔3〕kāmamithyācāraḥ, 〔4〕mṛṣāvādaḥ, 〔5〕paiśunyam, 〔6〕pāruṣyam, 〔7〕saṃbhinna-pralāpaḥ, 〔8〕abhidhyā, 〔9〕vyāpādaḥ, 〔10〕mithyā-dṛṣṭiḥ.

Cf. 舍利弗阿毘曇論 *Śāriputrābhidharmaśastra, Chin. (T), no.1548, p.700a14-b4.

(101) AKBh, Pradhan (1967), p.248.11-12 (Tib. (P), Gu 241a6, Chin. (T), no.1558, p.88c14, no.1559, p.243c9-10, la Vallée Poussin (1971), t.3, p.169.8-11, Eng. : Pruden (1989), p.658.11-13, Jap. : Funahashi (1987), p.365.8-9) :

api tu śakyaṃ vaktuṃ karma ca te panthānaś ca sugati-durgatīnām iti karmapathāḥ /

(102) Cf. MN, vol.1, p.320 (Mochizuki (1980), pp.35.17-36.2) :

tathāgate saddhā niṅiṭṭhā hoti mūlajātā patiṭṭhitā, ayaṃ vuccati bhikkhane ākāravatī.

(103) Cf. Samādhirājasūtra, Vaidya (1961), p.143.8-9, (Régamey (1990), p.51, Eng. : ibid., p.86, Jap. : Tamura (1975), vol.2, p.19.1-2) :

tatra kumāra tathāgatasya kāyaḥ śata-puṇya-nirjātayā buddhyânekārtha-nirdeśo.

(104) See note (4).

(105) MAV, Nagao (1964), p.41.18-19 (Tatia (1967), p.22.4, Tib. :

Yamaguchi (1966), p.53.4-5, Chin. : ibid., p.53.5, Eng. : Anacker (1986), p.237.4-5, Jap. : Nagao (1976), p.277.2) :

prāpti-paramārtho nirvāṇaṃ.

See Umino (1984), p.2.8.

(106) PP, Tib. (D), Tsha 46b4, (Walleser (1914), p.4.5-7, Ger. : Kajiyama (1989), p.422.12-14, PPT, Tib. (D), Wa 30a6-b1). See Pras, la Vallée Poussin (1977), p.9.7-8 (Tib. (D) Ha 3b7-4a1, Jap. : Tanji (1988), p.7. 4-6) :

kiṃ tarhi, asmin sati idaṃ bhavati, asyotpādād idamutpadyata iti idaṃpratyayatārtha.

Cf. SN X II 20, vol. II, pp.25-26 (Hirakawa (1988), p.493.2-3, Nakamura (1994), p.557.1-2) :

yā tatra tathatā avitathatā anaññathatā idappaccayatā, ayaṃ vuccati paṭiccasamuppādo.

(107) MMK 18.7cd, de Jong (1977), p.25.2 (Saigusa (1985), pp.524-525, Eng. : Inada (1970), p.115.12-13, Kalupahana (1986), p.268.14, Ger. : Frauwallner (1994), p.186.12-14, Dan. : Lindtner (1982), p.106.7-8, It. : Gnoli (1983), p.352.7-8) :

anutpannâniruddhā hi nirvāṇam iva dharmatā //

(108) AKK 2.45a, Pradhan (1967), p.73.14 (Tib. : Stcherbatsky (1970), p.184.4, Fr. : la Vallée Poussin (1971), t.1, p.214.29, Eng. : Pruden (1989), p.233.4, Jap. : Sakurabe (1969), p.328.5 :

āyur-jīvitam.

Cf. TŚBh, Lévi (1925), p.15.22 (Mimaki (1989), C 2a3, E p.3.6-7, F 1b6, G 1b9-2a1, H p.2.4-5, Tripāṭhī (1984), p.14.17-18, Tib. : Teramoto (1977), p.3.6-8, Fr. : Lévi (1932), p.63.8-10, Eng. : Chatterjee (1980), p.33.25-28, Ger. : Jacobi (1932), p.3.7-8, Jap. : Ui (1952), p.6.4-5, Yamaguchi (1953), p.158.14-15, Teramoto (1977), p.8.7-8, Aramaki (1976), p.36.6-7) :

ātmā jīvo jantur manujo māṇava ity evam ādika ātmopacāraḥ,

(109) See Ishikawa (1990), p.93.11.

(110) Cf. TŚBh, Lévi (1925), p.25.22-24 (Mimaki (1989), C 2a3-4, F 1b7, G 2a1, H p.2.6-7, Tripāṭhī (1984), p.14.18-19, Tib. : Teramoto (1977), p.3.8-11, Fr. : Lévi (1932), p.63.11-13, Eng. : Chatterjee (1980), p.33.28-30, Ger. : Jacobi (1932), p.3.8-11, Jap. : Ui (1952), p.6.5-7, Yamaguchi

(1953), pp.158.15-159.1, Teramoto (1977), p.8.8-9, Aramaki (1976), p.36.7-9) :

skandhā dhātava āyatanāni rūpaṃ vedanā saṃjñā saṃskārā vijñānam ity evam ādiko dharmopacāraḥ ／

(111) I have not been able to identify this verse.

(112) CGP, Chin. (T), p.325b1 : 於三宝所得浄信難如求如意味.

(113) Tib. (P), no.820, Pu 129a3-5 (Chin. (T), no.598, p.133a23-25) :

klu'i bdag po chos lnga dang ldan na byang chub sems dpa' rnams dad pa dang ldan par 'gyur te／ lnga gang zhe na／ 'di lta ste／ mos pa'i stobs dang／ bsod nams kyi tshogs kyi stibs dang／ las kyi rnam par smin pa la 'jug pa'i stobs dang ／ byang chub kyi sems mi gtong ba'i stobs dang ／ chos nyid la ston pa'i stobs te ／

(113b) TŚBh, Lévi(1925), p.25.25-26 :

adhimokṣo niścite vastuni tathaivāvadhāraṇaṃ.

(114) Tib. (D), Taipei ed., 281.4-282.2 (Chin. (T), no.302, pp.916c25-917a4, no.303, p.923c1-11) :

byang chub sems dpa' sgrib pa thams cad rnam par sel bas 'jam dpal gzhon nur gyur pa la 'di skad ces smos so ／／ 'jam dpal byang chub sems dpa' gang dag la mos na ／ yon tan gyi khyad par 'di dag dang gzhan dpag tu med pa dag kyang 'thob pa'i chos lnga po 'di dag ste ／ lnga gang zhe na ／ 〔1〕 chos thams cad gnyen po med pa dang ／ ma skyes pa dang ma 'gags pa dang ／ brjod du med par mos pa dang ／ 〔2〕 rtag tu rgyun mi 'chad par skad cig skad cig la de bzhin gshegs pa'i spyod lam la 'jug pa'i gnas 'dzam bu'i gling gi rdul phra rab kyi rdul las kyang lhag pa dag la lhun gyis grub cing rnam par mi rtog par 'jug par mos pa dang ／ 〔3〕 seng ge bran bzangs kyi bu'i rtogs pa brjod pas sems can yongs su smin par byed pa de bcom ldan 'das shākya thub pas ／ bskal pa gang gā'i klung gi bye ma snyed nas mngon par rdzogs par sangs rgyas te ／ mdzad par mos pa dang ／ 〔4〕 mar me mdzad kyis lung bstan pa nas bzung ste ／ mngon par rdzogs par byang chub pa'i bar der bcom ldan 'das shākya thub pa'i byang chub sems dpa'i spyod pa gang yin pa de thams cad

sangs rgyas kyi yul gyi mthas klas pa'i bskal pa nas mngon par rdzogs par sangs rgyas nas bstan pa yin par mos pa dang / [5] shākya thub pas bstan pas sems can yongs su smin par byas pa gang yin pa de / sangs rgyas kyi yul gyi mthas klas pa'i bskal pa nas / bcom ldan 'das shākya thub pa mngon par rdzogs par sangs rgyas nas mdzad pa yin par mos pa ste /

(115) Madhyamakālaṃkāravṛtti, Ichigo (1985), p.222.7-11 (Jap. : Ichigo (1985), p.166.6-9) :

ji ltar bstan pa'i tshul gyis gcig dang du ma'i rang bzhin dang bral ba'i phyir ro // de'i phyir yang dag par na gang gi skye ba dang / de sngon du 'gro ba'i gnas pa dang / mi rtag pa dang / de la brten pa'i dngos po'i chos gzhan yang yod par 'gyur ram /

(116) The same context is also mentioned above (RA, Tib. (D), Ki 230b3-4).

(117) I have not been able to identify this verse.

(118) AAK 8.11cd, Stcherbatsky (1929), p.35.6 (Tib. : ibid., p.64.3-4, Eng. : Conze (1954), p.98.11-12, Jap. : Mano (1972), p.252.2) :

akṣayatvāc ca tasyaiva nitya ity api kathyate //

(119) Skt. : siṃhasaudāsa (LAS, Suzuki (1934), p.186L).

(120) The Chinese translation attributes the following sentence to 星賀騷那裘緣起経 *Siṃhasutejo'vadāna (Pāsādika (1979), p.27, n.14, Ichishima (1986), p.4.22). See note (114).

(121) See Taga (1974), pp.129-169.

Abbreviations and Original Sources (3)

AAm *Abhidharmāmṛtaśāstra 阿毘曇甘露味論.
re-Skt. : Śāstri (1953).
Chin. : T.1553.

AAP Abhidharmāvatāraprakaraṇaśāstra.
Tib. : D.4098, P.5599.
Chin. : T.1554.

AAV Abhisamayālaṃkārakārikāśāstravivṛtti by Haribhadra.

Skt. : Amano (1983), (1986), (1987), etc.

AS Abhidharamasamuccaya by Asaṅga.
Skt. : Pradhan (1950).
Tib. : D.4049, P.5550.

ASaṅ *Abhidharmasaṅgītiparyāyapādaśāstra 阿毘達磨集異門足論.
Chin. : T.1536.

ASBh Abhidharmasamuccayabhāṣya.
Skt. : Tatia (1976).
Tib. : D.4053, 4054, P.5554, 5555.
Chin. : T.1606.

AVS Arthaviniścayasūtra.
Skt. : Samtani (1971).
Tib. : D.317, p.983.
Chin. : T.762, 763.

DS Dharmasaṃgraha.
Skt. : Kasawara(1984), Namdol (1988).
Tib. : Namdol (1988).

MAK Madhyamakālaṃkārakārikā by Śāntarakṣita.
Tib. : D.3884, P.5284, Ichigo (1985).

MAV Madhyāntavibhāgabhāṣya.
Skt. : Nagao (1964), Tatia (1967).
Tib. : D.4027, P.5528, Yamaguchi (1966).
Chin. : T.1599, 1600, Yamaguchi (1966).

MMK Mūlamadhyamakakārikā.
Skt. : de Jong (1977), Saigusa (1985).
Tib. : D.3824, P.5224, Saigusa (1985).
Chin. : T.1564, Saigusa (1985).

MPPŚ *Mahāprajūāpāramitāśāstra 大智度論
Chin. : T.1509.

MS Mahāyānasaṃgraha.
Tib. : D.4048, P.5549, Lamotte (1973).
Chin. : T.1592, 1593, 1594.

MSAT Mahāyānasūtrālaṃkāraṭīkā by Sthiramati.
Tib. : D.4034, P.5531.

NP Nyāyapraveśa by Śaṅkarasvāmin.

Skt. : Dhruva (1968), Tachikawa (1971).
Tib. : P.5706 (D.4208, P.5707 are translated from Chin.)
Chin. : T.1630.

PP Prajñāpradīpa by Bhāviveka.
Tib. : D.3853, P.5253, Walleser (1916).
Chin. : T.1566.

PPU Prajñāpāramitopadeśa.
Tib. : D.4079, P.5579.

Pras Prasannapadā.
Skt. : la Vallée Poussin (1977).
Tib. : D.3860, P.5260.

PSP Pañcaskandhaprakaraṇa.
Tib. : D.4059, P.5560, Dantinne (1980).
Chin. : T.1612.

RGV Ratnagotravibhāga.
Skt. : Johnston (1950).
Tib. : D.4024, P.5525.
Chin. : T.1611.

Sat *Satyasiddhiśāstra 成実論.
re-Skt. : Sastri (1975).
Chin. : T.1646.

Śik. Śikṣāamuccaya.
Skt. : Bendall (1977), Vaidya (1961).
Tib. : D.3940, P.5336.
Chin. : T.1636.

ŚM Abhisamayālaṃkārakārikāvṛtti Śuddhamatī by Ratnākaraśānti.
Tib. : D.3801, P.5199.

SU Āryāṣṭasāhasrikā-prajñāpāramitā-pañjikā-sārottamā.
Skt. : Jaini (1979).
Tib. : D.3803, P.5200.

TŚBh Triṃśikabhāṣya.
Skt. : Lévi (1925), Mimaki (1989), etc.
Tib. : D.4064, P.5565.

VM Visuddhimagga.
Pāli : Waren (1989).

Translations and Secondary Sourcee (3)

Amano, H. 天野宏英.

1983 現観荘厳論釈の梵文写本 (1) Genkanshogonron-shaku no bonbun shahon (1), 比治山女子短期大学紀要 *Hijiyama-joshi-tankidaigaku kiyo* 17.

1986 現観荘厳論釈の梵文写本 (3) Genkanshogonron-shaku no bonbun shahon (3), 島根大学教育学部紀要 *Shimanedaigaku kyoiku-gakubu kiyo* 20.

1987 現観荘厳論釈の梵文写本 (4) Genkanshogonron-shaku no bonbun shahon (4), 島根大学教育学部紀要 *Shimanedaigaku kyoiku-gakubu kiyo* 21.

Anacker, S.

1986 *Seven Works of Vasubandhu,* repr., Delhi.

Aramaki, N. 荒牧典俊.

1976 唯識三十論 Yuishiki-sanju-ron, 『大乗仏典 15 世親論集』 *Daijo-butten 15 Seshin ronshu,* Tokyo.

Asano, M. 浅野守信.

1991 Śikṣāsamuccaya における 「発菩提心」 Śikṣāsamuccaya ni okeru 'hotsu bodaishin,' 『仏教文化』 *Bukkyo bunka* 24 (27).

Bechert, H.

1994 *Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden, Band 1 Vokale,* Göttingen.

Bendall, C.

1971 *Śikṣā-Samuccaya,* with W.H.D.Rouse, repr., Delhi.

1977 *Śikṣā-Samuccaya,* repr., Tokyo.

Chatterjee, K.N.

1980 *Vijñapi Mātra-siddhi,* Varanasi.

Conze, E.

1979 *The Large Sutra on Perfect Wisdom,* repr., Delhi.

Dantinne, J.

1980 *Le traite des cinq agregats,* Bruxelles.

Dayal, H.

1978 *The Bodhisattva Doctrine in Buddhist Sanakrit Literature,* repr., Delhi.

de Jong, J.W.

1977 *Nāgārjuna, Mūlamadhyamakakārikāḥ,* Madras.

Dhruva, A.B.

1968 *The Nyāyapraveśa Part* I, repr., Baroda.

Ejima, Y.

1985 『中論』註釈書における「縁起」の語義解釈 'Churon' chūshakusho ni okeru engi no gogi kaishaku『仏教思想の諸問題』*Bukkyo shiso no shomondai,* Tokyo.

Frauwallner, E.

1994 *Die Philosophie des Buddhismus,* 4. Aufgabe, Berlin.

Fujita, K. 藤田宏達.

1957 原始仏教における信の形態 Genshibukkyō ni okeru shin no keitai, 『北海道大学文学部紀要』*Hokkaidō daigaku bungakubu kiyō* 6.

1970 『原始浄土思想の研究』 *A Study of Early Pure Land Buddhism,* Tokyo.

1984 『〈倶楽論〉所引の阿含経一覧』*Kusharon shoin no Agonkyo ichiran,* Sapporo.

1992 原始仏教における信 Genshibukkyō ni okeru shin, 『仏教思想 11 信』*Bukkyō shisō 11 shin,* Kyoto.

Fukuda, Y. 福田洋一.

1989 *A new critical edition of the Mahāvyutpatti,* with Y.Ishihama, Tokyo.

Fukuhara, R. 福原亮厳.

1969 『成実論の研究』*A Study of Jājitsu Ron, Kyoto.*

Funahashi, N. 舟橋尚哉.

1985 『ネパール写本対照による大乗荘厳経論の研究』*Nepal shahon taisho ni yoru Daijōshōgonkyōron no kenkyu,* Tokyo.

Furusaka, K. 古坂紘一.

1991 如来の三十二相に関する因果観 The chain of causes and effects with respect to the thirty-two marks of the Tathāgata, 『インド思想における人間観』*The View of Man in Indian Thought,* Kyoto.

Gnoli, R.

1983 *Testi Buddhisti,* Torino.

Griffiths, P.

1989 *The Realm of Awakening*, with N.Hakamaya, J.P.Keenan and P.Swanson, Oxford.

Hakamaya, N. 袴谷憲昭.

1973 『大乗荘厳経論』 散文箇所の著者問題について "Mahāyānasūtra-alaṃkāra" sanbun kasho no chosha mondai nitsuite, 『駒沢大学仏教学部論集』 *Komazawadaigaku bukkyogakubu ronshu* 4.

1979 Dharmasaṃgraha 和訳 (Ⅰ) Dharmasaṃgraha wayaku (Ⅰ), 『駒沢大学仏教学部論集』 *Komazawadaigaku bukkyogakubu ronshu* 10.

1983 Mahāyānasūtrālaṃkāraṭīkā 最終章和訳 Mahāyānasūtrālaṃkāra-ṭīkā saishusho wayaku, 『駒沢大学仏教学部研究紀要』 *Komazawa daigaku bukkyogakubu kenkyukiyo* 41.

1993 『新国訳大蔵経 大乗荘厳経論』 *Shin kokuyaku daizōkyo Daijōshōgonkyōron*, Tokyo.

Hirakawa, A.

1988 『平川彰著作集第一巻 法と縁起』 *Hirakawa Akira chosaku-shu vol.1, Hō to engi*, Tokyo.

Hokazono, K. 外園幸一.

1994 『ラリタヴィスタラの研究 上』 *Lalitavistara no kenkyu*, part 1, Tokyo.

Honjo, Y. 本庄良文.

1983 シャマタデーヴァの倶舎論註 —— 根品 (5) —— Śamatadeva no Kusharon chu, Konpon (5), 『法然学会論叢』 *Honen gakkai ronso* 4.

1989 『梵文和訳・決定義経・註』 *Bon-bun wayaku ketsujogikyo chu*, Kyoto.

1990 シャマタディーヴァの伝える阿含資料 —— 世品 (3) —— Śamatadeva no tsutaeru agon shiryō — sehon (3) —, 神戸女子大学紀要 *Kōbe joshidaigaku kiyō* 24L.

Ichigo, M. 一郷正道.

1985 『中観荘厳論の研究』 *Chuganshogonron no kenkyu*, Kyoto.

Ichishima, S. 一島正真.

1986 『菩提行経』 と 『大乗宝要義論』 との関係について Bodaigyokyo to Daijo-hoyogiron tono kankei ni tsuite, 大正大学研究紀要

Taishodaigaku kenkyu kiyo 72.

Inada, K.K.

1970 *Nāgārjuna, A Translation of his Mūlamadhyamakakārikā with an Introductory Essay*, Tokyo.

Ishikawa, M. 石川美恵.

1990 *A Critical Edition of the sGra sbyor bam po gnyis pa*, Tokyo.

Isoda, H. 磯田熙文.

1992 Ratnākaraśānti, 『Śuddhamatī』 第II章 (2) Ratnākaraśānti' s Śuddhamatī chapter II (2), 成田山仏教研究所紀要 *Naritasan bukkyo kenkyujo kiyo* 15.

Jacobi, H.

1932 *Triṃśikāvijñapti des Vasubandhu*, Stuttgart.

Jaini, P.S.

1979 *Sāratamā, a pañjikā on the Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā Sūtra by ācārya Ratnākaraśānti*, Patna.

Johnston, E.H.

1950 *Ratnagotravibhāga Mahāyānottaratantraśāstra*, Patna.

Joshi, L.M.

1965 *Śāntideva's Śikṣāsamuccaya-kārikā*, Sarnath.

Kalupahana, D.J.

1986 *Nāgārjuna : The philosophy of the Middle way*, Albany.

Katsumata, S. 勝又俊教.

1961 『仏教における心識説の研究』 *A Study of the Citta-vijñāna Thought in Buddhism*, Tokyo.

Keenan, J.P.

1992 *The Summary of the Great Vehicle*, Berkley.

Kitagawa, H. 北川秀則.

1985 『インド古典論理学の研究』 *Indo koten ronrigaku no kenkyu.* repr., Tokyo.

la Vallée Poussin, L.de.

1977 *Mūlamadhyamakakārikās de Nāgārjuna avec la Prasannapadā commentaire de Candrakīrti, repr.*, Tokyo.

Lamotte, E.

1949 *Le traité de la grande vertu de sagesse*, tome 1, Louvain.

1970 *Le traité de la grande vertu de sagesse,* tome 3, Louvain.

1973 *La somme du grand véhicule d'Asaṅga, 2* tome, repr., Louvain.

1980 *Le traité de la grande vertu de sagesse,* tome 5, Louvain.

Law, N.N.

1957 *Sphuṭārthā Abhidharmakośa-vyākhyā of Yaśomitra,* with N.Dutt, Calcutta.

Lévi, S.

1932 *Matériaux pour l'etude du système vijñaptimātra,* Paris.

Lindtner, Chr.

1982b *Nāgārjunas Filosofiske Værker,* Kφbenhavn.

Mano, R. 真野龍海.

1972 『現観荘厳論の研究』 *Genkanshogonron no kenkyu,* Tokyo.

Matsunami, Y. 松濤泰雄.

1990 八施について Hachi-se ni tsuite, supplement of Shomonji Kenkyukai (1990).

Mimaki, K. 御牧克己.

1989 *Three Works of Vasubandhu in Sanskrit Manuscript,* with M.Tachikawa and A.Yuyama, Tokyo.

Mitra, R.

1980 *The Lalita Vistara,* repr., Osnabrück.

Mizuno, K. 水野弘元.

1978 『パーリ仏教を中心とした仏教の心識論』 *Pāli bukkyo wo chushin toshita bukyo no shin-shiki-ron,* Tokyo.

Mochizuki, Kaie. 望月海慧.

1994 Ratnākasaśānti's Sūtrsamuccayabhāṣyaṃ Ratnālokālaṃkāra (Ⅱ), 棲神 *Seishin* 66.

Mochizuki, Kaishuku. 望月海淑.

1980 『法華経における信の研究序説』 *Hokekyo ni okeru shin no kenkyu josetsu,* Tokyo.

Müller, F.M.

1984 *Buddhist Technical Terms,* annoted by K.Kasawara, ed. with H.Wenzel, repr., Delhi.

Nagao, G. 長尾雅人.

1964 *Madhyāntavibhāgabhāṣya,* Tokyo.

1976 中辺分別論 Chuhenfunbetsuron, 『大乗仏典 15 世親論集』 *Daijo butte 15 Seshin ronshu,* Tokyo.

1987 『摂大乗論 下』 *Shodaijoron ge,* Tokyo.

Nakamura, H.

1975 『仏教語大辞典』 *Bukkyo-go daijiten, 3* vols., Tokyo.

1994 『中村元選集〔決定版〕第16巻 原始仏教の思想Ⅱ』 *Nakamura Hajime senshu (kettei-ban) vol.16, Genshi-bukkyo no shiso* Ⅱ, Tokyo.

Namdol, G.

1988 *Dharmasaṃgrahaḥ of ācārya Nāgārjuna,* Sarnath.

Nobel, J.

1950 *Suvarṇaprabhāsottamasūtra, 2. Band, Wörterbuch Tibetisch-Deutsch-Sanskrit,* Leiden.

Obermiller, E.

1931 The Sublime Science of the Great Vehicle to Salvation Being a Manual of Buddhist Monism, *AO* 9.

Okada, S. 岡田繁穂.

1994 『阿毘達磨集論』における仏徳の記述 The description of vaiśeṣika-guṇas in the Abhidharmasamuccaya, 『インド哲学仏教学研究』 *Studies in Indian Philosophy and Buddhism, Tokyo University* 1.

Okada, Y. 岡田行弘.

1989 三十二大人相の系統（Ⅰ） The Grouping of the 32 *mahāpuruṣa-lakṣaṇa* (Ⅰ), *IBK* 38-1.

1991 八十種好 Asītyanuvyañjana, 前田専学博士還暦記念論集〈我〉の思想 *Ātmajñāna, Prof.S.Mayeda Felicitation Volume,* Tokyo.

1991b 三十二大人相の系統（Ⅱ） The Grouping of the 32 *mahāpuruṣa-lakṣaṇa* (Ⅱ), *IBK* 40-1.

1992 三十二大人相の系統（Ⅲ） The Grouping of the 32 *mahāpuruṣa-lakṣaṇa* (Ⅲ), *IBK* 41-1.

Pandey, R.

1984 *Major Hetvābhāsas,* Delhi.

Pradhan, P.

1950 *Abhidharma Samuccaya of Asaṅga,* Santinketan.

Rahula, W.

1971 *Le compendium de la super-doctrine (philosophie) (Abhidharma-samuccaya) d'Asaṅga,* Paris.

Régamy, K.

1990 *Philosophy in the Samādhirājasūtra,* repr., Delhi.

Saigusa, M.

1969 *Studien zum Mahāprajñāpāramitā (upadeśa) śāstra,* Tokyo.

1985 『中論偈頌総覧』 *Nāgārjuna's Mūlamadhyamakakārikā-s,* Tokyo.

Sakurabe, T. 桜部建.

1975 『仏教語の研究』 *Bukkyo-go no kenkyu,* Kyoto.

Samtani, O.H.

1971 *The Arthaviniścayasūtra & its Commentary,* Patna.

Samten, N.

1990 *Ratnāvalī of ācārya Nāgārjuna with the commentary by Ajitamitra,* Sarnath.

Sastri, N.A.

1975 *Satyasiddhiśāstra of Harivarman,* vol.1, Baroda.

1978 *Satyasiddhiśāstra of Harivarman,* vol.2, Baroda.

Śāstri, S.B.

1953 Abhidharmāmṛta of Ghoṣaka, *Visva-Bharati Studies* 17.

Śastri, S.D.

1985 *Mahāyānasūtrālaṅkāra by ārya Asaṅga,* Vārānasī.

1987 *Abhidharmakośa and Bhāṣya of ācārya Vasubandhu with Sphutārthā Commentary of ācārya Yaśomitra,* Varanasi.

Schmithausen, L.

1971 Philologische Bemerkungen zum Ratnagotravibhāga, *WZKSO* 15.

Shimokawabe, K. 下川辺季由.

1976 『五蘊論』研究 (一) "Gounron" kenkyu I, with H. Takayama, 『仏教学論集』 *Bukkyo-gaku Ronshu* 12.

Shinoda, M. 篠田正成.

1988 雑集論・中辺分別論・荘厳経論における三十七菩提分法について Bodhipakṣa-dharma in the Samuccaya, the Madhyāntavibhāga and the Sūtrālaṃkāra, 『筑紫女学園短大紀要』 *Journal of Chikushi Jogakuen Jounior College* 23.

Stcherbatsky, T.

1970 *Abhidharmakośakārikāḥ И Abhidharmakośabhāṣyam*, BBu 20, repr., Osnabrück.

Suzuki, D.T. 鈴木大拙.

1934 *An Index to the Lankavatara Sutra*, Kyoto.

Tachikawa, M.

1971 A Sixth-Century Manual of Indian Logic, *JIP 1*.

Taga, R. 田賀龍彦.

1974 『授記思想の源流と展開』 *Juki-shiso no genryu to tenkai*, Kyoto.

Takasaki, J. 高崎直道.

1966 *A Study on the Ratnagotravibhāga*, Roma.

1988 『如来蔵思想 I』 *Nyoraizo shisō 1*, Tokyo.

1989 『宝性論』 *Hōshōron*, Tokyo.

Tamura, C. 田村智淳.

1975 『大乗仏典 11 三昧王経』 *Daijo butten 11 Samādhirājasūtra*, 2 vols, with M.Ichigo, Tokyo.

Tanaka, K. 田中教照.

1993 『初期仏教の修行道論』 *Shokibukkyō no shugyō dō ron*, Tokyo.

Tanji, T. 丹治昭義.

1988 『中論釈 明かなことば I』 *Prasannapadā Madhyamakavṛtti* I, Fukita.

Tatia, A.

1976 *Abhidharmasamuccaya-bhāṣyam*, Patna.

Teramoto, E.

1977 『梵蔵漢和四訳対照 安慧造・唯識三十論疏』 *Bon-zou-kan-wa shiyaku taisho Anne zō yuishiki sanjuron-sho*, repr., Tokyo.

Thurman, R.A.F.

1979 *Maitreyanātha's Ornament of the Scriptures of the Universal Vehicle*, American Institute of Buddhist Studies.

Tripāṭhī, R.

1984 *Vijñaptimātratāsiddhiḥ of ācārya Vasubandhu*, Leh.

Ui, H.

1952 『安慧・護法 唯識三十頌釈論』 *Anne/Goho yuishikisanjuju-shakuron*, Tokyo.

1961 『大乗荘厳経論研究』 *Daijoshogonkyoron kenkyu*, Tokyo.

1961b 『梵漢対照　菩薩地索引』 *Bon-kan taisho bosatsuji sakuin,* Tokyo.

1966 『宇井伯壽著作選集 I　佛教論理学』 *Ui Hakuju chosaku-shu vol.1, Bukkyo ronrigaku,* Tokyo.

Umino, T. 海野孝憲.

1971 ラトナーカラシャーンティの三性論　Rathākaraśānti's Trisvabhāva Theory, *IBK* 20-1.

1993 Prajñāpāramitopadeśa の和訳解説　Prajñāpāramitopadeśa no wayaku kaisetsu, 『名城大学人文紀要』 *Meijo daigaku jinbun kiyo* 46.

Vaidya, P.L.

1960b *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā,* Darbhanga.

1961 *Śikṣāsamuccaya of Śāntideva,* Darbhanga.

Walleser, M.

1914 *Prajñāpradīpa, A Commentary on the Madhyamakasūtra by Bhāvaviveka,* Calcutta.

Waren, H.C.

1989 *Visuddhimagga of Buddhaghosâcaruya,* repr., Delhi.

Winternitz, M.

1930 *Der Mahāyāna-Buddhismus nach Sanskrit- und Prākrittexten,* Tübingen.

Yamaguchi, S. 山口益.

1953 『世親唯識の原典解明』 *Seshin yuishiki no genten kaimei,* with S.Nozawa, Kyoto.

1965 『漢蔵対照　弁中辺論』 *Kan-zo taishō Benchūhen ron,* Tokyo.

Yamazaki, M. 山崎守一.

1976 大乗集菩薩学論　その一　Śikṣśsmuccaya sono ichi, 『中央学術研究所紀要』 *Chuogakujutsu kenkyujo kiyo* 5.

Yasumoto, Y. 泰本融.

1987 『空思想と論理』 *Ku-shiso to ronri,* Tokyo.

Yeh, Ah-yueh 葉阿月.

1984 A Study of the Theories of Yāvad-bhāvikatā and Yathāvad-bhāvikatā in the Abhidharma-samuccaya, *JIABS* 7-2.

◇編集後記◇

『棲神』六七号をお届けいたします。

各分野における新鮮な研究成果がこうして続々と発表されますことは、為法為山、ご同慶の至りで、そのご苦労に対し、会員諸賢と共に深甚の謝意を表するものであります。

さて、喜びのご報告を申し上げます。既に会員諸賢ご承知のごとく、「開宗七五〇年」の身延山の記念事業の一つとして、本学は、平成六年一二月二一日、学校法人身延山学園・「身延山大学仏教学部仏教学科」（定員四〇名）として、無事、改組転換を成し得、この四月、第一期の学生を迎え入れることと相成りました。これ一重に、ご本山当局・同窓会をはじめとする関係各聖・各位のご尽力の賜物と、感謝申し上げます。

では、経緯の大略を申し述べます。まず、平成五年四月末日、大学設置の趣旨・教育課程に主点を置いての第一次申請。同七月末の、法人の財政及びその運営を主としたところの追加申請。そして、同一〇月には、二度に亘っての大学設置審議会によるヒヤリング。越えて、平成六年一月七日には、「継続審査」の通知。これを承けて、同年六月末、教員の資格審査と、研究体制の確立の有無とを中心とする第二次申請。同九月二〇日及び一〇月二〇日の、二度に及ぶ大学設置審議会委員による実地調査と実地審査。以上の経緯を経ての「設置認可」でありました。

申すまでもなく、この四月に開校となります「身延山大学」は、伝統ある僧風教育をバックボーンとして、〝心の教育〟を信条とし、現代社会のニーズに応え得る人材の育成という認識に立っての改組転換でありました。従って、有為の人材を育成し、法器養成を至上としつつ、一般にも開かれた国際的な教育を旋せるような体制の構築こそが、本学の念願とするところのものであります。宮崎英修学長・仲澤浩祐学部長を陣頭に、全学を挙げて理念の具現に邁進する所存であります。どうぞ宜しくご後援賜りますよう、お願い申し上げます。

次いで、本年度の教員の動きについてご報告申し上げます。長い間、短大・高校の教壇にお立ちいただいておりました一宮嘉孝・山田是明の両先生には、一身上のご都合で、平成七年三月を以てご退職と相成りました。永年のご法労に対しまして深甚の謝意を表し、益々のご多祥を祈念申し上げます。翻って、平成六年四月一日付を以て、新たに間宮啓壬先生が奉職されました。ご専門は宗教学であります。何卒、よろしくご交誼の程、お願い申し上げます。

最後に、会費未納の方へ申し上げます。運営上、難渋致しますので、ご送金方、宜しくお願い申し上げます。

なお、短大としての『棲神』は本号を以て終りとなり、次号は名実共に一新されたものになろうかと存じます。乞うご期待。

（中條記）

執筆者（目次順）

望月海淑（身延山短期大学教授）
上田本昌（身延山短期大学教授）
桑名貫正（身延山短期大学助教授）
高橋堯昭（身延山短期大学教授）
町田是正（身延山短期大学教授）
中山光勝（身延山短期大学助教授）
奥野本洋（身延山短期大学助教授）
望月海慧（法華経文化研究所研究員）

「棲神」六十七号
平成七年三月二十五日　印刷
平成七年三月三十日　発行
編集兼発行者　宮崎英修
印刷者　宮田如龍
印刷所　甲府市中央一丁目十二―三十一　大宣堂印刷　電話（〇五五三）三五―三六〇二
山梨県身延山東谷（〒四〇九―二五）
発行所　身延山短期大学学会
振替（甲府）五―一二七五番
電話（〇五五六）二―〇一〇七

THE SEISHIN

The Journal of Nichiren and Buddhist Studies

No. 6 7

CONTENTS

Preface…… Eishū Miyazaki

The Way of Using the Word 'Hō (法)' in *Lotus Sutra*…… Kaishuku Mochizuki… *7*

The Mandala by Nichiren in the Latter of his Life (Ⅲ) …… Honshō Ueda… *23*

The Meaning of the Three Thousand Existences in One Thought in *Kaimoku-shō* (Ⅱ) …… Kanshō Kuwana… *39*

Motifs of Nāga and Medusa : A Comparative Cultural Study of the East and the West ……Gyōshō Takahashi… *57*

On the Consciousness of History in Ancient India…… Zeshō Machida… *81*

Historical Document of the Peasants' Uprising in Okayama Prefecture (V) …… Kōshō Nakayama…*103*

Founder's Hall at Kōzaseki (高座石) and its Followers…… Honyō Okuno…*113*

Ratnākaraśānti's Sūtrasamuccayabhāṣyaṃ Ratnālokālaṃkāra(Ⅲ)…… Kaie Mochizuki… 1

Edited by

Minobusan College

Minobu, Yamanashi, Japan.